その手の温もり～今でも、まだ～

霜月璃音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
その手の温もり～今でも、まだ～

【Ｎコード】
Ｎ０５９４Ｍ

【作者名】
霜月璃音

【あらすじ】
高校の入学式を迎えた、幼馴染の鈴花と龍也。常に一緒だった二人。それなのに……。

始まり

「おい、いつまで寝てるんだよ、ボケが！遅刻するだろうがっ！」
乱暴に起こす声と、体を揺する手……。
「ほえ……？」
目を覚ました彼女を覗き込む彼は、すでに制服に着替えていた。
「ボケた声出してんじゃねえよ！今日、入学式だろうが！」
「あぁーっ！」
その言葉に慌てて起き上がり、時計を見る。七時二十分。四十分には家を出なければ、学校には間にあわない。慌ててベッドを飛び出す。
「どうしようーっ！」
パニックを起こす彼女に、彼は冷静に答える。
「まず顔を洗って来い。その間に制服出しておいてやるから。クローゼットの中だろ？」
「うんっ！」
彼女は寝巻にスリッパという格好でパタパタと駆けて行った。溜息をついてからクローゼットを開ける。彼女のお気に入りの洋服と一緒に、真新しい制服が掛けられていた。彼らは、今日から高校生になるのだ。
「……。」
彼女の姿見に映った自分を、なんとなく複雑な気分で見つめる。高校生になったからと言って、何も変わっていない。彼女との、距離も……。騒々しい足音が戻って来た。
「制服着なきゃ！」
「ほら、出しておいたからさっさと着ろ。」
「あっち向いてなさいよ！」
そう言って自分とは反対側を指差す彼女に不平をもらしながらも、それに従う。そもそも、ここは普通は出て行け、とか言う場面じゃ

ないのか？そんなことを、考えながら……。
「誰もお前の脱ぐ所なんか見たくねえよ……。」
「言ったわねーっ！」
「ほら、後十分だぞ。」
背中を向けていても、彼女の表情はわかっている。真っ赤になって怒る彼女に、時間という現実を突き付ける。
「ふえーっ！」

結局、彼らはなんとか通学電車に飛び乗った。七つ先の駅で降りて、徒歩で学校に向かうのである。
「ま、間に合ったぁ……。」
電車の戸が閉まってから、彼女がそう安心したかのように溜息をついた。
「初日からこれだと、先が思いやられるな……。ほら、飯食え。」
彼の鞄から、サンドウィッチが出て来た。おそらく、彼女が七時になっても起きない時点で用意してもらったに違いない。
「うん、ありがとう、龍也（りゅうや）。」
彼の手からそれを受け取ると、彼は彼女の鞄を受け取って脇に抱え、電車の揺れで彼女の体がふらふらとしないように肩を引き寄せ、支えてくれた。
「大体、お前がこんな遠くの学校を選ばなきゃそれで……。せめて車で送ってもらうようにするとか……。」
「だって嫌なんだもん、送ってもらうの。」
彼女がそう言った理由。それは……。彼女の家が、色々と普通ではないということだった。たくさんの使用人や、強面の男たちが出入りする家……。あちこちに傷のある者も、見た気がする……。彼女の祖父が、それを統括していたのだ……。父が後を継いでからは、巨大な建設会社としてその名を知られている。中学校までは、家庭の事情せいで友達もできず、とても寂しい思いをした。だから遠く離れた高校を受験して、わざわざ通うことに決めたのだ……。

「俺にはいい迷惑だぜ。」
彼女をそんな遠くまで一人で通わせると言うわけにもいかず、ボディーガードとして雇われている彼も同じ運命を辿らされた。小学校の頃からずっと、彼は彼女の世話を延々と続けているのだ……。
「……ほら、着くぞ。食い終わったか？」
「うん！」
元気にそう答えて、彼の手から鞄を受け取った。電車の戸が開く。
「わわわっ！」
人の波に流されて、自分が向かうべき改札口と反対の改札に向かっていく彼女の手を、彼がその波から引っ張り上げた。
「どこ行くんだよ、ボケ。」
「ちょっと流されちゃっただけでしょー！」
頬を膨らませる彼女の手を握ったまま、彼は歩き出した。改札を通って、駅の構外に出る。入学式にふさわしい、暖かな春の陽気だ。
「わあ、気持ちのいい朝だね！」
「誰かの寝坊がなければな。」
ニコニコと笑う彼女に、間髪入れずにそう言う。さすがの彼女も、それには言葉がないようだ。黙って抗議の視線だけをこちらに向けている。そうこうしている内に、学校の正門が見えて来た。人だかりができている。どうやら、クラス分けを発表してあるらしい。
「高梨鈴花（たかなしすずか）、高梨鈴花……。あった、私、A組。……げ？」
「なんだよ？」
奇妙な声を上げた彼女に、そう訊ねてから理由を知る。
「鷹取龍也（たかとりりゅうや）、A組……。しかも、出席番号も前後じゃねえか。面倒くせえな。」
「こんなのなしだよぉ……。中学校までで終わりだと思ってたのに。だって、高校は八クラス、中学校の倍もクラスがあるんだよ？それなのに……。」
そう、彼らは小、中学校と九年間同じクラスで、出席番号も前後だった。

「仕方ねえだろ、諦めろ。この方がお前の親父さんも安心するだろうし。」
一人娘の彼女を、父親はとても大切にしていた。
「まあ、そうだけど……。」
「ほら、教室行くぞ。」
納得がいかない様子でいる彼女にそう提案して、ずるずると引きずって歩いた。

教室に入った二人は、一緒に席に着いた。出席番号順なので、龍也が前で鈴花が後ろだ。
「どうしよう……。龍也が前に座ったら、黒板が見えないよぉ……。」
龍也は身長百七十六センチと非常に長身だったが、それに対する鈴花は百六十二センチとそこまで大きいと言う訳ではなかった。
「心配するな。俺、授業中は寝てるから。」
「出た―っ！天才の嫌味っ！」
龍也は小、中学校とあまり褒められた授業態度ではなかった。しかし、その成績は常にトップクラス……。たった一つ、英語を除いて……。
「せめて英語の授業位起きてなさいよ！」
「言われなくてもわかってるって。」
鈴花はこの時気付いていなかった。二人を見つめる、多くの好奇の視線に……。

荘厳な雰囲気の式場に、足を踏み入れる。保護者や上級生たちの間を通って、着席した。隣に緊張で固まりながらぎこちない動作で座った鈴花に、龍也は思わず笑みをこぼした。
「な、何？」
うっすらと緊張で頬を赤く上気させている彼女が、問いかけて来た。
「いや、柄にもなく緊張してるなぁ、と思って……。」

「放っておいてよ！」
小声で、なおかつほたんど唇を動かさないでそう呟いて、彼女は前を向いた。開式の礼の合図で、全員が起立して礼をし、再び着席した。校長先生の、長い挨拶が始まった。あまりにも心地良い、声音とリズム……。彼女は、必死で睡魔と闘っていた。その後で、在校生代表の挨拶。
「ふわぁ、あ……。」
龍也は、隣で欠伸をしていた。それを横目で軽く睨んで、再び視線を前に戻す。信じられない言葉が、彼女の耳を通って機能を停止しかけていた脳まで届いた。
「続きまして、新入生代表のあいさつ。新入生代表、鷹取龍也さん、お願いします。」
「はい。」
寝ぼけていて聞き間違えたんだ、と思っていた彼女だったが、隣の彼が本当に立ち上がった。先程まで欠伸をしていたとは思えないほど、精悍な顔つきで歩き、壇上に登る。深く一礼してから、彼の唇が動き始めた。
「本日は、我々新入生のために……。」
まさかのカンペなし。周囲の女の子が、彼を熱っぽい目で見つめている……。まずい。
「……。」
彼女の波乱の高校生活が、幕を開けた。

始まり（後書き）

こんにちは、霜月璃音です。
様々なジャンルの物を書いて見たいと思って、この作品を書くことになりました。
別の連載中の作品、異国恋歌～風空の姫～との二本立てとなりますので、きちんと両立できるか少々不安を感じております。
精一杯書かせていただきますので、よろしくお願いします。

観覧車

教室に戻った一年A組の生徒たちは、ある者は友達作りに、またある者は久しぶりに会った友達との会話に精を出していた。
「……。」
誰にどう話しかけていいかわからない鈴花は、とりあえず自分の席で成り行きを見ていた。龍也は、すでに男子の友達も女子の友達もたくさん作っていて、何人かとアドレスも交換していた。
「ねえ、高梨さん、だよね？」
「えっ？」
三人の女の子に話しかけられて、鈴花は驚いた。
「はじめまして！私、井上咲子（いのうえさきこ）。こっちが武川葵（たけかわあおい）で、こっちが林原里奈（はやしばらりな）だよ。私たち、第一中出身なの。高梨さんは？」
「あ、えっと……東が丘中……。」
人のよさそうな三人に、鈴花は緊張しながらも答えた。三人が顔を見合わせる。
「それ、どこ……？」
「あ、電車で駅七つも離れてるから、わからないよね……。」
慌てて付けたした鈴花に、三人が三人笑顔で答えてくれた。
「そっか、そんなに遠くから来てるんだ。とにかくよろしくね、鈴花。」
名前で呼ばれたと言うことに、鈴花は満面の笑みを浮かべた。
「うん！」
「ねえ、ところで……。」
咲子が、ずいっとその身を乗り出した。他の二人も、同じようにそうする。
「鷹取君とは知り合いなの？朝、一緒に学校来てたよね？」
「え、あ、龍也のこと？」
鷹取君、という耳慣れない呼び方に一瞬戸惑ったが、やっと状況を

飲み込んでから問いを返す。
「うわっ、名前で呼んでるの？まさか、彼氏っ？」
「えっ、あ、そうじゃないよ。龍也は……。」
一瞬困った。彼は、彼女のボディーガード。だが当然、そんな答え方はできない……。
「幼馴染、だろ？」
助け船を出してくれたのは、噂の本人だった。
「俺、四つの時からこいつの面倒見させられてるんだよ。ドジ列伝なんか挙げたら、キリないぜ？」
「失礼ねっ！」
真っ赤になって怒る彼女に、教室中から笑い声が上がった。どうやら、龍也のおかげで彼女もクラスの輪に入れたようだ。

「ふわあ、疲れた……。」
部屋に入るなり、鈴花はそう言ってベッドに倒れ込んだ。
「誰かさんが朝寝坊なんかしたせいだろ？まったく……。」
そう言って龍也は自分の部屋の戸に手をかけた。鈴花の部屋の戸を開けるとすぐ右に戸があり、その奥は龍也の部屋となっていた。
「制服、さっさと着替えろよ。」
そう言い残して、彼はその奥へと姿を消した。仕方なく彼女も起き上がって着替えを終え、再びベッドに倒れ込む。枕を、ギュッと抱き締めた。
「ねえ、龍也。」
「何だよ？」
天井付近は壁がなく、二部屋は空間的には繋がっているので、彼らは顔を合わせなくても会話をすることができた。
「どうして、新入生代表の挨拶のこと、教えてくれなかったの……？」
「別にお前に言ったからって、いいことないだろ。」
「そうだけど……。」
隠しごとをされていたみたいで、なんとなく嫌。鈴花はそう思った

が、そんなことを言ってわがままを言う意味もわからなかったので、黙っていた。龍也が、部屋から出て来た。
「ほら、買い物行くんだろ？」
「うん。」
そう答えて起き上がり、鞄を肩にかけた。今度の週末にある新入生合宿に持っていく、鞄や小物を買いそろえに行くのだ。
「よおし、ついでに門限ギリギリまで遊んじゃお！」
「俺は付き合わねえぞ。」
深く溜息をついた彼を、鈴花がずるずると引きずるような形で出発した。

「まずは、えっと……。」
必要な物のメモを見ていた鈴花の手元を、龍也がひょいと覗き込んだ。
「最初は靴だろ、一番近いから。その後鞄で、洗面道具？これは最後の方がいいかもな。フロアが三階だから一番遠いし。」
「……でも、重くない？洗面道具が一番軽いよ？」
「……お前、どうせ自分で持つ気ないだろ……？」
彼の言葉に苦笑いとともに素直に頷いて、二人で靴売り場に向かう。なんでも一度に揃うだろう、ということで、彼らは家から少し遠いデパートにまで足を伸ばしていた。
「うわあ、これ、かわいい！」
彼女がそう言ったのは、リボン飾りが付いている淡いピンクのパンプスだった。
「ほお、それか……。それで転ばないでハイキングができるなら、俺が買ってやろうか？」
「うう……。」
彼のとびっきりの嫌味に、彼女は泣く泣くそのパンプスを商品棚に戻した。
「そんなのでハイキングができる訳ねえだろ。」

「うん、確かに……。」
彼の言葉にしゅんとして、運動靴を見に歩く。
「……どんなのがいいのかよくわからない……。」
売り場を一通り回ってから、鈴花はそう溜息をついた。龍也も溜息をついてから、答えてやる。
「普通に考えろよ……。軽い方が良いに決まってるだろ。……まあ、このへんかな？」
そう言って彼が、一足の靴を持ち上げた。軽量設計がされている物が並んでいる棚から、彼女好みのデザイン、色の物を取り出したのだ。彼女の好みを熟知していなければできないような、早業……。
「うん、それにする！」
即決。逆に、こうでもしないと時間がかかり過ぎるのだ……。支払いを済ませて、次の鞄売り場に向かった。そこでは、彼女は自分の力で即決した。一目見て気に入ってしまったリュックと旅行鞄が、彼女が探していた位の大きさだったのだ。そのまま洗面道具も買った二人は、フードコートで夕食のハンバーガーを食べることにした。
「うーん、どうしようかな……。」
「何がだよ？」
飲み物を一口含んでから、彼女が続きを話す。
「この後。やりたいことがいっぱいあるんだけど、全部はできないだろうし……。」
「例えば？」
とりあえず、訊いてみる。
「ここの屋上の観覧車に乗りたいの。服も買いたいし、映画も見たいし……。後、六階のカフェでケーキも食べたい！……龍也は？」
一応、彼の意見も訊いてみる。
「面倒だから帰りたい。」
「却下。」
訊くだけ訊いて、彼の意見は無視。そして、また一人でブツブツと言いながら悩む。仕方なく、彼は彼女に付き合ってやることにした。

「映画は諦めろ、時間ねえし。まずぶらぶらと服見て、その後六階のカフェ。で、頃合いを見計らって最後に観覧車。これでいいだろ？」
「うん、それでいい！」
ニッコリと笑う彼女に、俺は面倒なんだがな、と言う。だが、本当は彼女のそんな表情が見られたことが嬉しかった。十二年前に両親を事故で亡くした彼は、鈴花の遊び相手、後にはボディーガードとして彼女の家に引き取られた。両親の死により、子供心に深い傷を負っていた彼。その傷を癒してくれたのは、昔から彼女の笑顔だった……。
「行くか？」
「うん。」
彼の言葉で立ち上がって、トレーを片手で片付ける。彼女が食べ終わってから、少し休むのを見計らってのことだった。

結局、服は見るだけに留まった。悩みに悩んだ末に、彼女は買わない、ということを選択したのだ。六階のカフェに入って、メニューを開いた。
「うーん……。フルーツタルト、かなぁ……。でも、レアチーズケーキも捨てられないし……。」
真剣な顔で、メニューを睨む。その様子に、店員も彼も呆れ顔で笑った。
「ストロベリーティーセット一つと、ホットアメリカンのセット一つ。ケーキはフルーツタルトとレアチーズで。」
「かしこまりました。」
龍也の言葉を受けて、店員は下がって行った。
「実物が来てから悩め。日が暮れるどころか、明日の朝になっちまう。」
「……どうして私がストロベリーティー頼むってわかったの？」
じとーっと、白い目で彼を見る。

「お前、単細胞だからな。」
「何言うのよ！失礼な！」
彼女が怒っているところに、先程の店員が注文した物を持ってやって来た。
「失礼いたします。……ご注文のお品は、以上でお揃いですか？」
「はい。」
テーブルの上に並べられた物を見まわしてから、鈴花が答えた。店員がごゆっくりどうぞ、という言葉とともに一礼して、また戻って行く。
「……決めた、こっち！」
彼女はそう言ってフルーツタルトの方に手を伸ばした。彼が、残ったレアチーズケーキの方を手元に引き寄せる。紅茶に口を付けた彼女の目の前に、フォークが差し出された。その先には、一口分のレアチーズケーキ……。
「……いいの？」
「さっさとしろ、手がだるい。」
「うんっ！」
明るく笑ってから、口を開ける。彼女の口の中に、一口分のレアチーズケーキが転がった。
「おいしい！」
「そりゃ良かったな。」
いかにもだるそうにそう答えてから、自分も口にケーキを入れる。
「……甘っ。」
「ケーキだもん、当たり前でしょ。」
彼は、実は甘い物が少々苦手だった。レアチーズケーキならなんとかなるかと思ったが、どうやら誤算だったようだ。
「……やる。」
「いいの？わーい！」
本当に嬉しそうにケーキを頬張る彼女を見ながら、思う。一体、あの小さな体のどこにあれだけの量が入るのだろうか……？」

「何？」
どうやら、自分を不思議そうに見つめる視線に気が付いたようだ。彼女が顔を上げた。
「いや、それだけ食ってるのにぺったんこのままだよなぁ、と思って……。」
「死ね、変態！」
赤くなって憤慨する様子に、思わず苦笑が漏れた。彼女の携帯が鳴った。
「誰だよ？」
「咲子ちゃん。さっきメールが来てたの。授業変更のやつ。」
「ああ、英語がホームルームになるんだろ？」
そう言った彼は、どことなく嬉しそうだった。
「龍也、嬉しそうだね……。」
「英語がなくなったんだぜ？これ以上いいことなんてねえだろ。」
「本当に嫌いだよね、英語……。」
思わず笑ってから、鈴花はまた紅茶に口を付けた。

「わぁーっ、綺麗！ねえ見てっ！綺麗！」
「はいはい、見てる見てる……。」
観覧車に乗りこむなり、鈴花はそう歓声を上げ、窓に張り付いた。彼がポツリとつぶやく。
「何とかと煙は高い所に登るっていうの、本当らしいな……。」
「そんなこと言わないの！ここ、雑誌にも載ってたの。本当に綺麗……。」
うっとりと夜景を眺める彼女の横顔の方が、彼には見ごたえがあった。夜景を見下ろすその瞳に色とりどりの光が映って、どことなく艶めいている……。また彼女の携帯が鳴った。鞄から取り出して、それを開く。
「……だから違うってば。デートなんかじゃ……。」
「デート？」

彼が軽く片眉を上げて問うのを訊いてから、自分がメールの内容を口に出していたことに気が付いた。
「……咲子ちゃんにね、今龍也と買い物に来てて、これからこの観覧車に乗るってメールしたの。そしたら、デートのお邪魔してごめんね、って……。違うのに……。」
「……。」
夜景を見下ろしてしょんぼりと俯く彼女に、正直言ってあきれる。普通に考えれば、こんな時間まで二人でぶらぶらしていて夜景を見に観覧車に乗る、だなんて言ったら、デート、と思われてもおかしくない。それに気付かない、彼女の方がおかしいのだ……。
「ねえ、龍也。」
「何だよ？」
彼女の言葉に、窓の外を見つめたまま面倒そうに答える。
「龍也、彼女はいないの？」
ガクン、と体から力が抜けた。彼女の鈍さには、底という物がないのだろうか……？
「いたらお前なんかとこんな所来ねえし……。」
「じゃあ、どんな人が好み？」
窓の外を見下ろすその瞳は、大人びて見える。自分の気持ちは、彼女には気付かせたくはない……。一緒にいるあの部屋が、住みにくくなってしまうから……。
「美人で大人な奴。後、わがままを言わない奴。」
「そっか……。」
わざと、彼女とは正反対の物を挙げた。彼女はそれなりに整った顔立ちをしていたが、美人、というよりはかわいらしい、といった感じだったし、龍也に対しては言いたい放題わがままを言っていた。彼女の目が、悲しげに伏せられた。チクリ、と何かが心の中で痛む。それでも、表面には明るさだけを浮かべていた。
「本当に綺麗だね……。」
「ああ……。」

気付けば、彼らが乗っているゴンドラは頂上付近まで昇って来ていた。雑誌の紹介文を思い出して、彼に目を向ける。
「ここねぇ、ジンクスがあるんだって！」
「へえ……。」
気のなさそうな返事。それでも、そんなことはおかまいなしに続きを話す。
「ここの頂上で最初のキスをしたカップルは、結婚するんだって！だから私も、高校ではかっこいい人を見つけて……っ！」
夢いっぱいに語る瞳が、大きく見開かれた。ケーキが残っていたのだろうか、口の中が甘い……。彼女の後頭部を引き寄せた彼の手が、放された。同時に、唇も離れる。彼女の口の中に、切ない甘さを残して……。不思議と、嫌ではなかった。むしろ、自然な感覚……。
「な、何するのよ、変態！」
「いや、アホな夢を見てるらしいから、目覚めさせてやろうと思って。」
意地悪に笑う彼を、ポカポカと殴りつける。
「馬鹿っ！返せ、人のファーストキス！」
「ファーストキス？そりゃ儲けた。」
ペロッと舌を出して笑う彼のその様子に、彼女は泣き寝入りを余儀なくされた。反省の様子は、全くない……。
「ううっ……。よりにもよって龍也に……。」
「うるせえな、文句ねえだろ。今日一日お前に散々付き合わされた駄賃だ。」
「ううっ……。高くついた……。」
拗ねたように窓の外を見下ろす彼女に、彼は曖昧な笑みを浮かべた。本当はあの瞬間、自分の中に生じた衝動を抑えることができなくなってしまったのだ。十二年間、ずっと抑えていられたのに……。まだ赤い顔をして眉間にしわを寄せている彼女に目を向ける。彼女は、気付いてしまっただろうか……？
「何見てるのよ、変態。」

じとーっと彼を見上げて来る瞳に、確信する。鈍い彼女が、先程の事だけで彼の想いに気付いたはずがない、と……。
「いや、二目と見られぬ不細工な顔だな、と思って……。」
「さようならっ。」
頬を膨らませた彼女に、意地悪く笑って訊ねる。
「俺がいなくても帰れるって言うんだな？なあ、方向音痴の姫君。」
「う……。」
自信は、ある。ただし、帰れない方の自信……。彼女が返答に詰まっている間に、観覧車が一周し終えた。龍也が先に降りる。
「わ、わ、わ！」
ゆっくりだが動いている。鈴花は、降りられずに躊躇していた。ふわり、と彼女の体が持ち上がる。
「さっさと降りろ、アホ。迷惑だろうが。」
悪態をつきながらも、彼女の体をこの上なく優しく下ろしてやる。観覧車の管理係のおじさんも、順番を待っているカップルたちも、皆が二人を見ていた。
「ほら、さっさと帰るぞ。」
荷物置き場に預けていた鈴花の買い物を全部持って、彼は先に歩いて行ってしまった。
「あっ、待ってよ！」
慌てて追いかけて、彼の隣に並んだ。付かず離れずの距離の、いつもの歩き方だった。

部活

次の日は、鈴花は寝坊することなく起きた。ゆっくりと朝食を摂ってから、鞄を持つ。龍也と二人揃って家を出た。駅までは徒歩である。

「今日は部活の勧誘会があるんだったよね？」

「ああ。お前、どうせまたサッカー部のマネージャーするんだろ？」

鈴花は小学校五年の時からずっと、小、中学校のサッカー部のマネージャーをしていた。少しでも友達ができる機会を増やそうと考えたためである。あまり、いい結果ではなかったが……。そのせいで、龍也はずっとサッカーをやっていたのだ。しかし、彼女は首を横に振った。

「じゃあ、何やるんだよ？お前、運動はまったくもってできないだろ？」

「野球部のマネージャー。」

「なんでサッカーじゃダメなんだよ、面倒くせえ……。」

彼女のボディーガードとして雇われている以上、彼女と同じ部活に入らされることは仕方ない。だが、正直言って本当に面倒くさい。新しく用具を買いそろえに行ったりするのが……。

「だって、甲子園に行きたいんだもの！龍也、甲子園に連れて行って！」

「……野球マンガのヒロインみたいなこと言うな、アホ。そんなに行きたいなら連れて行ってやるよ、今度の休みにでも。」

「その行きたいじゃなーいっ！」

頬を大きく膨らませて両腕を大きく上下に振る、お決まりの仕草。彼は、それに笑いかけた。

教室に二人が着いて着席すると、しばらくして予鈴が鳴った。先生が入室して来て号令をかける。どうやら、そのまま一時間目のホー

ムルームに入るらしい。
「まずクラス委員長ですが、誰か立候補する人はいますか？いなければ、今回は最初ということで、誰を推薦すればいいか皆わからないでしょう。そこで、先生が推薦しようと思うのですが……。」
誰もそれに反対はしない。自分でなければ、誰でもいい……。
「……いないようですね。それでは、今回は鷹取君と中島さんにお願いしようと思います。」
歓声と拍手が起きて、先生の手招きで二人が前に出た。一言ずつ挨拶をする。
「……面倒だからやりたくねえけど、先生のご指名、ということで仕方なくやります。俺が仕事してなかったら誰かやっておいて下さい。以上です。」
龍也のその言葉に、どっと笑いが溢れる。龍也が本当に面倒くさがっていることに気付いているのは、多分、鈴花だけ……。
「いきなりこんな大役を当てられて緊張しています。どうぞよろしく。」
中島めぐみは、美人で勝ち気そうな人だった。ふと、昨夜の龍也の言葉を思い出す。
『龍也のタイプって、ああいう人なのかな……？』
ふとそんな考えが脳裏をよぎった。また、チクリと内側が痛む。
「それでは、宿泊研修の班分けをします。まず、男女別に三、四人の班を作って下さい。」
鈴花は、あの三人の中に入れてもらった。大体分かれたころに、次の指示が出る。
「決まりましたか？そうしたら、男子一班女子一班で一グループを作って下さい。自炊やオリエンテーションのときには、そのグループで行動してもらうことになります。」
その言葉に、鈴花たち四人は顔を見合わせた。誰に声をかけて良いのか、まったくわからない……。すでに、いくつかのグループが完成していた。中島めぐみが、すっと龍也の方に歩み寄った。

「私たち、あなたたちと組んでもいいけど、どうする？」
「あっ……。」
鈴花が、小さく声を漏らした。本当は、龍也のグループに組んでもらうつもりでいたのだ。しかし、先を越されてしまった。
『どうしよう……。』
困って目を伏せたその時だった。グイッと、彼女の肩が引き寄せられた。慣れた感覚の、右腕……。
「悪(わり)い、俺、こいつと組むことになってるから。」
「へっ？え、あっ……。」
状況が飲み込めず、鈴花は困惑した。咲子たちも、目を丸くしている。一体、いつ龍也と約束なんかしただろうか？鈴花は、一生懸命そんなことを考えていた。
「昨日言ったよな？こいつのドジ列伝は挙げたらきりがないって。今回もそれを余すことなく発揮してくれる予定だろうから、誰か慣れてる奴が付いていた方が良いんだよ。じゃないと、死傷者を出すようなことになりかねないぜ？」
「そこまでのドジはやったことないよ！」
龍也の言葉に一同がシンとなったが、鈴花が真っ赤な顔で反論した。龍也が、意地悪く眉を吊り上げる……。
「よく言うよな。誰だっけ？ガスの火に水掛けて止めたの……。」
「あっ、あの時は、フライパンのワインが火を噴いたから驚いただけで……。」
「あの後、ガス栓をすぐに閉めなかったんだよな？危うく中毒になりかけてたじゃねえか。」
「うううっ……。」
また、教室にどっと笑いが満ちた。二人のやり取りは、それほどまでにおかしいらしい……。
「……もういいわっ。」
めぐみは不機嫌にそう言って、龍也に背を向けた。鈴花は、こっそりと彼に訊ねた。

「いいの？あんなに綺麗な人が誘ってくれたのに……。」
耳元でそう言ってから自分を見上げて来る彼女に、思わず吹き出してしまった。
「なっ、何よ？」
「いや、真剣な顔で何を言うのかと思ったら……。」
「笑うことないじゃない！」
グループも決まったようなので、全員席に戻った。
「クラス委員だから、事故は未然に防がなきゃならねえんだよ、アホ。」
そう言って前を向いた彼の背に、シャープペンの先をぷすっと突き刺した。机が、ほんの少し蹴られた。

鈴花は、校庭の桜の木の下で、咲子たちと四人で昼食を摂っていた。
「でも、本当に良かった。まさか鷹取君と組めるなんて、鈴花のおかげだね。しかも、あの中島さんをあっさり切って、だよ？」
咲子の言葉に、鈴花は首を傾げた。葵が、うんうんと頷いて続けた。
「中島さんね、ミス一中って呼ばれる位モテたの。ほら、あの通り美人だし。ただ、勝ち気で女子にはすごーく怖かったの。」
「なるほど、そうだったんだ……。」
確かに、さっきも鈴花にかなり激しい視線を向けていた。里奈が、今度は口を開いた。
「気を付けた方が良いよ。中島さん、鷹取君を狙ってるみたいだし……。他の女の子も結構そうみたいだから、盗られないようにねっ。」
「へ？盗られる、って……？」
卵焼きを頬張りながら目を丸くした鈴花に、三人の視線が一斉に集まる。
「まさか、まだ鷹取君が彼氏じゃない、なんて言い張るつもり？」
ご飯を喉に詰まらせて、思わずむせた。慌ててお茶を飲む。
「だから、本当に違うの！昨日のあれはデートなんかじゃなくて買

い物に付き合ってもらっただけだし、さっきのあれは本当にクラス委員としての対応だっただけで……。」
「ふうん……。」
三人の納得がいかない、という視線に、鈴花はほんの少し居心地の悪さを感じた。
「大体、龍也のどこがいいの……？」
その言葉で、三人が三人とも呆れ顔になった。咲子が、お弁当を持っている鈴花の肩を強く揺すった。
「鈴花、鷹取君のどこがいいのかわからないって？いくら見慣れてるからってそれはないよ！いい？あのルックスだよ？あの頭脳だよ？おまけに、あの性格だよっ？皆憧れるに決まってるでしょ！」
「……確かに、喋らなければかっこいいかも……。でも、とんでもない性格じゃない！意地悪だし、すぐに人のこと悪く言うし、面倒くさがりだし……。」
「……。」
三人は、黙って昼食を食べ始めた。その異様さに鈴花が気付く。
「ちょっと、どうしたの？」
「いや、典型的な好きな人イジメのタイプだよなぁ、と思って……。」
「誰が？」
目を丸くする彼女には、もはや絶句だ。
「でも、困った時には助けてくれる、ツンデレタイプだね。おまけに、ずすかの鈍感さは世界レベル……。」
三人がまた揃って肩を落とす仕草を見て、鈴花は肩をすくめた。
放課後、龍也と鈴花は勧誘会が行われる体育館に向かった。咲子と葵、里奈も一緒だ。
「私たち、吹奏楽をやる予定なの。鈴花は？」
「あ、えっと……。」
龍也を見上げて、一瞬悩む。朝のあの様子では、彼は自分のわがま

まを許してはくれないかもしれない。チラッと視線が返って来た。
「野球部のマネージャー、するんだろ？」
「うんっ！」
明るい笑顔が向けられて、龍也は内心とても嬉しかった。体育館は、すごい人の数だった。咲子たちと別れて、二人で野球部の場所を目指す。
「人多過ぎ。面倒くさっ。」
「ちょっと位我慢してよー！」
お互いに不平を漏らしながらも、なんとか野球部の場所まで辿りついた。
「おっ、君たち入部希望者か？」
「はい、よろしくお願いしますっ！」
先輩の一人の言葉に、鈴花がニコリと笑って答えた。他の部員たちも、集まって来る。
「おっ、かわいい子が入ったな！」
そこで、隣に立っている龍也に目が行った。
「……なんだ、彼氏付きか……。」
そう言ってがっくりと肩を落とした先輩だったが、次の瞬間にはすでに復活していた。中島めぐみが来たせいだ。
「奇遇ね、龍也君。私も野球部の予定だったの。」
そう言って、入部希望者の欄にさらさらと名前を書き加えた。鈴花を軽く睨みつけてから、めぐみは一生懸命龍也に話しかけ始めた。
「野球の経験はあるの？」
「俺もこいつもねえよ。中学まではサッカー部だったからな。」
「じゃあ、足は速いのね？」
「そうでもねえよ。百メートルが……十二？十一？いや、十三秒だったか？その位だ。」
「十分速いじゃない。……ねえ、彼女は？」
その言葉に、鈴花がハッとする。どうやら、咲子たちが言っていたことは本当だったらしい。龍也がいないと答えれば、明日から彼女

の猛攻が始まるに違いない。なんとなく、嫌だった……。
「いねえよ。」
めぐみの表情が、パッと明るくなった。どうやら、明日からの猛攻の作戦を練り始めたようだ。龍也が、鈴花の腕をギュッと掴んだ。
「こんな手のかかる奴の面倒見なきゃならねえから、彼女作る暇もねえんだよ。」
「失礼なーっ！」
先輩たちが、どっと笑った。クラスでのあの様子が、思い出される……。それから、一人が冗談交じりに鈴花の世話を名乗り出た。
「なんなら俺が引き受けるぞ！」
「いやー、先輩にご迷惑おかけする訳にはいきませんよ。こいつの面倒みる位なら、一日中走っていた方がマシですよ。」
またまた皆で大笑いをする。めぐみだけが、一人で不機嫌そうな顔をしていた。

宿泊研修1

そして、鈴花が待ちに待った新入生合宿の朝が来た。快晴で、本当にすがすがしい。
「忘れ物してねえだろうな？」
「うん、大丈夫！」
元気に笑った彼女に、間髪入れずツッコミを入れる。
「帽子は？」
「ああーっ！」
慌てて机上の帽子を鞄に詰め込む様子に、苦笑する。運動などもするということで、今日は私服での登校が許されていた。
「珍しいな、お前がスカートじゃねえの。」
電車に乗り込んでから、龍也がふとそんな言葉を漏らした。それでハッとして、鈴花も気付いた。
「そうだね、私服もスカートが多いし、制服はもちろんスカートだし……。今日はいっぱい動くからこれにしたの。……かわいくない？」
その言葉に、龍也が悪意で真っ黒くなった爽やかな笑顔を向ける。
「モデルが悪いから、何を着たって一緒だろ？」
「ふーんだ。どうせ私は中島さんみたいに美人じゃありませんよーだ！」
そう言ってプイッと顔を逸らした頭を撫でてやる。昔から、彼女はこの仕草一つで機嫌を直してくれた。
「……。」
案の定、彼女は一瞬彼を白い目で見上げて、すぐに笑顔を見せた。
合宿の行き先はバスで高速を使って二時間強で着く青年の家で、二泊三日の予定だった。バスは班ごとに、前から二列ずつで座らされた。鈴花たちの班は七人だったので、一人余ってしまうことになっ

た。
「俺、一人でいいぜ。寝ながら行くし。」
龍也はそう言うと、鈴花と咲子が座っている座席の後ろに腰掛けた。
そこに、めぐみがやって来る……。
「ねえ、私たち後ろの班なんだけど、一人余ってるの。ここ、座ってもいいかしら？」
「どうぞ……。」
欠伸混じりの気のない返事を返しながら、龍也は窓の外を見つめていた。
「眠そうね、何時に起きたの？」
「五時半……。荷物の確認とかをしようと思ったら、そうなっちまったんだ……。」
彼が確認したのは、二人分の荷物。鈴花は絶対に荷物の確認ができるような時間には起きないだろうと思っていたので、差し支えのない範囲で彼女の荷物も確認しておいたのだ。
「……クラス委員も大変ね。でも、一緒にやってくれるのが龍也組んで本当に良かったわ。」
「そりゃどーも。」
めぐみのとびっきりの笑顔も、眠気に襲われている龍也には全く効果がなかった。気のない返事を返し続けていた龍也だったが、ついに眠気が限界を迎えた。
「俺、寝るわ。」
そう言って窓枠に左ひじを立て、その手の上に頭を乗せた。
「いいけど……寝顔、写真撮っちゃおうかなっ。」
そう言ってめぐみはカメラを取り出し、いたずらっぽく笑った。
「ああ、学級通信用か？どうせなら派手によだれでも垂らして寝るか？」
「いいね、それっ！」
後ろからの楽しげな会話を、鈴花は聞かないふりをしていた。
「おい、ちゃんと起こせよ。」

「え、えっ？あ、うん……。」
わざわざそれを前にいる鈴花に頼んだことに、めぐみは密かに腹を立てた。それでも、彼には笑って見せる。
「大丈夫よ、私が起こしてあげるから。」
龍也が少し皮肉な笑みを浮かべた。
「いや、怪我したくなかったらやめておいた方がいいぜ。俺、最高に寝起きが悪いからな……。小柴と高橋も、こいつの起こし方見て勉強しておいた方がいいぜ。」
彼は二日間同室の二人にそう言うと、再び手を枕にして目を閉じた。
「そんなにすごいの……？」
「アハハハハ……。」
隣から小声で問いかけて来る咲子に、鈴花は乾いた笑い声を上げて見せた。

やがてバスは高速を降り、山道を登り始めた。しばらくしてから、先生が声を発した。
「もうすぐ着くから、降りる仕度をして。寝てる奴がいたら起こしてやってくれ。」
鈴花がすっと立ち上がった。それから、一番大きい衣類やタオルが入っている鞄を、つり棚から下ろして持った。
「中島さん、ちょっといい？」
「え、あ……。」
とりあえず鈴花に座席を譲って、彼女はその場に立った。鈴花は開けてもらった座席に腰掛け、大きな鞄を膝に載せて一呼吸置いた。彼女の一挙一動を、クラスの全員が固唾を飲んで見守っている……。
「龍也起きてっ！もう着くよ！」
必要以上に彼の肩を大きく揺すってから、構えた。
ボフッ！
凄まじい音……。鈴花の鞄に、彼の拳がクリーンヒットした。一同が、今度はそれに息を飲んだ。

「起きた？」
一歩の鈴花は冷静に鞄の陰から少しだけ顔を覗かせて、龍也の様子を窺った。
「ああ……。」
地獄の鬼をも食い殺しそうな顔でこちらを見つめる。もともと龍也は細目できつい目付きな方だが、今はその瞳がさらに鋭い……。彼と同室の二人は、ゴクリと唾を飲んだ。

「四人部屋ってどうなんだろうと思ってたけど、結構広いね！」
鈴花は嬉しそうに笑って、荷物を置いた。咲子、葵、里奈も同じようにベッドに荷物を置く。皆心地良さそうに伸びをして、そのままベッドに倒れ込んだ。
「なんか、なーんにもない所だねぇ……。」
「うん……。」
咲子と葵の言葉に、鈴花は起き上がって笑った。
「ほら、皆ですればなんでも楽しいよ！それに、今日はカレーを作る日だったよね？楽しみっ！」
「今日のメインはカレーじゃなんだよー、鈴花。」
咲子も起き上がる。鈴花が、きょとんとした。
「今日のメインはなんと言っても肝だめしでしょー。」
「え、そんなのあったっけ？」
プログラムを慌てて捲る。八時から、肝だめし……。
「嘘っ……。」
鈴花は、暗いところが苦手だった。だから龍也の部屋との仕切りを天井部分だけなくし、暗くても人の存在を感じられるようにしたのだ。その様子から彼女の恐怖を見てとった里奈が笑った。
「大丈夫だよ、四人で行こう！……あ、鷹取君と一緒の方が良かった？」
「ううん、私、皆と行きたい！」
龍也といれば確かに怖くないのだが、それでも、新しくできた友達

と行きたかった。
「鈴花、肝だめしの本当の楽しみ方を教えてあげるからねっ！」
三人が元気良くそう言う……。確かに、彼女たちはとんでもない人たちだった……。

午後四時、自炊開始。龍也たちと落ち合って、カレー作りを開始する。
「おぉー、すげーっ！高梨ちゃん、包丁で芋の皮？けるの？」
彼女の手元を見ていた小柴がそう歓声を上げて、龍也と火を熾していた高橋も寄って来た。
「おっ、マジだ。料理よくするの？」
「うん、毎週日曜日に……。」
日曜日は、普段雇っているハウスキーパーが休みであるため、彼女が台所に立っていた。料理はとても好きなので、彼女は日曜日が待ち遠しくてたまらない。
「へえ、それでガスの火に水かけたの？」
「うっ……。」
小柴の問いに、返答に詰まる……。
「冗談、冗談。あ、そう言えばアドレス教えてよ。まだ交換してなかったよね？」
「あ、俺も俺も。」
「うん！後でね！」
友達が増えることは、とても嬉しい。中学までは、とても寂しい思いをしていたから……。
「おい、高橋。俺の腕、死にかけてるんだけど……。」
龍也が白い目で彼を見上げた。二人は、火を大きくするために交代で扇いでいたのだ。
「あ、悪かったな。……高梨ちゃんとちょっと話した位で焼き餅焼くなよー。独占欲強いぞ、お前。」
戻った高橋が、龍也と交代する時にふざけてそう言った。

「アホ、妬いてねえよ、別に。妬く理由もねえし。」
面倒そうに答えてから、他の様子を見る。鈴花は芋を切りにかかっていたし、咲子はにんじん、里奈は肉、葵は玉ねぎを切っていた。小柴は、はんごうの様子を見に行っていた。鈴花が真っ先に芋を切り終えて、鍋の側の調理台に運ぼうとした。
「あっ！」
砂利の上で足場が悪く、鈴花が転ぶだろうと考えていた龍也は、鈴花がそう声を上げる前にもう動いていた。
「転ぶなら一人で転べ、タコ。芋を道連れにするな。」
「助かったぁ……。」
そう息をついてから、芋が無事であることを確認する。
「良かった、一個もこぼしてない……よね？」
「ああ。いざとなったらお前より芋が優先だからな。」
「馬鹿ーっ！」
真っ赤になって怒る彼女は、龍也の目にはとても愛おしく映った。
「おっ、これなんかいいんじゃないか？」
「おお、十分なリーチもあるし、丈夫そうだ。それならきっと……。」
「なんの話？」
小柴と高橋の会話に、咲子が割って入った。小柴が振り返って、たった今拾った木の枝を掲げる。
「これなら、あいつと十分な距離をとって起こすことができるだろ？あの拳を喰らったら、怪我じゃあ済まないぜ。」
「あ、なるほどねぇー。」
どうやら、バスで鈴花が龍也を起こした時のことを思い出し、彼らなりに作戦を練った結果らしい。
「それは良い作戦かも……。」
里奈もそれを見て笑い、五人の視線がまだくだらない口論をしている二人に向けられた。
「カレー、作っちゃうか。待ってたら食べる時間なくなるし。」

葵のその言葉で、五人はカレー作りに戻って行った。

宿泊研修2

予定が延び延びになってしまい、結局、肝だめしは三十分遅れて開始することになった。その前に入浴を済ませるようにという指示が出て、鈴花たち四人は浴場に向かった。この施設は各棟に浴場があって、鈴花たちが使っている棟は、A、Bの棟だった。

「うわあ、意外と広いね！露天もあるみたいだし、行ってみようよ。」

「うん！」

咲子の言葉に素直に頷いて、四人は露天ぶろに向かった。他の人はまだ体を洗ったりしているので、貸し切り状態のようだ。四人が、外に出る……。

「おっ、誰か来たぞ？」

一方こちらは男湯。竹垣を隔てて、女湯と男湯の露天は繋がっていた。竹垣の隙間から反対側に真剣に目を凝らす、二対の目……。小柴と高橋だった。

「アホか、お前ら……。」

その背中を呆れ顔で眺めていた龍也の顔色が、彼らの言葉でさっと変わる。

「おっ、まさか林原ちゃんか？スタイルいいなぁ。」

口笛を軽く吹いて顔を見合わせて、彼らは再び向こう側に目を凝らす。林原里奈は、彼女と仲が良い。まさか……。

「おおーっ！今度はあれ、髪の長さ的に高梨ちゃ、ぐっ！」

二人の頭が、竹垣に強く打ちつけられた。

「……見たら殺すぞ。」

目がマジ。先程の寝起きよりも、まだ恐い……。

「……正直に言え。どこまで見た……？」

そのただならぬ雰囲気に、二人は震え上がった。

「ま、まだどこも見てません！本当です！嘘はついてません！」

「よし……。」
二人は誓った。二度と、龍也の前で覗きはしない、と……。
八時半になって、A、B組の生徒が指定された場所に集まった。肝だめしは、二クラスずつ合同で行うのだ。最初はA組が四人一組でチェックポイントを回り、B組が隠れて脅かすことになっていた。
「おい……。」
彼女を連れて行ってやるつもりで声をかけようとしたが、どうやら女子四人で行くらしい。せっかくの機会だから、と思って、彼は彼女を手放した。
「私、ここに入れてもらえるかしら？」
「おっ、いいねぇ、中島さん。肝だめしは好き？」
めぐみに話しかけられて、お調子者の小柴と高橋は即座に了承した。
「ちょっと怖くって……。」
そう言って龍也に視線を当てたが、彼の目は完全に別のものに向けられていた。スッと、彼が歩く。
「こいつ、異常に暗いのにビビるから、逃走しないように首に縄付けておいたほうがいいぜ。嫌がっても引きずって歩くこともできるし。」
「だっ、大丈夫！皆と一緒だし……。」
龍也がふと姿勢を低くして、今度は鈴花たち四人にしか聞こえないように小声で言った。
「いいか？露天には入るなよ。」
「どうして？」
全員が全員、同じ表情を向けて来る。少々言いにくさを感じた龍也だったが、やはり伝えておいた方がいいだろうと思って、口を開いた。
「……あそこ、男湯の露天から覗けるんだよ……。」
「なっ？」
鈴花が真っ赤になった。他の子たちも、赤くなる……。

「……見た？」
鈴花は自分の体を自分の腕で抱いて、一歩後ずさりしながら彼にそう訊ねた。意地悪い笑みが、返って来た。
「ああ、お前だけ、な。小柴と高橋にそのこと教わって、ぜーんぶ。」
「死ねーっ！馬鹿っ、変態っ！お嫁に行けないじゃないーっ！」
あの二人で観覧車に乗った時さながらの様子で、彼をポカポカと殴りつける。右手でその攻撃をしっかりと防ぎながら、彼が舌を出した。
「本気にするな、アホ。寸前であいつらだって止めたし。大体、なんでよりにもよってお前の裸なんか見なきゃならねえんだよ？俺は選ぶ権利を主張する。」
「変態に選ぶ権利なんかなーい！」
「だから見てねえって……。」
とにかく、肝だめしがスタートした。鈴花の班はA組で、最初のスタートとなった。その次に、龍也たちのグループ。
「後ろに向かって走って来るなよ。面倒だから。」
「誰も変態に助けを求めたりなんかしないわよ！」
思い切り舌を出して見せた鈴花を、咲子が引っ張った。
「よおし、鈴花、行っくよー！」
やけに元気良く、生き生きとしてスタートした三人を疑問に思う鈴花だったが、この後、その原因を知ることとなる……。
「よおし、一個目。」
最初のチェックポイントまでは、なんの脅かしもなくあっさりと到着した。里奈と咲子が、手に持っていた懐中電灯を消してしまった。
「えっ、真っ暗！」
鈴花の手を、葵が握ってくれる。二本しか与えられていない懐中電灯を、二本とも消してしまったのだ、真っ暗になるに決まっている……。
「足元に気をつけてね、鈴花。行くよっ……。」

小声で、しかも足音を忍ばせて歩く三人に、訳がわからないまま彼女も着いて行く……。咲子が、何かを取り出した。それは、人肌に温めたこんにゃくを竹竿と釣り針に通した、この後B組を驚かせる時に彼女たちが使おうと準備していたものだった。
「……あの辺かな？うりゃっ。」
咲子が小さくそう言って、茂みの陰にそれを投げ入れた。
「きゃーっ！」
女の子が二人、そこから飛び出して来た。里奈と葵の二人が懐中電灯で自分の顔を下から照らす……。
「こんばんは。」
「いやーっ！」
「なんだ？どうしたっ？」
隠れていた他の人たちも、悲鳴を聞いて駆けつけた。
「……お前らか……。」
B組の男子一人が、大きく溜息をついてがっくりと肩を落とした。
「よりによって、お前らが最初に出て来るとは……。わかってたらもっと警戒してたのに……。」
実は咲子たち三人は、第一中では有名なお化け屋敷荒らしだった。学校祭でせっかくお化け屋敷を作っても、彼女たち三人にかかるとこちらが驚かされてしまうのだ。だから、第一中の学校祭からは、お化け屋敷が消えたという……。
「しかし、さすがだなぁ……。お前ら、この先でもやるのか？」
「予定ではね。鈴花に肝だめしの楽しみ方を教えてあげなきゃ！」
「間違った楽しみ方だけどな……。」
正しいツッコミを入れる彼に同調して、鈴花はうんうんと頷いた。
「おっ、この子が鈴花さん？……あ、いつも鷹取と一緒にいる……。」
「高梨鈴花です。よろしくお願いします！」
龍也と一セットでだったが、一応覚えてくれていたようだ。ニッコリと笑う。

「へえ、お前らと組んでるの意外だったな。彼氏放っておいて良かったの？」
「彼氏……？」
鈴花が目を丸くする様子を見て、咲子が補足説明を加えてやる。
「あー、なんか、鷹取君と付き合ってる訳じゃないみたいなの。幼馴染？」
それで、鈍い鈴花もハッとする。
「龍也と付き合ってなんかないよ！誰があんな変態とっ……！」
「いや、少なくともあいつは変態じゃないでしょ。」
彼のその言葉に、首を傾げる。
「さっき風呂で見てたんだけど、Ａ組のお調子者二人が女湯覗いてたんだよな。」
「止めろよ……。」
葵が間髪入れずにツッコミを入れたが、Ｂ組の男子は、そこは笑って誤魔化した。お調子者二人とは、おそらく小柴と高橋だろう。
「そして、そいつらが高梨さんの名前を上げたんだよ。その瞬間に二人の頭を小突いて……、いや、突き飛ばして……？とにかく、止めてたんだ。見たら殺すぞ、なんて言いながら。だから、高梨さんと付き合ってるのかなぁ、と思ってた訳。」
「え、あ、じゃあ……龍也は、一瞬も覗いてない……？」
鈴花の言葉に、彼はニッコリと頷いた。そして、言葉を続ける。
「そっか。でも、二人が付き合ってないなら、喜ぶ人、結構いるかもな。鷹取の方は新入生代表のあいさつでいかれちゃった女子が結構いたし、高梨さんがかわいいと思うって声もちらほらと聞こえて来てるしさ。」
「え、私が？」
その言葉に、また目を丸く見開く。鈴花には、とても意外なことだった。
「どうするー？モテモテにモテちゃったら！鷹取君、焼き餅焼くかなぁ？」

咲子が楽しそうにそう言った。あの龍也が焼き餅なんて、あり得ない。鈴花は、密かにそんなことを考えていた。
「は？でも付き合ってないんだろ？」
里奈が、B組の彼をじとーっとした目で見つめた。
「気付けよ、普通に……。」
一瞬考え込んでから、納得がいく。
「ああ、そういうことか。」
「何がーっ？」
鈍い鈴花だけが、その場の会話から取り残されてしまった。

帰り道

結局、新入生合宿は大成功を収めた。それから幾日か経ったある日、めぐみとともに担任に呼びだされた龍也は、学級通信に載せる写真選びを頼まれてしまった。放課後の教室に二人は、なんだか居心地が悪い。正直、彼は彼女が苦手だった。ガラガラ、と戸が開く。

「龍也？中島さんも。」

鈴花が入口に立っていた。部活に行っていたはずの彼女だったが、すでに制服に着替えていた。

「どうしたんだよ？部活は？」

「もう終わったよ。それを言いに来たの。」

彼に手招きをされて、その隣にちょこんと腰掛けた。

「あっ、これ、合宿の写真？」

「ああ、学級通信に載せる写真を選べって言われてるんだ。どれか良さそうなのないか？明日の朝には先生に届けねえと……。」

めぐみの不愉快そうな視線を、龍也は軽く無視した。

「うーん……。これなんかどう？色んな人が映ってるし、楽しそう！」

鈴花が選んだ写真は、最後の夜に行ったバーベキューのものだった。

「うーん、まあ、お前のセンスならそんなものか。」

その写真を軸に何枚かを龍也が選び、二人が悩んでいた課題はあっという間に解決した。いや、正確には悩んでいたのではなく、時間を持たせたいめぐみが、龍也が選んだものにダメ出しをしていたのだ。

「こんなもんだな。まあ、不評だったらお前のせいってことで。帰るぞ。暗くなっちまったし。」

「本当だ……。中島さん、大丈夫？」

「……。」

鈴花の言葉には、彼女は答えない。完全無視、とでも言ったところ

であろうか。
「……ねえ、送って行ってあげようよ、龍也。」
「あ？ああ……。」
正直、こんなことを言い出す彼女の気持ちが全くわからない。これだけ冷たくされていながら、なぜそんなことが言えるのだろうか。
結局、三人で学校を出た。

「ねえ、ここのクレープ屋さん、すごくおいしいの。寄って行かない？」
「いや、俺、甘い物あまり好きじゃねえし……。」
そこで、鈴花を見下ろした。彼女は、ショーケースの中を見つめて目をキラキラと輝かせている……。もう少し色っぽい表情はできないのか、と思い、思わず彼は苦笑してしまった。
「食いたいのか？」
龍也の問いに、彼女は顔を上げてコックリと頷く。めぐみは、さっさと歩いて行ってしまった。
「あっ、中島さん、待って！」
慌てて追いかけてその袖を捕まえた手を、パシンと乱暴に払われる。
「おい……。」
見るに見かねて文句を言おうとした龍也を、鈴花が止めた。
「いいよ、龍也。私、何か悪いことしちゃったのかも……。家まで送って来てあげて。私、このお店で待ってるから……。」
彼女の命令で、彼は仕方なくめぐみを追いかけた。

「ねえ、龍也君。まだ時間、ある？」
上目遣いにそう問いかけて来るめぐみを、一蹴する。
「ある訳ねえだろ。あいつを待たせてあるんだから。」
めぐみが前を向いた。
「でも、別に彼女とかじゃないんでしょう？大変ね、幼馴染だからって面倒を見させられるのも。少しくらい待たせたって、いいんじ

ゃない？」
龍也は深く溜息をついた。どうやら、はっきりと言って聞かせる必要があるらしい……。
「確かに付き合ったりはしてねえけど、俺にはあいつ意外考えられねえから。……あいつと違って鈍くないだろうから、こう言えばわかるだろ？」
「っ……。」
めぐみは絶句した。その彼女をその場に置き捨てて、彼は元来た道を戻って行った。

「ふぇっ……。」
なぜだろう、先程から涙が止まらない。彼が彼女と並んで行くその様子を見た時から、ずっと……。とりあえず注文はしたものの、まだクレープには二口しか口を付けていない。大好きな、桃が入っているのに……。
「泣きながら食ったらしょっぱいだろ、馬鹿みてえ。」
彼が戻って来た。彼女の正面に腰掛けて、頬杖をついてその顔を覗きこむ……。一番奥の見辛い席にいても、ちゃんと彼は自分を見つけてくれた……。
「で、なんでそんなマヌケな顔をしてるんだ？虫歯か？」
「ちっ、違うよっ……！」
あまりにも失礼な言葉に、思わず涙も引っ込んでしまった。
「じゃあなんでだよ？」
面倒そうに、いらいらとしながら彼が問いかけて来る。彼は、彼女に泣かれるのがたまらなく嫌だったのだ。彼女は、しょんぼりと俯いて答えた。
「龍也が、中島さんと歩いていたから……。」
「は？お前がそうしろって言ったんだろ？誰が好き好んであんな奴と歩くか。」
本当に面倒そうに答えた彼に、ほんの少しだけ安堵の笑みがこぼれ

る。
「そんなこと言ったらダメだよ……。でも、とにかくそれが悲しかったの。……私、きっと情緒不安定なの。……精神病かもっ。」
この世の終わり、とでもいうような顔をする彼女に、彼は思わず吹き出してしまった。
「ああ、お前は病気だ。なんなら、病名を教えてやろうか？」
「龍也に病気のことがわかるはずないじゃない……。」
そうは言いながらも、続きが気になるようでチラチラと彼に視線を当てて来る。彼が意地悪に笑った後で、額がピンッと強く弾かれて、頭がやや後ろを向いた。
「な、何するのーっ！」
弾かれた額を抑えて、彼を思いっきり恨みがましい目で見つめる。
得意気に笑ってから、彼が口を開いた。
「……お前の病名は、焼き餅。後は、世界一の鈍感。」
「咲子ちゃんたちと同じこと言わないでよぉー……。」
「おっ、あいつらもう知ってるのか。いい友達を持ったな。」
彼女のお冷に手を付けながら、彼はテーブルの向こうで柔らかい笑顔を彼女に向けた。
「……意味わからないーっ……。」
「ほら、さっさと食えよ。置いて帰るぞ？」
「えっ、嫌だ、待っててよっ！」
彼女は慌ててクレープを食べ始めた。
「あまり急いだら、引っ掛けるぞ？」
「んっ……。」
案の定、彼女はクレープを喉に詰まらせた。手に持っていたお冷のグラスを渡してやる。
「……龍也が急がせるから悪いんじゃない……。」
その抗議の視線に苦笑して答えてやる。
「はいはい、わかったわかった。待ってるから、ゆっくり食え。」
「うん！」

元気に笑った彼女の頭が、大きな手に撫でられた。その仕草は、またしても彼女の機嫌を一瞬で直してしまった。

逃走

やがて、彼らは高体連を迎えることとなった。龍也はまだ野球を初めて数カ月だったが、持ち前の足の速さと運動神経の良さで一年生レギュラーに抜擢された。この日は、翌日の一回戦に向けての最終調整が行われていた。

「おーい、マネージャー！」

「はーい！」

球拾いをしていた鈴花が元気よく返事をして、パタパタと駆けた。

「なぁんだ、龍也か。」

「随分な御挨拶だな。飲み物、どこに置いた？」

「えっ？」

いつもベンチに置いてあるはずの水筒たちが、見当たらない。龍也のだけではなく、全員分……。

「ああーっ！」

鈴花が思い出した、とでも言うように大声を上げた。横で少々顔をしかめながら、龍也が訊ねる。

「それで？どこだよ？」

「……多分、水飲み場に水筒だけ置いたまま……。」

「おいおい……。」

呆れ顔の彼に、彼女はすぐ取って来るから、と告げて走って行った。いつもたくさんの水筒が入った籠を重そうに持っているのを思い出した彼は、その後について行った。

「やっぱり！怒られるなぁ……。」

水筒に水を汲もうとしていた彼女は、先輩のマネージャーに呼ばれて、途中で別の仕事をしに行ったのだ。その後、水筒のことをすっかりと忘れて球拾いを手伝っていた。

「まあ、他の奴も気付かなかったんだから、同罪なんじゃねえの？」

そう言って龍也は隣に立ち、彼女と同じように水筒に水を汲み始め

た。どうやら、手伝ってくれるようだが……。
「りゅ、龍也はしなくていいよ！それこそ、怒られちゃうよ……。」
仕事を忘れただけならいざ知らず、選手にマネージャーの手伝いをさせたとあっては、何こそ言われるかわからない。
「お前一人でやってたら、皆帰る頃になっちまうだろ。」
「そ、そうかもしれないけど……。」
彼女の脳裏にある人物が浮かんだが、彼女は必死でその人をかき消した。大丈夫、見つからなかったら、怒られないよね……。心の中で、そんなことを考えながら。
「よし、これで全部だな。」
「うん。よい……しょ？」
彼女の掛け声が中途半端になった理由。それは、彼女が持ち上げようと思っていた水筒がたくさん入った籠を、龍也が持ち上げてくれたせいだった。慌てて彼の手から籠を引き取ろうとする。
「龍也、大丈夫だよ！いつも持ってるし……。」
「お前の鈍足で運んだら、あそこに運び終わるのは皆が解散して、家に帰りつく頃だろうな。」
「そこまで言わなくていいでしょ！」
ふくれっ面を作ってみせるが、彼の優しさが嬉しかった。
「ちょっと、何やってるのよ！」
鈴花の体が、ビクリと大きく跳ね上がって硬直した。その声は、先程彼女の脳裏に浮かんで消えた、あの人物のもの……。龍也の眉が、ピクリと動いた。
「選手にそんなもの持たせるなんて、どういうつもりよ？ましてや、明日は大会でしょ？龍也君は選手なのに、故障でもしたらどうするのよっ？」
「っ……。」
声の主は、めぐみだった。彼女は、あの帰り道から鈴花に余計辛く当たるようになっていた。見かねた龍也が、彼女を庇ってやる。
「確かにマネージャーの仕事はマネージャーがしなきゃならねえん

だろうけど、こう言う時は選手だって手伝うべきだろ？大体、マネージャーだって三人もいるんだろ？それなのに、なんでいつもこいつだけが水運びさせられてるんだよ？」
「っ……。」
龍也のもっともな指摘に、めぐみは言葉に詰まった。彼女も三年生のマネージャーも、水運びは重くて辛い仕事なので、鈴花に押し付けていたのだ。文句も言わずに仕事をしていた彼女だったが、たまたま今日はそれを忘れてしまったのだ……。
「ほら、行くぞ。皆待ってるだろうし。」
「う、うん……。」
龍也に促されて、鈴花はまた歩き出した。背中に苛烈な視線を浴びせられてることを感じていた鈴花は、結局、籠の持ち手の片方を持つことにした。
「あまり気にするなよ。あいつ、自分の悪い所は棚に上げてお前にばっかり文句つけてるんだから。」
「うん……。でも、今日のことは仕方ないよ。仕事忘れちゃったのは、私が悪いんだし……。」
「仕方ないだろ？お前、馬鹿なんだから。」
「一言余計だよ！せっかく見直してあげようかと思ってたのに。」
ぷくっと頬を膨らませる彼女が向けて来る視線は、彼にはとても心地良かった。
「おっ、悪いな、高梨。」
「いえっ、遅くなってごめんなさい……。」
練習が終わった先輩たちは、鈴花と龍也が運んだ水を飲み始めた。そして乾いた喉を潤し終わると、更衣室に入る者もいれば、着替えずにユニフォームのまま帰る者もちらほらと見え始めた。男子の更衣室はまだ混雑しているので龍也は外で待っていたが、女子の更衣室は別に用意してあるので、鈴花はそちらに入って着替えを始めようとした。
「あっ、今日、新刊の発売日だった。」

本屋に行かなければと思った鈴花は、早めに龍也に言っておいた方が良いと思い、脱ぎかけていたジャージを着直して外に出た。
「っ……！」
そこで彼女が見たものは、衝撃の光景だった。めぐみが大きく伸び上がって、龍也に口付ている……。動揺する。固まってしまう。頭が、真っ白になる……。
「おい、変な誤解をするなよ……？」
龍也のその言葉に、大きく首を横に振る。これは、どう見たって、どう考えたってそういうことなのだ……。泣きそうになるのを、ぐっと堪える。何が悲しいのかも、わからない……。
「あ、えっと……。お邪魔して、ごめんね……？あ、龍也。私なら一人で帰れるから、心配しないで……。またねっ！」
荷物を持って、即行で逃げ出す……。今の彼女には、それしかできなかった。
「おいっ！」
後ろから龍也の声が追って来るが、それも無視して駆け抜ける。
「どういうつもりだっ？」
誤解を招く原因となった、彼女のあの行動の真意を問う。
「宣戦布告。あなたと、あの子に対する……。」
「あいつの不戦勝だな。」
勝ち気な笑みを浮かべて自分を見上げて来るめぐみをそう一蹴して、彼は更衣室に入った。彼女があのままジャージで帰るはずはない。どこかで着替えて、二本後の電車に乗るはずだ。あっという間に着替えを終えて、彼は更衣室を飛び出した。

誤解

鈴花は、彼の予想通りの行動をとっていた。改札が始まるというアナウンスで立ち上がり、定期券を改札に通す。彼は、来ない……。そのまま電車に乗り込む。この時間の電車は、帰宅ラッシュで混雑していた。

『あっ……！』

「ごめんなさい……。」

つり革につかまっていても、電車の揺れは辛い。隣の人の肩にぶつかってしまった鈴花は、目を合わせずに軽く頭を下げて詫びた。それから、また俯く。普段なら、ふらふらと動く彼女の体を、龍也の腕がしっかりと支えてくれていたのだ。仕方のないことだとわかっていても、普段隣にいてくれた彼の不在が、寂しい……。

「っ……！」

ふと彼女の体が固まる。満員電車ではよくあることだと聞いていたが、まさか……。

『チカン……？』

どうやら間違いないらしい。体が恐怖に震える。どうすればいいのかも、わからない……。

『怖い……。龍也！』

「放せ……。」

静かな怒りのこもった声音……。まさかと思って顔を上げた彼女は、見慣れた黒い髪にほっとした。彼の利き手が、一本の手を捻り上げていた。

「おい、次の駅で降りろよ……。」

チカンを相手に、彼はそう凄んだ。寝起きや、小柴と高橋が覗きをやった時なんて比にならない程の、冷たくて恐ろしい視線……。彼を子供の頃から知っている鈴花でさえも、たじろいでしまうような。

「大丈夫か？」

「うん……。」
聞きたいことはたくさんあるが、彼のその言葉に、涙を飲んで辛うじてそう答えた。電車が、駅のプラットホームに滑り込んだ。龍也は鈴花を先に降ろしてから、チカンの腕を捻り上げたまま降りた。彼女にチカンを働いたのは、中年のサラリーマンらしき男性だった。
「も、申し訳ない！本当にすまないことをした！」
プラットホームから人の姿が消えるなり、彼は二人に向かってそう謝罪した。
「それで済む訳ねえだろうが！おい、警察行くぞ！」
「まっ、待ってくれ！どうかそれだけは……。」
ほんの出来心で、といういい訳に、龍也が過剰に反応した。
「出来心、だとっ？あんたのそのくだらない出来心とやらのせいで、あいつは相当怖い思いしてるんだよ！見ろよ、泣きそうじゃねえか！ふざけるな！」
鈴花の目には、涙がいっぱいいっぱいに溜められていた。それは、彼女が体験した恐怖をありのままに物語っていた。
「いや、本当に申し訳ないことをした……。すまないことをしたと思っている……。」
「だから、それじゃあ済まねえって言ってるだろうが！行くぞ！」
「……待って、龍也。」
男を問答無用で引きずって行こうとした龍也を、鈴花の声が止めた。彼の目が向けられる。
「もういいんじゃない？謝ってくれたんだし……。もうしないって約束してくれるなら、それでいいと思うんだけど……。」
こいつは、一体どれだけお人好しなんだ……？彼は辛うじて、その言葉を飲み込んだ。だが、被害者の彼女がそういうのなら、仕方ない……。
「……だそうだ。わかったか？二度とこんなことするなよ！……ほら、お前も言いたいことがあったら何か言え。」
鈴花は、一瞬考えてから口を開いた。

「あ、えっと……。もうしないで下さい。それだけです。」
龍也の体が、ガクンと沈んだ。
「それだけかよ？いっつもみたいに、死ねとか馬鹿とか変態とか言わねえのかよ？」
「あ、あれは龍也専用だから……。」
「……そうかよ。」
特別扱いなのに、ちっとも嬉しくない。二人はチカンにもう二度としないと誓わせて、彼を解放してやった。
「ほら、帰るぞ。」
そう言って彼が歩き出しても、彼女はついて来なかった。いつもなら、一瞬遅れでついて来るのに……。
「あのね、龍也。すっごく言いにくいんだけど……。」
「何だよ？」
ほんの少しイライラして問う。彼女が、苦笑しながら続けた。
「ここ、いつもの駅の一つ前の駅だよ……。」
「はっ？」
そう言われてハッとする。そう言えば、あまりなじみのない風景が辺りに広がっている……。彼は、今の今まで怒りで我を忘れていて気付かなかったのだ。仕方ない、次の電車が来るまで待とう……。二人並んで、誰もいないホームのベンチに腰掛ける。
「珍しいね、あんなに怒るの……。」
「そうか？」
彼は気付いていなかった。自分が、地獄の鬼でも裸足で逃げ出したくなるほどの恐ろしい形相をしていたことに……。彼はあの時、自分に対しても憤慨していたのだ。もう少し早ければ、未然に防げたのに、と。
「大体、お前も悪いんだよ。少し気を付けろ。」
「うん、今度からそうする……。」
しばらくの沈黙の後に、彼女がまた口を開いた。
「……中島さん、置いて来ちゃって良かったの？」

俯いてそう訊ねた彼女の瞳からは、涙がこぼれそうになっていた。
彼がその言葉を聞いて溜息をこぼす。
「だから変な誤解をするなって言ったのに……。」
だが、一応きちんと説明をしてやった方がいいだろう。おかしな誤解をされたまま彼女に嫌われるのは、嫌だった。
「いいか？あれは向こうが突然、勝手にしてきたんだ。俺の意思なんかまるで無視だったんだからな。」
「でも、龍也、嫌そうに見えなかったよ……。」
落ち込んだようにそう言う彼女に、正直言って腹が立った。どこまでも鈍いくせに、変な誤解をすることだけは一人前なのだ。細い腰を抱き寄せる。
「ちょっと、何するの龍也！」
彼の腕は、強くきつく彼女を拘束した。
「放せ、変態！」
「さっき言えよ、アホ……。」
彼の声音は、静かで、腹立たしげで、それでいて優しくて……。思わず彼の胸を押し返そうとする彼女の腕も、止まってしまった。
「鈍いくせに、一人前に誤解だけはするんだな。」
「またそんなことばっかり言って！鈍くてもお馬鹿でも、私の勝手でしょ！」
「馬鹿とはまだ言ってないだろうが。」
「いつも言ってる！」
温かい手に頭を撫でられると、そのあまりの心地良さに鈴花は目を細めた。
「龍也の馬鹿。」
ずるいな、と思った彼女は、そう一言彼に言っただけだった。しかし、それにも彼からの答えが返って来る。
「ほう、そういうことは俺を抜いてから言ってもらおうか。知ってるか？高体連が終われば一カ月でテストだぜ？」
「ぐっ……。」

どうせ私はお馬鹿ですよ、と、鈴花は心の中で彼に舌を出して見せた。

テスト

「う、そ……。」
高体連も終わり、一学期も間もなく終了。そんな今日は、期末テストが返却されていた。そして、数学のテストを見た鈴花の第一声がそれ。龍也が、その彼女のテストをひょいと覗きこんだ。
「小柴ー！ここにお前と同じ補習組がいるぞ。」
数学のテストは、三十点以下の者には夏休みの補習が課せられることになっていた。鈴花の点数は、二十三点……。小柴に至っては、なんと僅か七点だった。二人足しても、補習組……。
「夏休みは……皆で海に行こうと思ってたのに……。家に、日曜日に遊びに来てもらおうと思ってたのに……。」
「夢、破れたり。」
そんな龍也のテストを覗いてみる。拒絶反応を起こした彼女の瞳が、パッとその紙面から逸らされた。見なければ良かった。あんな、三桁の点数……。
「まあまあ、大丈夫だよ鈴花。追試で六十点以上取れば合格で、補習は免除だからさ。皆で海、行こうよ！」
「うん……。」
しょんぼりと俯く。彼女は、国語と英語が得意だった。その二つはトップクラスと言っても良いような点数なのに、数学だけ……。
「龍也、教えてね……？」
遠慮がちに、上目遣いで鈴花が頼んだ。その様子に、彼が意地悪く笑った。
「一問千円だな。」
「高いーっ！」
彼女の抗議の声を無視して、彼は三桁のテストで紙飛行機を折り始めた。

「ほら、テキスト開け。」
「うん。」
部活が終わって家に帰ってから、二人は早速鈴花の学力向上に取り掛かった。
「どれがわからねえんだよ？」
テスト範囲の最初のページを開かせて、彼がそう問いかける。
「えっとね……。」
ノートを開いて確認してから、彼女は苦笑いして見せた。
「このページ、全部間違ってる……。」
「一、二、三……。小計一万七千円となります。」
「だから高いってーっ！」
またしてもそんな彼女の抗議の声を無視して、彼の解説が始まった。
長い指、理知的な瞳、語る声の心地良さ……。
「おい、何ボケっとしてるんだよ？聞いてるのか？」
彼女がボーっとしているのに気付いて、彼が現実に引き戻した。そしてその口から紡がれた言葉に、思わず絶句させられてしまうことになる……。
「龍也って……皆が言うみたいに、普通にしてたらかっこいいのかも……。」
「はっ……？」
心拍数が急上昇する。顔が熱い……。緊張で一気に乾燥してしまった口の中に、慌てて麦茶を含む。彼女の言動は、時々心臓に悪い……。
「暑さにやられたのか？大体それ、褒めてるのか貶（けな）してるのかわかんねえし……。」
普通にしてたら、という余計な一言が、やけに気にかかる……。そんな言葉がついているということは、普段の自分は彼女から見たら普通ではないのだろうか？密かにそんな不安を抱いたりもする。彼女が、曖昧に笑った。
「うーん、どっちでもないような……。」

「いいか？ボケたことばかり言ってないで続けるぞ。」
そこで鈴花がハッとした。
「そう言えば龍也、英語は大丈夫だったの？」
そう。確か、英語も成績下位者には補習が課されていたはず……。
「八十一点。」
普段の彼からは想像もつかない点数に、思わず感嘆、いや、その領域を通り越して絶句してしまう……。今までの最高点の、二倍近い点数ではないだろうか。高校入試を除けば、間違いなくそのはずだ……。
「なんで？なんでそんなに急に頑張ったのっ？」
「まあ、色々だ。」
「何よそれーっ！」
彼の苦笑には、納得がいかなかった。色々の原因が全て彼女にあったということを鈴花が知るのは、まだまだ先の話だった。

その後、彼女は無事に追試に満点で合格し、小柴もギリギリ追試をパスした。海に行ったり家で遊んだりと楽しそうに夏休みの計画を練っている彼女の横顔を、龍也は満足そうに眺めていた。そんな二人の様子を傍から眺めていた面々は、すでに新学期の計画を練り始めていた。新学期、初めての学校祭を、より楽しくするために……。

夏休み1

「うわぁーっ！綺麗！最高！」
女子四人組は、鈴花の父の別荘に着くなりそう歓声を上げた。別荘、といってもそれど大きな物ではなく、学校の最寄り駅から二時間ほどで着く海辺に立てられていた。近くには、海水浴場もスーパーもある。
「ほらっ、早く、早く！」
荷物を持たされた男子三人が、後から歩いて来ていた。荷物の重さのせいで歩みののろい彼らに、振り返って手招きする。やっとついた別荘は、なかなか快適そうだった。ここで一泊して、遊んで帰るのだ。
「ようし、じゃあ、まずは適当に片付けて海行くか！」
「おーっ！」
高橋の掛け声に、龍也以外が元気にそう答えた。男女別の部屋に分かれて、各々水着に着替える。八月の海は、キラキラと眩しい。海水浴を楽しむ人が、大勢集まっている。人ごみが嫌いな龍也のテンションは、それに応じて着実に下降していた。
「わぁーい！海、海ー！」
まあ、彼女が楽しそうにしているのだから、良しとしよう。そして、ここにもっと楽しそうな奴らが……。
「夏と言えば海っ！」
「海と言えば水着っ！」
「結論、海と言えば変質者、と……。」
龍也の呆れ顔でのツッコミに、小柴、高橋の二人組が猛反発した。
「なんだよー、お前に迷惑かけてないだろ。別に高梨ちゃんをやらしー目で見てる訳でもないし！」
「そんな顔して、お前こそムッツリスケベの類じゃないのか？」
「……お前らなぁ。何とでも言え。」

呆れ顔に、溜息のおまけつき。女子四人は、浮輪で海に繰り出していた。
「ほら、俺らも泳ぎに行こうぜ！」
鈴花からあまり離れる訳にもいかないので、龍也も上着を脱いで海に入った。普段は面倒だからしないが、泳ぐのは得意だった。
「うーん、全然進まない。」
浮輪の穴に腰掛けるようにして座っていた鈴花が、ふとそう不満をこぼした。その時、後ろから力が加わって、浮輪が進みだした。ふと振り返ると、そこには。
「あ、龍也。押してくれるの？」
「ああ。お前が一人じゃ戻って来られなくなる所まで、な。丁度良い厄介払いだ。」
「何よそれ！何が言いたいのっ？」
見れば、小柴と高橋も同じように、咲子、葵、里奈の浮輪を押していた。人の少ない所まで行って遊ぶつもりらしい。しばらくして、彼らが止まった。ちょうど龍也の胸位の水位なので、相当深い場所までやって来たにに違いない。
「さあ、ここまで来ればもう向こうまで戻れねえだろ？じゃあな。」
くるりと背を向ける彼に、必死ですがりつく。
「やだぁーっ！海で干物になりたくないー！」
彼女の絶叫に、残りの五人が爆笑した。

「ねえ君、高校生？それとも、大学生かな？」
海からあがって早々に、龍也は二人の成人女性に話しかけられた。
「かっこいいね。友達と来てるの？良かったらこの後……。」
後ろで浮輪を拾い上げた鈴花が、ぷくっと頬を膨らませてさっさと歩いて行ってしまったのが、彼の目の端に映った。
「連れが待っているんで、これで。」
鬱陶しいと思いながら、あっさりとそう言って彼女たちから離れた。もったいない、という小柴の声が彼の耳に届いたが、今はそれどこ

ろではない。彼女の姿がすぐに見つからないことに、ひどく動揺する。……いた。彼女は、金髪と茶髪の二人組に話しかけられていた。
「君、一人？」
「あ、いえ、友達と来てます。」
「うわ、緊張してるの？ナンパされるの初めて？」
「あ、はい、そうです。」
おどおどとして答える鈴花の腕を、茶髪の男の方が握った。
「俺らあっちの方にテント張ってるんだけどさ、遊びに来ない？」
「え、あのっ……！」
鈴花の腕を無理矢理引っ張っていた手首が、別の手に掴まれた。
「他人（ひと）の女に手、出してんじゃねえよ。お前も誰にでもついて行くな。」
「え、あ、龍也？」
鈴花を捕まえていた腕が放された。龍也の右手が、彼女の肩を引き寄せた。
「ちぇっ、彼氏（おとこ）付きかよ、つまんねえ。行こうぜ。」
二人はあっさりと引き下がって帰って行った。ことの一部始終を、五対の目が興味深そうに見つめている。高橋が、一言。
「そう言えばあの二人、夏休み明けの学校祭でベストカップル賞にノミネートされてるらしいぞ。しかも、最有力候補だぜ？」
「あ、実行委員の友達から情報横流しで聞いたよ、それ！一年生が入るのって、珍しいことなんだってね。」
「あの二人は、まだ知らないんだろうね。」
里奈の言葉の後を、葵が続ける。咲子が意地悪く笑って、小柴を小突いた。
「いいのかー？小柴君。このまま鷹取君と鈴花がくっつくのを見守ってて。」
「べ、別にいいだろ！別に何も問題は……。」
「ほぉー、そうかね。いや、わかるよ。鈴花はかわいいもんね、うん。」

意地悪く自分を覗きこむ顔に、返す言葉もない。元々咲子に口で勝てる訳もなく、小柴は敗北を喫した。
「べ、別に俺は……ちょっとかわいいかな、と思ってるくらいで……。」
「ふーん、それにしては随分気にしてるよねぇ、鈴花のこと。」
「やめろよ。小柴にだって複雑な男心というものが……。」
わが身の危険を顧みずに戦闘に飛び込んだ高橋。しかし。
「高橋君、里奈の前で良い所見せよう、って訳？」
「そ、そんなこと言ってねえだろうが。」
「まあ、確かにね。」
高橋の反応が思ったほど面白くなかったらしく、咲子はようやく引き下がった。高橋は、冷や汗をかかされていたのだが。
盛り上がっている五人を見て、龍也が溜息をついた。その隣で、鈴花が楽しそうににこにこと笑う。
「何の話してるんだろうね？」
「あいつらの話なんて、どうせろくでもないことに決まってるだろ。」
なんとなく話を聞きそびれてしまったことを残念に思う鈴花だったが、鈍い彼女はたとえ聞いていても話にはついていけなかっただろう。

「よいしょっと。」
「お前の籠は、掛け声を上げなきゃならねえ程食器入ってねえだろ。」
「でもぉ。」
ブツブツと文句を言いながらも、外の炊事場で二人並んで食器洗いを開始した。鈴花と龍也は、二人揃って食器洗い当番のじゃんけんで負けてしまったのだ。
「でも、龍也？」
「何だよ？」

いつものように素っ気ない返事が返ってきたが、彼女はとびっきりの笑顔でそれに応じる。
「皆でこういうことするのって、すごく楽しいよね！」
「ああ。」
彼の優しげな笑みと返事を受けて、鈴花は微笑んで続けた。
「でも、びっくりしたなぁ。まさかナンパされるなんて、思いもしなかったし。」
「蓼食う虫も好き好きって言うからな。」
むぅっとむくれて見せた彼女だったが、すぐに別のことを思い出した。
「あの龍也の台詞にもびっくりだったけどね。他人（ひと）の女に手、出してんじゃねえよ、だったっけ？」
「あれが一番面倒くさくねえ方法だろうが。」
「確かに……。」
鈴花はしゅんとしてしまった。なんとなく、彼のその言葉がくすぐったくて、嬉しかったのだ。それなのに、あっさりとした否定の言葉。少しでも期待をしていた自分を恥じる。
「何落ち込んでるんだよ？」
「別にっ。」
頬を膨らませてあきらかに不機嫌な彼女を隣に見下ろして、彼は目を細めて笑った。そのまま彼女の髪に、優しく唇を落とす。
「ふえっ。」
彼女は素っ頓狂な声を上げて、真っ赤になった。その手から、洗剤がついたままの食器が滑り落ちた。
「ななっ！」
半歩分彼から距離を取って、その目を見上げる。その目に宿されていたのは、いつものように自分をからかうような物ではなく、温かい光だった。その光を覗きこんでしまったことで気恥ずかしさが増し、俯いてしまう。
「おい、食器洗いは免除しねえぞ。」

「わ、わかってるよぉ！」
顔が熱いのは真夏の暑さのせい。昼間、遊び過ぎたせい。鈴花はそんな言い訳を心の中で繰り返しながら、彼の隣に辛うじて立っていた。

夏休み１（後書き）

こんにちは、霜月璃音です。
その手の温もり～今でも、まだ～十話目と区切りがいいので、ご挨拶をさせていただきます。
ストーリー的に後半部分に山場が集中してしまっているので、前半はおそらく高校生活でのイベントを延々と書くことになると思います。
飽きずにお付き合いいただけると嬉しいです。
ここまでお読み下さった皆様、本当にありがとうございます。
是非今後もお付き合い下さいませ。

夏休み2

海へ遊びに行った八日後の日曜日、七人はまた、鈴花の家に集まることになっていた。今日は、彼女の手料理が振る舞われる約束になっている。中華料理という意見が多かったので、鈴花は朝から調理場に籠りっきりで準備をしていた。

「ねえ、ちょっと味見してくれる？」

彼女がそう言って、最後に作り上げた酢豚の肉を、菜箸で掴んで龍也の方に差し出した。それが届く位置まで、動いてやる。

「はい、あーん。」

二人は、お互いに食べさせたりするということにまったくもって抵抗がなかった。子供の頃から、よく行っていたのだ。彼の口に、肉が器用に入れられた。

「どう？」

彼好みの味で、素直においしい。それでも、意地悪な彼は決してそんなことは言わない。

「自分で食ってみれば？」

「熱いの嫌だもん。だから頼んだんじゃない。」

その彼女の唇が、龍也の早業によって盗まれる。……ゴックン。まさかの口移し。

「……な、何するの変態！」

「お前は変態（それ）しか日本語を知らないのか？」

彼女が真っ赤になる様子を眺めて、龍也は満足気に笑った。彼女に意地悪をするのは、もはや彼の趣味と言っても良い。

「で、自分で食べてどう思った？」

「一瞬で飲み込んじゃったもの、わかる訳ないでしょ！」

真っ赤な顔の彼女は、それっきり口を聞いてくれなくなってしまった。

「へえ、これが鈴花の部屋かぁ。」
遊びに来た咲子の第一声が、その言葉だった。
「かわいい！なんか、鈴花、って感じ！」
里奈の感想通り、鈴花の部屋は、白い家具を基調に薄桃色や赤に統一されたかわいらしい部屋だった。
「お？部屋の中にも部屋があるのか？」
小柴がそう言って、その戸に手をかけた瞬間。
「こ、ここはダメ！」
鈴花が、慌てて彼がその部屋の戸を開けるのを阻止した。その慌てぶりに、全員の視線が向けられる。
「ダメって……一体何の部屋なんだ？」
高橋が興味津々に、鈴花の肩越しにその部屋の戸を眺める。
「こっ、ここは色々の部屋！龍也、ジュース持って来るの手伝って。皆は適当にくつろいでてね。」
鈴花はそう言って、腰の重い龍也を引きずって部屋を出て行った。
高橋が、小柴に声をかける。
「さて、小柴。どうする？」
「どうするって……？」
咲子がけしかけるように後を続けた。
「あれだけ慌てるの見ちゃったら、気になるよねー。」
「確かに、何があるのかすごく気になるかも……。」
葵が咲子に続けてそう言った。里奈も頷く。どうやら、満場一致のようだ。高橋が、いつものように音頭を取った。
「いいか？何があっても驚くなよ。あいつらが帰って来ても平静を装うんだ。いいな？せーのっ！」
勢い良く戸を開けて中を覗きこんだ彼らは、何の変哲もない普通の部屋に内心がっかりした。鈴花の部屋とは対照的に、家具は全て黒、ベッドカバーなどは青や紺色に統一された落ち着いた雰囲気の部屋だった。その部屋に置かれているのは、ベッドと机、タンスと本棚のみ。そして、葵がハッとする。

「ねえ、あれ、高校の制服！しかも、男物……。」
部屋の戸を元通りに閉めてから、鈴花の部屋の中央に座りこむ。そして、お互いに顔を見合わせた。小柴が、ポツリと一言。
「あれってやっぱり、龍也の部屋だよな……。」
続いて咲子。
「うん。あの制服、かなり大きそうだったし……。」
里奈がほんの少し頬を染めて、消え入りそうな声で呟いた。
「同じ部屋に住んでる、ってことだよね……？天井のところだけ、壁、ないよね……？」
一同、そこで沈黙。何を見ても驚かない、と。平静を装うと決めていたのに……。そこへ、鈴花と龍也が戻って来た。
「ごめんね、待たせちゃっ、て？」
振り返った五人の顔に、鈴花は固まってしまう。全員が全員、見てはいけない物を見てしまった、知ってはいけないことを知ってしまった、そんな顔……。龍也が眉をピクリと動かして、呆れたように口を開いた。
「お前ら、あの部屋の中、見ただろ……？」
「えええっ？」
彼がそう言うまでまったく気がついていなかった鈴花は、そこでパニックを起こす。
「み、見たってどういうこと？え？見てないよね？そんな、まさか、だって！」
「高梨、落ちつけ……。」
高橋がどんよりとした雰囲気でそういう。彼の横に腰を下ろした鈴花は、その肩を反対側の小柴に掴まれる。
「お前、鷹取に何をされた？ほら、正直に言うんだ！」
どうやら、一番落ち着いた方がいいのは彼だ。ブツブツと何やら危険なことを呟いている。
「何って、何もないでしょ、普通……。小柴君、大丈夫？」
「何もない訳ないだろうが！お、同じ部屋に住んでるのに！」

鈴花の肩をがくがくと揺する小柴の手を、龍也が掴んで鈴花から放した。
「小柴、落ちつけ。普通に考えろ。世に数多くいる中で、どうしてよりによってこいつに手を出さなきゃならない？もっといい女が山程いるだろうが。」
「失礼な！」
「というか、そもそもなんで一緒に住んでる訳？」
一番に冷静さを取り戻した葵がそう言って、一同が口を閉ざした。
鈴花の肩が、小刻みに震える。それを見てとった龍也が、彼女の頭を軽く撫でてやった。
「あの、えっと、それは……。」
必死で言葉を探す鈴花を撫でる手のひらが優しくなって、ふと止まった。
「お前は飯の準備してろ。俺が話して聞かせておくから。……いいんだろ？」
「……うん、わかった……。」
部屋から出て行く後ろ姿の切なさに、咲子が静かに口を開いた。
「聞いちゃいけないことだった……？」
龍也が少々答えにくそうに、眉をひそめる。それから、こちらも重い口を開いた。
「いや、なんとも言えないな……。俺が今から聞かせることは相当衝撃的だと思うんだが、あいつのことを偏見持って見るなよ。それだけは先に言っておくからな。」
そして龍也は、彼ら一人一人が頷くのを確認してから、全てを五人に聞かせた。鈴花の家のこと、遠くの学校を選んだ理由、今まで友達ができなかったこと、そして、自分の身の上も……。
「あの、あんまり美味しくないかもしれないけど、食べてね……。」
鈴花が居心地悪そうに、それでも懸命に笑顔を作ってそう言った。
いただきますの元気な声が響き渡って、それぞれの箸が思い思いの

料理に伸びる。
「ん、美味しい！」
「お、うまいな！」
「さすが鈴花！」
「これ、すっごく美味しいよ！」
皆が皆そう声をかけてくれたことに安心して、鈴花はほっと胸をなでおろした。どうやら、彼女の家のことは関係なく、これからも付き合いを続けてくれるつもりのようだ。隣に座っている龍也と目を合わせて笑ってから、二人も食事に取り掛かる。ふと、今まで何も言わずに黙っていた小柴が立ち上がった。そして、すたすたと鈴花の隣まで歩いて来る。彼女の手が、大きめの手に包まれた。そして。
「高梨、俺と結婚してくれ！」
「え？」（鈴花）
「あ？」（咲子）
「は？」（高橋）
「ほ？」（葵）
「へ？」（里奈）
ドゴォッ！強烈な突きが小柴めがけて放たれて、彼をはじき飛ばす。ただただ目を丸くしている鈴花だけが、その場に残された。龍也が小柴を張り倒した手を軽く振りながら、周囲に暗雲を立ち込めさせて口を開いた。その表情に反して彼のこめかみがピクピクと動いているのは、気のせいだろう、きっと。
「小柴……死にたいのか？俺はそいつの身辺警護をしてるって、さっき丁寧に説明してやったよな？経緯まで、事細かに。お前を危険分子として排除してもいいか？」
「恋敵（ライバル）として、じゃねえの？今の……。」
小柴が頭を抱えながら、やっと起き上がった。
「ちょっと龍也！乱暴なことしないでよ！……大丈夫？小柴君。」
「高梨……。」
小柴の表情が緩む。対する龍也は、苦虫を噛みつぶしたような、と

いう表現がぴったりの顔……。それも、その瞬間までだった。
「でも、今のは面白い冗談だったねー。危なく本気にするところだったよ！」
ピシ……。空気が凍りつく。鈴花の笑顔に対して、残り六人全員の表情が固まってしまった。
「あ、あはは、そうか、うん。」
小柴が乾いた笑い方をしながらそう言うのを見て、鈴花はより一層顔を綻ばせた。
「ぜーんぶ聞いてすぐだったのにそんなこと言ってくれるから、今ならいいよ！って言っちゃいそうだったよ。」
「……普段なら、ダメって言うのか？」
一縷の望みを託した、小柴の必死の問い。
「うん、言うよ。」
小柴、あえなく撃沈。その隣で、龍也が笑いを堪えるのに必死になっている。
「ちくしょう、鷹取ー！」
「馬鹿、やめろ。ふざけるな！」
楽しげな笑い声に包まれて、七人の夏休みは過ぎて行った。

学校祭1

間もなく、新学期が始まった。鈴花と龍也の名前は、本当にベストカップル賞候補としてあげられていた。鈴花の家に皆で集まった際に聞いていたのでそこまで驚きはしなかったが、自分たちをそんなふうに見ている人もいるということに若干不思議を感じる。

「龍也、見て。本当に載ってるよ。」

「ああ。これ、本物のカップルじゃなくてもいいらしいぜ。カップル賞って名前にする意味が曖昧だな……。」

「あはは、確かにね。でも私たち、周りから見たらそんな風に見えるんだね。ねえ、どう？このまま付き合っちゃうっていうのは？」

鈴花が冗談めかして言った言葉に、龍也が意地悪く笑って言った。

「ああ、お前がもう少し色っぽくなったら考えてやるよ。」

「さようなら、変態さん。」

あっさりとそう言って背中を向ける鈴花に、龍也が曖昧な笑みを向けた。しかし、それを背中で受け止めた鈴花は、全く気が付いていなかった。彼の切なげな、その表情に……。

「はい、それじゃあ役割決めてくぞー。」

ホームルームの時間、クラス委員長の龍也は、同じくクラス委員長のめぐみと司会進行を行っていた。議題は、学校祭の担当決めだ。鈴花たちは、七人で学年発表をする予定だった。各クラスから代表が集まって、劇や映画を作るのだ。

「じゃあまず、仮装やる人ー。」

龍也のやる気のなさそうな問いかけでも、何人かの女子が手を上げた。その名前を、全部めぐみが黒板に書き写していく。

「じゃあ次に、展示やる人ー。」

今度はバラバラと男子数名の手が上がった。

「で、最後に学年発表やる人ー。」

バラバラと、予定通り七人の手が上がった。龍也も黒板の前でしっかり手を上げている。他に、めぐみとその友達が一人。計九人となった。
「おっ、大体予定通りだな。ご協力に感謝。それじゃあ、各班に分かれて話し合い開始、ということで。俺たち学年発表は武道場で話し合いだから。」
皆一斉に指示通りに動きだしたのを確認してから、彼らは武道場に向かった。

「えー、それでは、一年の学年発表は劇ということでよろしいですか？」
D組の委員長が代表になって話し合いをさくさくと進めてくれたので、学年発表の種目決めはかなりスムーズに行われた。
「次に内容ですが、どんなものをしますか？」
「どうせなら人が集まるようなものをしたらいいと思いまーす。」
C組の一人が、わかりきっているようなことを言った。それは暗黙の了解、というやつなのではないだろうか。龍也が、面倒くせえ、と呟いて溜息をついた。
「はあーい、ここに一番の適材がいまーす。」
小柴がそう言いながら手を上げて、龍也のことを指し示した。
「なるほど、小柴にしては冴えてるじゃない！一年生でミスター候補に選ばれた鷹取君なら、間違いないね！」
咲子が彼の意見を後押しして、あちこちからそれに賛同する声が聞こえて来る。面倒な展開になって来たから帰りたいな、などと龍也は思っていた。
「どうせなら、恋愛物の劇にして高梨さんと組んでもらうのは？ほら、ベストカップル賞候補が演じる！的な宣伝のしかたをしてさ！」
そう発言をしたのはG組の女子だった。それにも賛同する声が上がって来る。まずい展開になって来て、鈴花も口をつぐんだ。彼女は俗に言う、大根役者、なのだ。

「どうやら皆さん、賛成のようですね。それでは、二人に主役をお願いして、恋愛物の劇をやるということでよろしいですか？」
拍手喝采。彼女が大根だということは、ますます言いだしにくい状況になってしまった。
「それでは、決定いたします。次に、劇の題材についてですが……。」
その決定宣言に落ち込んだ人間が、三人。鈴花と龍也、そして、小柴。
「まあ、墓穴を掘っちゃうことになったけど、気にするな！」
咲子がそう言って、彼の背中をバシンと景気づけに叩いてやった。
「べ、別にそんなこと……気にしてないし。」
それが彼の強がりだとわかっている彼女は、何も言わずに笑って見せるだけだった。

学校祭2

「えっと……じゃあ、あなたは本当に、その……。」
「アホ、やり直しだ。すげー棒読みだな。しかも、台詞覚えきれてないだろ？」
「だってー……。」
鈴花と龍也の二人は今、自宅で劇の練習をしていた。二人が学校祭で行う劇は、現代版源氏物語。次々に浮き名を流す、龍也扮する会社社長が、手元に養女として引き取った鈴花に惹かれて行くという物語だ。
「だってじゃねえよ、下手くそ。大体、ただの台詞だぞ？どうしてそのまま読めないんだよ？」
「だって、なんか緊張するんだもん……。ほら、そんなに言うなら龍也もやってみてよ！」
鈴花のその言葉を受けて、龍也が咳払いをしてから鈴花の手を取った。二人は今、ラストの龍也が鈴花にプロポーズをする、というシーンを練習していたのだ。
「今までずっと、お前のような人を探していた。……紫（ゆかり）、これをお前に……。」
何か小さな物をを取り出し、彼女の手に握らせるような動作。紫というのは、劇中での鈴花の名前だ。細かな動作すらも完璧にこなして見せる龍也に、鈴花は完全に呑みこまれていた。
「おい、箱開けるふりしろよ。ここ、指輪渡すシーンだったろ？」
「あ、うん……。」
何とか返事をして、ぎこちない動作で、一応それっぽく箱を開ける仕草をして見せた。すると龍也は再び鈴花の手を取り、膝を折って彼女を見上げる。
「結婚してくれ……。」
「にゃっ？」

鈴花が一瞬にして耳まで真っ赤になったのを見て、龍也は思い切り吹き出した。
「お前、本当に笑えるな。劇の台詞を本気にするな、アホ。」
「だ、だってつい……。」
顔を真っ赤に染めたまま両手を激しく動かして否定の動作をしてみせる彼女の頭を、龍也の大きな手がクシャクシャっと撫でた。その仕草で、ますます心臓の鼓動が速くなる。どうかしたのだろうか……？
「ああ、そんなに言って欲しいなら本気で言ってやろうか？結婚して下さい、って。」
「いらないよ、龍也の馬鹿！」
そう言って舌を出して見せる彼女に笑いかけてやるが、本当は複雑な気分だった。冗談めかして言ったとはいえ、自分のさりげない告白を、あっさりと彼女に否定されてしまったのだ。鈍い彼女には気付いてもらえないだろうと予想はしていたのだが、さすがにこうまで予定通りだと、いささか泣きたくもなってくる……。
「どうしたの、龍也？」
立ち上がって複雑な表情を浮かべている彼を見上げて、鈴花が首を傾げた。
「あ、いや……。」
本人がまったく意識もせずにいるのだから、手も足も出ない。龍也はそんな状況に溜息をついた。
「あ、お腹空いた？御飯にしようよ！」
彼女は上機嫌にそう言うと、廊下へと続く戸を開けて、彼に手招きをする。どうしようもないほど鈍いな、と思って、彼は再び溜息をついた。
「早く行こうよ！今晩、きっとカレーだよ！いいにおいがするもん！」
その一級品とも言える鈍さを仕方ないと思い、彼は彼女の手招きに従って部屋を出た。

学校祭3

学校祭の準備も着々と進む中で、鈴花たちA組の面々はそれぞれに気分を盛り上げ、新人賞を取るという目的に向かって団結しつつあった。

「鈴花ー、合唱の練習の時間になるよ！行かなきゃ！」

「あ、先に行ってて！今、衣装を合わせてるの。終わったらすぐ行くから。」

咲子の言葉にそう答えながら、鈴花は学年発表の衣装係の子たちが持って来た衣装を合わせていた。現代物の劇なので私服で出てもいいのだが、それでは衣装係の子たちの仕事がなくなってしまう、ということで、全員分の衣装をつくることになっていた。龍也はすでに衣装合わせを終えている。

「龍也も先に行っていいよ。ほら、真面目に練習しないと！」

「はいはい、先に行って、とりあえずつっ立ってればいいんだろ？」

「それじゃダメ！ちゃんと歌わなきゃ！」

龍也は英語の次に音楽の時間というものが嫌いで、特に合唱などは真面目にやった試しがなかった。鈴花に言われて、とりあえず歌うといった状態。歌自体は上手い方なのだが、やる気のなさも一級品だった。

「あーあ、面倒くせえ……。」

「ほら、そんなこと言わないでよ。皆頑張って練習してるんだから！」

「へいへい。」

鈴花に背中を向けて軽く手を振りながら、彼は合唱の練習に向かった。

「あ、高梨さん、もういいよ。ごめんね、合唱の練習、行って来て。」

鈴花が解放されたのは、それから僅か三分後のことだった。こんな

ことなら龍也に待っていてもらえば良かったかな、と思った鈴花だったが、今更そんなことを思っても仕方がないので、一人で衣装合わせを行っていた部屋を出て、合唱の練習に向かう。合唱は各学年ごとの審査でポイントも高いということで、どのクラスも一生懸命に練習を行っていた。

「高梨さん、ちょっと。」

後ろから呼び止められたと思って鈴花が振り返ると、そこにはめぐみの姿があった。他に、彼女と一緒に学年発表に入った子が一人いる。

「どうかした？合唱の練習、行こうよ。」

きょとん、としてそう言った鈴花だったが、めぐみの言葉が続けられた。

「ちょっと話があるの。すぐに終わるから。」

「うん……。」

何となく嫌な感じがした鈴花だったが、めぐみが醸し出す雰囲気に断ることができず、彼女の後について行った。

「ふわぁ……。」

面倒だな、などと思いながらも、彼女が来た時に怒られないように練習に参加していた龍也だったが、鈴花がいつまで経っても姿を見せないので、いい加減心配になっていた。

「遅えな、あいつ。何やってるんだよ？」

いい加減合唱の練習に飽きて、窓際で高橋と悪ふざけを始めていた小柴が、ふと龍也を呼んだ。

「なあ、鷹取。あれ、高梨じゃねえか？」

「は？いくらあいつが方向音痴だからって、さすがに学校じゃ迷わねえだろ。」

そう答えながらも、彼女が来るのが遅すぎると感じていた龍也は、小柴が指差す辺りに目を向けた。

「ほら、あの中島さんと一緒にいるの、高梨だろ？仲良かったっけ

？」
「いや、どちらかと言うと悪いはず……。」
何か嫌な予感がするな、と思って成り行きを見つめていた龍也だったが、ふと窓枠から身を乗り出した。高橋が驚いて彼を止めようとする。
「おい鷹取！さすがに危ねえぞ！」
「ちょっ、あいつら、何やってるんだよ！」
めぐみが鈴花の腕を掴んでぐいぐいと引いて行くのを見て、小柴が声を上げた。身を乗り出していた龍也が、それを視線の先に捉えながら窓枠に足をかけた。
「おい、鷹取？」
高橋がまだ彼を止めようとしているので、軽く振り返って一言。
「悪ぃ、俺、ちょっと練習サボるわ。あいつ迎えに行って来る。あいつらが向かった先、体育館裏の倉庫があるだろ？そんな暗い所に連れ込まれたらあいつ、間違いなく気絶するから。」
「おい、ここ、二階だぞっ？」
高橋が止めるのも聞かず、龍也は窓からひらりと飛び降りた。見事に着地して、鈴花たちが消えた方角へと駆けて行く。どうやら、高橋の心配も杞憂に終わったようだ。

「ねえ中島さん、合唱の練習に行かなきゃ。皆頑張ってるんだもん、私たちだけこんな所でサボってたら怒られちゃうよ。」
鈴花はそう言って彼女の手を振りほどいたが、またその手首を強く掴まれてしまった。
「ねえ、話って何？こんな所まで来なきゃダメなこと？早く行かないと……。」
「別に一人位いないからって、どうってことないじゃない。大体、あなたのそこが嫌なの！」
突如向けられた負の感情、嫌悪の言葉に鈴花は言葉を失ってしまった。

「自分ばかりいい子だと思ってる？あなた、自分がどれだけ龍也君に迷惑かけてるのかわかってるの？登下校も一緒、おまけに部活でも一緒、クラスでだってずっとべったりくっついていて、龍也君、全然自分の時間がないじゃない！」
「あ、確かにそうかもしれないけど……。でも、龍也に迷惑をかけるのは昔からだし、もう馴れちゃったんじゃないかな？」
思わぬ指摘に一瞬困った彼女だったが、間違いなく龍也ならこう答えるだろう、と思ったことを口にした。
「へらへらと笑いながらそんなことが言えるなんて、あなた、どういう神経？」
「どうもこうも、そういう奴なんだから仕方ないだろ。……おい、いつまで練習サボってる気だよ？俺に真面目にやれとか言っておきながら、自分はこんな所で油売ってるのか？」
手首を、大きな手につかまれる。彼女を安心させるその温もりの持ち主は、もちろん龍也だった。
「あ、えっと……。ごめんなさい……。」
言い訳をしても仕方がないと思った鈴花は、彼女にしては珍しく、素直に龍也に謝った。正直言って、彼が来てくれたことにホッとしていた。めぐみのことは決して嫌いではないのだが、苦手、もしくは怖い、というのが鈴花の中での彼女への印象だった。
「ほら、行くぞ。」
「うん。」
引かれる手を振りほどこうともせず、鈴花は大人しく彼にしたがった。
「あ、そうだ。一言申し渡しておかないとな。」
龍也はそう言って、めぐみたちの方を振り返った。彼の足が止まったので、鈴花の足もそれに合わせて止まる。
「クラスのことはこいつに言っても仕方ないだろ。それに登下校や部活も、俺が好きでこいつと一緒にしてるんだ。こいつに非はねえよ。」

「っ……！」
言葉を失っているめぐみを後に残して、龍也はまた鈴花の手を引いて歩き出した。鈴花が歩きながら後ろを振り返って、めぐみに声をかける。
「中島さん、今度一緒に遊びに行こうね！今度は美味しいケーキのお店、教えてほしいな！」
彼女はそれだけ言うと満足したようで、前を向いて歩き出した。隣の龍也が溜息混じりに声をかける。
「お前、本当にアホだな。嫌われてるのがわかってるのに、どうして遊びに誘ったりするんだよ？」
龍也を見上げて、とびっきりの笑顔でそれに答える。
「だって、私は中島さんのこと大好きだもん！今まではちょっと苦手だったんだけど、今日そう思ったの。だって、皆が思っててもってくれないようなこと、ちゃんと言ってくれるじゃない？それがすごーく嬉しかったの。あ、龍也も迷惑だと思ったら言っていいからね。そうしないと私、どんどん暴走するかもしれないから。」
「お前の暴走癖は今始まったことじゃないだろ。」
彼がそう言いながら自分に向けてくれる笑顔が優し過ぎて、言葉も出なくなる。心臓の鼓動がまた高鳴って、おかしな位不規則になる。目を合わせているのが、手を握られているのが急に恥ずかしくなって、鈴花はパッと彼の手を振りほどいた。
「何だよ、暴れるな。」
「べ、別に暴れてないじゃない！何でもないの！」
そう、何でもないはず……。それなのに、この不自然な動悸は何だろう……？
「私、最近おかしい……。」
「今更気付くなよ。お前は昔から変な奴だぞ。」
「放っておいてよ、馬鹿！」
龍也に対する調子が悪い理由に鈴花が気付くのは、もう少し後の話。

学校祭４

学校祭前日。仮装の衣装が配布されたり、クラス展示の最終調整が行われたりしている中で、鈴花は教室内に自分がいても邪魔になるだけだということがわかり、咲子、葵、里奈の三人と廊下に出ていた。龍也、小柴、高橋の三人は展示の手伝いをしている。

「楽しみだねえ、明日！」

「クラス展示がお化け屋敷なのは、三年生だけみたい。さすがに先輩の所であれをやる訳にはいかないしなぁ……。」

鈴花の満面の笑みでの言葉にそう答えて、三人は肩を落とした。学校祭＝お化け屋敷＝人を驚かすまたとない機会という方程式が、彼女たちの中では成立しているらしい。そんなことを考えて鈴花がくすくすと笑っているところに、めぐみが近付いてきた。

「あ、中島さん、どうかした？」

鈴花がニコニコとして話しかける様子を、この前の事件を知らない三人は訝しげな表情で見つめる。

「……これ。この前言ってたでしょ？」

彼女がそう言って取り出したのは、とあるカフェのホームページを印刷したものだった。鈴花好みのかわいらしいケーキの画像がいくつも載せられている。

「うわぁ、ステキ！わざわざ調べてくれたの？ありがとう！」

屈託のない笑顔で見つめられて、めぐみはパッと彼女から目を逸らした。

「お店は元々知ってたけど、何か見るものがないと、好みに合うかわからないでしょ？空いてる日、そこに連絡しなさいよ。」

それだけ勢いよく言うと、彼女はさっさと歩いて行ってしまった。

そこ、と指差された部分を見ると、彼女のメールアドレスが記されていた。

「めぐみちゃん、ありがとう！」

歩いて行く背中に、鈴花は思い切り笑いかけた。今まで成り行きを見守っていた三人が、そんな彼女に詰め寄る。
「ちょっと、いつの間に中島さんとそんなに仲良くなったの？というか、ライバルでしょ、ラ・イ・バ・ル！」
「この前仲良くなったばっかりだよ！ところで、ライバルって、何の？」
里奈のその言葉に、鈴花はきょとん、として質問を返した。葵が溜息をついてから呆れ顔で答えてくれる。
「あのねー……。鷹取君を巡って、に決まってるでしょー……。勝つのはかわいい天然か、それとも美貌の女王様か、って、結構有名な話なんだから。賭けの対象にもなってるくらい。」
「へっ？ちょ、ちょっと、そんな話知らないよ？大体、龍也が私のことなんて好きになる訳ないじゃない。意地悪をして楽しむペット程度にしか思ってないよ、きっと……。それに、一体皆は何を賭けてるの？」
自分で言ってしまった言葉に、胸がチクリと痛む。そうだ、それが事実なのに、どうして痛みを感じる必要があるのだろうか……。それを紛らわすために、皆が何を賭けて勝負をしているのかを訊ねた。
「お昼ご飯のパンとか、帰り道でアイスをおごる、とか……。それは人によって違うけど。あ、ちなみに私はダークホース小柴に一票。」
咲子がそう言ってにやりと笑ったので、鈴花は一瞬想像するのに間を置いてからパニックを起こした。
「だ、ダークホースが小柴君っ？それってつまりその……龍也と、小柴君？そ、それはいくらなんでもないと思うよ！二人は友達だよ、友達！」
葵が鈴花の両肩に手を置き、正面からゆっくりと宥めてくれた。
「大丈夫だよ、鈴花。そういう組み合わせじゃないから。でも、さすがだねー。ここまで鈍いと、二人も困ってるだろうなぁー……。」
「え？二人って？」

目を丸くしてそう問いかける鈴花に、三人は一様に溜息をついて見せた。
「はいはい、鈍い子には何を言ってもダメですねー、っと。さあ、演劇の練習、行くよ！」
「ちょっと、誤魔化さないでよー！」
そんなことを言っている内に置いて行かれかねないので、鈴花は慌てて三人の後を追った。その様子を見て会話も聞いていた龍也、小柴、高橋の三人の手が同時に止まる。
「ま、頑張れ。困ってるお二人さん。」
高橋は、そんなことを言ってニヤリと笑って見せる。
「調子に乗るな！」
龍也はそんな高橋を小突いた。その後、小柴と視線が合ってしまう。
「べ、別にいいだろ。高梨、お前と付き合ってる訳じゃないんだろ？好きになったって、それは俺の自由だ。」
「いや、別にそれについては何も言わねえよ。ただ、悪趣味だなぁ、と思って……。」
「人のこと言えた義理かよ……。」
「そうだぞ、困ってる人一号。」
またしても龍也の握り拳が高橋の頭に炸裂する。頭を抱えて痛(いて)ぇ、と言いながら、高橋はうずくまった。
「人生初のライバル出現、って訳か……。一番の敵はあいつの鈍さだけど、お前も油断ならねえな。」
龍也はそう言って小柴をぐっと見据えた。
「別に俺はどうするつもりもねえよ。高梨がお前のこと好きなのは一目でわかっちまったし。まあ、気付いてもらえるように頑張れよ。」
小柴はそう言って龍也の方をポン、と叩くと、別の仕事の手伝いに行ってしまった。

学校祭5

そしてついにやって来た、学校祭当日。一日目は咲子たちと他のクラスのクラス展示を見て回った鈴花だったが、二日目は学年発表の劇がある。前日の夜から緊張していた彼女は、ろくに眠れもせずに本番を迎えた。

「おい、どうしたんだよ、その顔。」

「ほ、放っておいてよ！」

意地悪な龍也が、いつものように意地悪に笑う。

「大方、緊張しすぎて眠れませんでした、ってパターンだろ。お前、昔っからそうなんだよな。小学校の時も、学習発表会の前の日は寝れないー、とかって騒いでただろ？」

「うううう……。」

図星を指された彼女は、言い返すこともできない。その様子を見た彼が、その笑顔の危険度を二割増しにして笑った。

「まあ、せいぜい頑張れよ、大根。」

「大根って言うなぁーっ！」

自分だって劇をさせられるくせに、と思った彼女だったが、その叫びは秋晴れの空に吸い込まれて、消えた。

「あちゃー、鈴花、案の定緊張して寝れなかったんでしょ？」

そう言ったのは葵。またしても図星を指された彼女だったが、もはや反論する余裕すらない。

「うううう……。葵ちゃん、どうしよう……。吐きそう……。」

「ちょっと、せっかくの衣装に吐かないでよ！だいたい、そんな弱っちいこと言っててどうするの？鈴花がいないと、劇はできないんだよ？」

「あら、大丈夫よ。」

一生懸命に鈴花を奮い立たせようとする葵の後ろから、そう声がか

かった。声の主は、そのままつかつかと歩み寄って来る。
「私、台詞全部覚えてるわよ？そばで聞いてたんだもの。代わってあげましょうか？龍也君の相手役！」
そう言ったのは、めぐみだった。龍也の相手役、という言葉に、何かがチクン、と痛む。
「おい、鈴（りん）。」
その呼び方で彼女を呼ぶのは、昔から一人。鈴花は、自分に向かって手招きをしている龍也の方に歩いた。
「お前、冗談じゃないぞ？俺にあれと出ろって言うのか？」
龍也は、鈴花にそう早口でまくしたてながら、チラリとめぐみに視線を走らせていた。
「ううう……。頑張りたいんだけど頑張れない……。」
「アホ、死ぬ気でやれよ。あれと出ろって言うなら、俺は今すぐ頭痛と吐き気で早退するぞ？」
「だ、ダメだよ、龍也！龍也の代役こそいないんだよ？」
ポン、と頭に大きな手が載せられる。それだけで、一気に気分が良くなった気がする。代わりに、激しい動悸に見舞われているが……。
「あ、なんか頑張れそうな気がする。」
「まあ、あんまり気負うな、大根。」
「う……。汚名返上のためにも頑張らねば……。」
最後に龍也が見せたのは、優しげに眼を細める、極上の笑顔だった。
鈴花が汚名返上に成功したかどうかは……言うまでもない……。

振替休日

学校祭も無事終わり、その振替休日である月曜日、鈴花はある人物と待ち合わせをしていた。隣には、いつものように龍也の姿。
「もう、どうしてついて来たのよ、龍也？大丈夫だって一万回も言ったのに。」
「嘘をつくな、嘘を。お前は十四回しか大丈夫だって言ってないだろ？」
しっかり数えてたんだ、などと思ってしまった鈴花。そんな彼女を隣に見下ろしながら、彼が別の話題を繰り出す。
「で？水族館、いつ行くんだ？」
「あ、そうだね。龍也と水族館、行かなきゃ！ううんと……。」
鈴花はガサゴソと鞄の中をまさぐって、手帳を取り出した。学校祭一日目はミス、ミスターなどの投票日にあてられていたのだが、それと一緒にベストフレンズ、ベストカップル賞の投票も行われていて、彼らは知らない内にその年のベストカップルに仕立て上げられていたのだ。そしてその賞品が、電車で三駅程学校よりも向こうにある、水族館の招待券だったのだ。
「あ、来週の日曜、ちょうど部活が休みだよ！この日にしよう、龍也！ね、来週の日曜！」
「はいはい……。」
不満気にそう言って、彼は口を閉ざした。龍也の予定では平日である今日水族館に行くはずだったのだが、彼女が別の人物と先に約束をしていた、と言い、あっさりと彼の誘いを断ってしまったのだ。
「あ、いたいた。めぐみちゃーん！」
そう、彼女が約束をしていたのは、あのめぐみだったのだ。それが、彼をなおさら不機嫌にさせていた。
「ちょっと、約束の時間に二分遅れてるわよ！」
「あ、えっと……忘れ物したから戻ったら、電車に乗り遅れて……。

ご、ごめんなさい！」
素直に謝る彼女に、別にいいわよ、と言ってやってから、めぐみは龍也に視線を当てた。
「あら、龍也君も一緒？」
「いや、俺はこいつが道に迷わないように送って来ただけだから。いいか？帰りもちゃんと連絡入れろよ。」
「だ、大丈夫だよ、一人で帰れるもん！」
口を尖らせる彼女に、間髪入れず一言。
「ほお、そうだよな、もう高校生だもんなぁ？」
「うううっ……。」
正直言うと、彼女はまだ道に自信がなかった。先程までの言葉は、もちろん虚勢だ。
「む、迎えに来て下さい、龍也さん……。」
「いや、一人で帰れるんだろ？ついさっき、確かにそう言ったよな？」
とびっきり意地悪に口角を吊り上げて笑いながらそう言う彼に、鈴花はますます唇を尖らせる。
「ひ、一人じゃ多分、帰れません……。その、ケーキ屋さんから駅までが、ちょっと……。」
「よろしい。で？どこ行くんだよ？」
龍也は鈴花の頭にポン、と手を乗せると、視線をめぐみに当ててそう訊ねた。
「……言いたくないけど、すぐ近くよ。それこそ、大きな通りに出れば駅が見える位、近く……。」
ぶっ、と龍也が吹き出した。
「……ちゃんと連絡しろよ。じゃあ、こいつのこと頼むぞ。」
鈴花の頭を二度、ポンポン、と撫でると、龍也はくるりと背を向けて行ってしまった。撫でられた頭を押さえながら、ほんのりと頬を赤く染めて、彼の背中を見送る。
「ねえ、龍也君、どうしてついて来たのよ？」

めぐみの声にハッと我に返って、慌てて作り笑いを浮かべる。
「えっと……。本屋とか行くって言ってたから、そのついで、かな？」
本当は彼女のボディガードだから、なのだが、龍也に口止めされていて、極力そのことは他人に知られないようにしていた。本当は、本屋の方がついでなのだ。
「ふうん、そう。ほら、行くわよ？」
「うん！」
今日は、以前から約束をしていたように、彼女とおいしいケーキを食べに行くのだ。割と小さな店のようなのだが、そのケーキのかわいらしさに惹かれて、鈴花はその店を選んだ。選んだ、とは言っても、めぐみがピックアップしてきたお勧めのお店から、行ってみたい店を選んだだけなのだが……。
「で？どうするの？二時間食べ放題コース？それとも、普通に食べる？」
「もちろん食べ放題！だって二千円でしょ？それでたくさん食べれるなんて、幸せだよね！」
鈴花のとろけそうな笑顔を見て苦笑するめぐみだったが、そうこうしている間に目的の店の前についた。早速中に入る。
「うわぁー、素敵！」
そう歓声を上げて、ガラスケースの中をじっと見つめる鈴花。めぐみはまたしても苦笑して、彼女の隣に並んでやった。
「いらっしゃいませ。」
ガラスケースの向こうから、若い女性店員が愛想よく笑う。
「二時間食べ放題、二人お願いします。」
「はい、ありがとうございます。こちらへどうぞ。」
案内のためにフロアの方に出て来た店員が、奥の座席の方を示した。真剣な顔でガラスケースに張り付いている鈴花を引き剥がして、彼女について行く。
「学生様でしょうか？」

「はい、高校生です。」
もはや自分の世界に入り込んでいる鈴花は無視して、めぐみが店員の質問に答える。
「お飲み物は何になさいますか？」
「ちょっと、ブツブツ言ってないで飲み物選んでよ。」
鈴花を一瞬現実に引き戻してから、めぐみは自分もメニューに目を移した。
「うん、と……。アップルティーにしようかな。」
「じゃあ、アップルティーとダージリンを。」
めぐみのその言葉を受けて、店員は一度下がって行った。その後すぐ戻って来て、食べ放題について説明を始める。
「ご注文いただいた商品を、あちらのケースからお取りいたします。お飲み物のおかわりは、お申し付け下されば持ちいたしますが、有料となりますのでご注意ください。それでは、最初はどちらのケーキをお持ちいたしましょうか？」
「ほら、どのケーキ？」
「あ、じゃあ、アリスの小箱……。」
「レアチーズ、お願いします。」
店員はかしこまりました、と言って下がって行った。とても楽しそうにケーキを待つ彼女に、話しかける。
「どうせなら、龍也君も一緒に来ればよかったのに。」
鈴花が顔を上げてきょとん、とした。
「龍也ね、甘いもの、好きじゃないんだ。だけど、いつも私に付き合ってカフェとか入ってくれるの。」
最後はニコリと笑ってのろけて見せる彼女に、めぐみは溜息をついた。いや、のろけ、というのは彼女の解釈であって、実際に鈴花にそんな気がないというのはよくわかっている。
そこに、先程の店員がケーキと紅茶を持ってやって来た。
「失礼いたします。こちら、アリスの小箱とアップルティーになります。こちらが、レアチーズとダージリンになります。」

「わあ、素敵！」
鈴花が頼んだアリスの小箱は、色とりどりのフルーツが乗せられたショートケーキだ。めぐみが頼んだレアチーズは、その名の通りレアチーズケーキに、ブルーベリーソースがかけられたシンプルなものだった。
「わあ、後でそれも食べちゃお！」
ニコリと本当に幸せそうに笑ってから、自分が注文したケーキを頬張る。そしてそれ以上にとろけるような笑みを浮かべて、おいしい、と言った。
「ねえ、すごいこと聞いちゃうけど……。」
「ほえ？」
めぐみの息をつめて緊張しているかのような問いかけに、鈴花はあまりにもぼけっとした返答の仕方で応じた。
「龍也君とあなたって、本当はどんな関係なの？」
「へっ？龍也が言ってたよね？幼馴染だって……。」
はあ、と大きく肩を落として溜息をついてから、めぐみが続ける。
「そんなことはどうだっていいのよ。いくら幼馴染だからってあれだけずっと一緒にいるはずないでしょ、普通。」
「あ、えっと、それは……。」
めぐみの鋭い指摘に、返す言葉もない。確かに彼女の言う通りなのだが、龍也に口止めされているためにそれ以上言える言葉もない。
「正直に答えなさいよ……？」
「は、はいっ！」
めぐみの詰問するかのような口調に、鈴花は思わず背筋を伸ばして姿勢を正した。
「あなた、龍也君のこと好きなんでしょ？」
「ひえぇっ？」
突拍子もない彼女の問いかけに、思わずおかしな声を上げてしまう。それと同時に持っていたフォークも取り落とし、彼女の顔は、ケーキの中心でその存在を主張する苺、その色よりも赤くなっていた。

「な、な、どうしていきなりそんなことを……？」
めぐみは呆れたように溜息をついてから続ける。
「あのねー……。あなた、見ていてものすごくわかりやすいのよ。はっきり言うと、単細胞、なのかしら？」
「う、どこかで聞いたような台詞……。」
彼女の指摘に思わず、そう言って意地悪に笑う彼の顔を思い出してしまった。今は思い出したくなかったのにな、と心の中で呟く。鼓動が高鳴って、どうしようもなくなるからだ。
「それで？正直に言ったらどうなのよ？」
めぐみの言葉に、鈴花は視線を落とした。食べかけのケーキを見つめたまま、しばらく考え込む。めぐみは彼女を急かすようなことはせず、じっと答えを待っていた。
「……よく、わからないよ……。」
「は？」
長い時間彼女を待たせた結果の返答が、その一言だった。めぐみが、唖然として聞き返す。
「よく、わからないの。子供の頃からずっと一緒にいて、龍也がいてくれるのが当たり前過ぎて、よく考えたことないもの。それに……。」
続きがあるようなので色々と言いたかったことを飲み込んで、それに聞き入る。彼女の口は、ゆっくりと続きを紡いだ。
「私、もしかしたら龍也のこと、嫌いなのかも……。」
「……はっ？」
先程以上に唖然として、彼女に聞き返す。一体何を言いだすのかと思えば、随分ととんでもないことを……。はっきり言ってしまえば、どこからどう見てもそんなはずはない。
「だ、だってね、最近、変なの！」
「変なのはあなたの言動でしょ。」
さらっとひどいことを言った彼女だったが、鈴花はそんなことを言われたことにも気付いていないようで、何も反論せずに続けた。

「その、何て言うか、最近龍也といたら、ちっとも落ちつけないの！心臓がバクバクして、キューって苦しくなって！一緒にいるのが辛くなるのって、もしかしてそうなのかな？って思ってるんだけど……。」
そこまで一気に話してから、めぐみに冷たい目で見られていたことに気がついた。
「あなた、どこまで馬鹿なの？」
「そ、そんな！」
今度は悪口を言われたということを自覚したようで、鈴花は半分泣きそうな表情で彼女を見つめた。
「そんなの、好きだからなるに決まってるじゃない！それを嫌いなのかも、ですって？馬鹿よ、馬鹿。しかも究極に鈍くて、救いようのない、馬鹿！」
「さ、三回も言わなくても……。」
鈍い鈍いと龍也に馬鹿にされることはあったが、少なくともここまではっきりと言われたことはない。それに。
「だ、だってずっと一緒にいて、今更そんな……。」
そう、ずっと一緒にいた彼に対する想いが今更急に変わったなんて、にわかには信じられない。
「じゃあ、仮にの話よ？」
「う、うん。」
めぐみの仮定話を聞くために、姿勢を立て直す。
「もし龍也君に彼女ができて、一緒に登下校できなくなりました。」
「えっ、やだ！」
まだ話の途中だったにも関わらず、鈴花はめぐみの言葉を遮った。
めぐみがニヤリと笑う。
「ほらね、そういうこと。」
「あっ……！」
彼女は、まんまとめぐみの挑発に乗ってしまったのだ。そして、それで自分の心の底にあるものが、見えた気がした。

「しかし、こんな手に引っかかるなんて。あなた、本当に単細胞ねぇ……。」
「うううっ……。素直にお礼が言えないのはなぜ？」
反論のしようがないので、口に食べかけだったケーキを頬張る。それでも、心が軽くなったのは感じていた。胸につかえるようだった、疑問の正体。それが、彼女のおかげで一瞬にしてわかったのだ。理由がわかったおかげ、動悸や頬が熱くなるのはしかたないことだとわかったおかげで、彼といる時間も苦しくはなくなるはず……。鈴花はそんな甘い考えを持ちながら、ケーキのお代わりを注文した。

休日明け

めぐみと過ごした休日も終わり、火曜日からは学校祭があったことさえ嘘のように思えるほどの、当たり前の日常が始まっていた。
「おい、鈴。」
「ひゃあ！」
しかし、日常に戻れない人物が、一人……。龍也に後ろから呼ばれた鈴花は、思い切り飛び上がって咲子の後ろに隠れた。それを受けて、龍也の目が不機嫌に細められる。
「何だよ？呼ばれて驚くほど、やましいことでもあるのか？」
「ななな、何でもないでござる！」
「鈴花、その返答はどう聞いても何かあるよ……。」
咲子は自分の背中に張り付いて真っ赤になっている鈴花を見て、深く溜息をついた。
「……今日はマネージャーの打ち合わせがあるからって、さっき山下先輩が言ってたぞ。」
「りょりょりょ、了解なり！」
相変わらずおかしな口調でそう答えて、鈴花はその場から脱兎のごとく逃げ出した。
「……俺、何かしたか？昨日からあいつ、おかしいんだよな。」
「うーん、学校では、何も……。家で何かあったの？」
咲子の問いに、しばらく目を閉じて考え込む。思い当たることが、一つ。
「あー、そう言えば俺、昨日の夜あいつの飯がまずいって言ったかもな……。」
「鷹取君、それ、アウトだよ……。」
どうしようもない、というように首を振って見せる咲子に、龍也は溜息で応じた。
「何考えてたんだかしらねえけど、あいつ、ボーっとしながら魚焼

いてたんだよな。まあ当然、炭の塊がグリルから出て来たって訳で……。」
「それ、まずいどころの話じゃないね……。と言うか、よく食べたね、そんなもの……。」
そこで咲子がニヤリと笑う。嫌な予感がした龍也だったが、こんな顔を咲子にされてしまう時は、すでに逃げる機会を失ってしまったことを意味している。
「愛の力、ってやつですかぁ？」
「っ……！馬鹿言うな！」
勝ち目がないと本能的に理解している龍也は、逃亡するという選択肢を選び取った。そこで咲子は、もう一方のうさぎの元へ向かう。
「それで？鈴花。一体何があって龍也君を避けてる訳？」
「さ、避けてるなんて、そんな！」
どうやら鈴花には彼を避けているという意識はないらしい。では先程の行動は、防衛本能からでも来ているのだろうか？
「じゃあ、どうして前みたいにしてあげられないの？あれじゃあ鷹取君、その内病気になるよ？」
「ま、まさか、そんな！」
それから俯いて、咲子に耳を貸すように合図する。久々に面白い事件が起きたな、と思っていた咲子は、快く彼女が耳打ちしやすいように屈んでやった。
「ちょ、ちょっとね、理由があるの……。」
「ふうん、どんな？」
さらにためらうような沈黙があってから、鈴花がまた、より小さい声で呟く。
「私ね、龍也が、その……。す、好きなの！」
「は？知ってたよ、そんなこと。」
「はうあっ？」
驚いた鈴花が彼女の耳元で突然大きな声を出したので、さすがの咲子もしかめっ面をした。

「ななな、咲子ちゃんの正体って……？」
「忍者。」
意味不明なことを平気で即答する彼女に、思わず小さく吹き出してしまう。
「と言うか、今更気付いたの。鈴花って鈍いのねー。」
「うううう……。」
反論の余地もない。ぐうの音も出ないでいる鈴花に、咲子が優しく笑いかけた。
「でもさ、考えてみてよ。今の態度、どう考えても不自然じゃなかった？」
「た、確かに……。」
俯く鈴花の頭に、ポンと軽く手を置く。
「それで一番傷つくのって、きっと鷹取君だよね？」
「う、うん……。」
わしゃわしゃっと髪が乱れる程強く撫でられて、鈴花は驚いて顔を上げた。
「ちょ、ちょっと咲子ちゃん！ぐちゃぐちゃになっちゃうよ！」
さすがにそれは、女の子としてまずい。鈴花はそう思って、自分の両手を頭に被せた。
「偉い偉い。ちゃんとわかってるんだね。それに、いいこと教えてあげようか？」
乱れた髪を軽く手櫛で整えながら、咲子を見上げる。目だけで教えて欲しいと訴える彼女に、咲子はさらに顔を綻ばせた。
「いつも通りにしてた方が、ばれないよ！」
「あ！」
咲子に言われて初めて気がついたとでも言うように、鈴花は表情を明るくしてそう一声だけ発した。確かに、普段とどこか違うところがあれば、龍也に気付かれてしまうのも時間の問題なのである。
「鷹取くーん！」
咲子の声で、窓際で小柴、高橋と三人で固まってた龍也が振り向い

て、こちらにやって来る。
「何だよ？」
「鈴花が何か言いたいらしいよ。」
咲子はそれだけ言うと、自分はさっさと行ってしまった。何を言おう？突然の出来事に、鈴花ははっきり言ってかなり動揺していた。普段通り、普段通り、と心で唱えながら、思いついたことを言う。
「あ、えっと……。今日の帰り、昨日めぐみちゃんと行ったお店でパパにケーキ買いたいの！……連れて行って、下さい……。」
正直言って、昨日行った場所なのに、今日も辿りつけると言う自信がない……。彼の頬が、柔らかく緩んだ。
「はいはい、了解。」
その後すぐに、小柴と高橋の所に戻ってしまう。とりあえず普段通りにできただろうと思った鈴花は、ホッと胸を撫で下ろした。
「おいおい鷹取、お前、大丈夫か？」
自分たちの所に戻って来るなり大きく息を吐き出した龍也に、高橋が声をかける。
「具合、悪いのか？」
小柴が、さりげなく気遣うような調子で訊ねて来た。龍也が、今まで床を見つめていた顔を上げる。
「はあ……。俺、マジで嫌われたのかと思った……。」
龍也のその返答を聞いて、二人が同時に吹き出す。高橋に至っては、床に転げそうな勢いで笑っているのだ。
「お、おま、お前っ……！意外と純情なんだな！わ、笑えるっ……！」
「そ、そうだよな！鷹取、お前、どう考えてもそういうキャラじゃねえぞ！」
「う、うるせえよ！」
そう言う龍也の頬は、ほんのりと赤く染まっている。どうやら、二人にからかわれたことが相当恥ずかしかったようだ。
「まあ、良かったじゃん？な？……ぶふっ……！」

上手くまとめようとした高橋だが、結局堪え切れずにまた笑い出してしまう。次の日小柴と高橋の二人は、笑い過ぎで腹筋が筋肉痛になり、起き上がることができなかったとか……。

初デート

「うわぁー、すごい！」
中に入るなり、鈴花は大はしゃぎで大水槽にかじりついた。
「俺、他人のふりしよう……。」
龍也はそんな鈴花の様子を眺めて、一人静かにそう呟いた。日曜日、彼らは約束通りに水族館に来ている。
「ねえ龍也！こっちこっち！」
ワンピースの裾を翻して、彼女はとびっきりの笑顔で彼を振り返った。こげ茶色の柔らかい髪も、彼女の動きに合わせてふわりと舞いあがる。彼女の髪は染色した訳ではないのだが、日本人のそれにしては少々色が薄い。昔水泳教室に通っていた時の名残である。しょっちゅうそれのせいで服装検査にも引っ掛かっていた。
「見て見て、かわいいよ！」
彼女が指差したのは、熱帯魚が展示されている水槽だ。色とりどりの魚が、サンゴや石の影をゆらゆらと泳いでいる。しかし彼がかわいいと思ったのは、別のものだった。彼の目には、それをじっと眺める彼女の横顔の方が、キラキラと輝いて余程かわいらしく映っていたのだ。
「……。」
そんなことを考えた自分が急に恥ずかしくなって、龍也は彼女に不自然に思われない分だけ距離を取った。そうでもしなければ、思ったことが口をついて出てしまいそうな気がしたのだ。
「綺麗だねぇー。」
彼女がそう笑った時、不意にアナウンスが入ることを告げるチャイムが鳴った。どうやら、イルカのショーが始まるらしい。
「ねえ龍也、イルカだって！行こうよ！」
「……人が集まるんだぞ？面倒くせえ……。」
そうは言いながらも、彼女の前に立って屋外プールに向かって歩き

出す。さりげなく握った手を、握り返してくれる柔らかい感触……。
それに驚いた彼は、後ろの彼女を振り返った。はにかんだような笑顔で見上げられると、何の言葉も出て来なくなってしまう……。
「っ……！」
結局彼は何も言えないまま前を向き、そのまま彼女の手を引いてイルカのショーへと向かった。

「うわあ、かわいい！」
夕方、西の空が茜色に染まる頃、二人はようやく水族館の出口に戻って来た。結局鈴花があちこちに龍也を連れまわし、いつの間にかそんな時間になってしまっていたのだ。
「見て龍也！イルカのペンダント！」
彼女が先程の歓声を上げたのは、お土産売り場でのことだった。イルカをかたどったローズクォーツのペンダントを、食い入るように見つめている。
「これか？」
隣でひょいと覗き込んで来た彼に、鈴花は何となく緊張して体を強張らせた。ずっと手をつないで歩いていたくせに、今更何に緊張しているのだろうか。そう自分でも思ってしまう。
「うん、かわいいよね？」
上目遣いに見上げて見ると、彼は柔らかく笑ってそれをレジに持って行った。一瞬何が何だかわからずに固まっていた彼女の元に、彼が戻って来る。
「ほら、行くぞ。」
始めは緊張していたくせに、今はもう慣れた様に彼女の手を包み込むと、歩き出す。
「ま、待ってよ、龍也。今のっ……！」
そう、彼は一体あのペンダントを、どうする気なのだろうか？彼の足がピタリと止まって、こちらを振り返る。
「……。」

龍也は彼女の手を離すと、無言のまま先程店員が包んでくれた包装紙を破り、イルカのペンダントを取り出した。
「龍也……？」
ふと彼が、彼女との距離を詰めた。突然の出来事に、何も反応できずに硬直してしまう。体全部が熱くなってしまっているせいだろうか、ペンダントのチェーンが肌に冷たい。止め金が止まるのと彼が離れるのとは、ほぼ同時だった。
「ぶっ……。さっきの金魚みたいだ。」
龍也はそう言って、真っ赤になったまま目を見開いて硬直している彼女のことを笑った。特別企画で、珍しい金魚が数多く展示されていたのだ。
「な、にゃ……。」
もはや脳が完全にその機能を停止していると言ってもよい。まともに言葉すら発することができないほど、鈴花の頭はパニックを引き起こしていた。
「ほら、帰るぞ。」
「りゅ、龍也、これ……。」
やっと脳が復活を果たした彼女は、ペンダントのチェーンを軽く持ち上げてみせた。
「ま、さっきのでチャラだな。」
そう言って、彼はさっさと先に歩き始めてしまった。どうやら、今更照れてしまったようだ。素直にプレゼント、と言えないのが、彼らしい。
「……ありがとう！」
それだけ今日一番の笑顔で言ってから、慌てて龍也を追いかける。
イルカのペンダントが、夕陽を受けてキラリと輝いた。

マラソン大会

龍也と初めてのデートに行ってから、二週間がたったある日。
「はあ……。」
「溜息をつきたい気持ちはわかるよ、鈴花……。」
「私も……。」
鈴花、葵、里奈の三人は、教室の隅で一緒に溜息をついていた。
「いい？私が腹痛で、里奈は頭痛。鈴花は熱があることにするんだよ。」
「……絶対龍也に怒られるもん……。」
「そうだね……。」
そしてまた三人で、はあ、と暗い溜息をつく。
「ちょっと、何暗くなってるの？明日はマラソン大会なんだから、元気出す！」
咲子がそこへやって来て、三人の背を勢いよく叩いた。
「そりゃ咲子みたいに足も速くて人間離れした体力があれば元気も出るけどさぁー……。」
「聞き捨てならないね、今の？」
里奈の言葉に、咲子がこめかみをピクリと動かした。
「仕方ないよ、咲子。本当のことだもん。」
葵が里奈をフォローする横で、鈴花も力無げに笑った。彼女たちは、翌日に控えているマラソン大会が嫌で嫌で仕方ないのだ。先程まで仮病の打ち合わせをしていたのだが、鈴花は嫌がっても龍也に連れて来られるだろう、という結論に至って、また全員で溜息をついていたのだ。
「……そうだ！三人で一緒に走ればいいじゃない！ほら、三人一緒にゴールすれば、誰がビリかわからないでしょ？」
「あ、葵ちゃん、頭いい！」
鈴花が目を大きく見開いて、葵を褒める。里奈もナイスアイディア、

というように明るく笑って見せた。
「という訳で咲子、私たちの分の活躍も期待してるよ！」
三人分の期待の眼差しが、咲子に注がれる。それを受けてしまっては、こう言う他ない。
「任せなさい！」
咲子以外の三人は、基本体育が苦手だった。いや、鈴花に至っては、苦手だなんて大人しい表現では済まされない。バレーボールは、絶対に頭でボールを返してしまう。サッカーボールは顔面で、テニスは一日一回ラケットにボールが当たれば最高潮、というありさまなのだ……。ポン、と、鈴花の頭の上に温かい手のひらが乗せられた。
「おい、お前、まさか出るのか……？」
「え？だって全員参加でしょ？大丈夫だよ、葵ちゃんと里奈ちゃんと走るから迷子にはならない！」
それが龍也の手だと瞬時に判断していた鈴花は、上から覗き込む彼にさして驚きもせずに答えた。
「いや、それでも止めた方がいいんじゃないか？女子は八キロだぞ？マット運動じゃないんだぞ？仮病使って休んだらどうだ？」
「し、失礼な！ちゃんと走れるもん！ぜーったい完走してやるっ！」
龍也が言いたいのは、マラソンの途中で転んだ彼女がそのまま前転したりするのではないか、ということだった。そして売り言葉に買い言葉、と言うやつで、鈴花は次の日のマラソン大会で八キロもの道を完走しなければならなくなったのだ……。

「ううう、やっぱりやめればよかったかな……？」
次の日、更衣室でいつもの四人で着替えをしながら鈴花はまた悩み始めた。
「でも鈴花、鷹取君に見直してほしいでしょ？」
「え、それは別に……。ダメなところなら数え切れないほど見られてるし……。」
里奈の言葉に、鈴花は苦笑いで答える。実を言うと、完走の自信な

どないに等しいのだ。
「じゃあ、見返してやらなきゃ！」
葵の言葉で、急にやる気が出て来る。そうだ、馬鹿にされたままなんて、納得がいかない。
「そ、そうだね！頑張ってちゃんと走って、龍也にごめんなさい、って言わせてやるんだから！」
「そうそう、その調子！」
最後は咲子に背中を押されて、鈴花はスタートラインに立つことを決めた。

「男子は十キロかぁ。ねえ鈴花、鈴花の予想では、龍也君は何位だと思う？」
「うーん、わからないや。ビリではないと思うけどね。」
男子が先にスタートしてしまったあとで、女子がスタートラインに立つ。葵や里奈と話しながらゆっくりと走ることを決めた鈴花は、上位を狙う咲子と別れて後ろの方に並んだ。
「ゆっくり行こうね。鷹取君が言った通りにならないように。」
「こ、転んだりしないよ！多分……。」
そんな話をしている内に、スタートのピストルが鳴らされた。
「はぁー、咲子は早いねぇー……。先頭集団なんかもう見えないよ。」
葵の言う通り、先頭の集団はスタートのピストルと同時に勢い良く飛び出して言った。自分たちとは全く関係のない世界で繰り広げられる攻防を想像して、彼女たち三人は苦笑いした。
「ま、私たちには関係ないよね！ゆっくり行こう、ゆっくり！目標は、鈴花が転ばないで完走する、ってことで！」
「里奈ちゃん、ひどいー！」
両手をぶんぶんと激しく振りながら、里奈を追いかける。そんなふうに三人は、自分のペースというものを意識しながら走った。

「はあ、はあ……。」
「後、二キロちょっと……？」
呼吸は上がっているが、そこまで苦しくはない。鈴花は、これがランナーズハイというやつか、などと自分にかなり都合のいいことを考えていた。正確にはランナーズハイではなく、ウォーカーズハイ、とでも呼ぶべきなのだろう。何しろ彼女たちが走ったのは、ここまでの道のりをすべて総合しても、せいぜい二キロ程なのだから……。
「そうだ……ねっ！」
「鈴花っ？」
隣にあった彼女の頭が急に沈み込んで、葵と里奈は驚いて立ち止まった。
「いたたたた……。」
鈴花は、思い切り尻もちをついた状態で転んでいた。どうやら、地面のくぼみに足を取られたらしい。
「あらら、本当に鷹取君が言った通りになっちゃった。大丈夫？」
里奈がそう言って、鈴花に手を貸してくれる。それにつかまって立ち上がって、鈴花は何でもない、と言うように笑った。
「大丈夫だよ。ちょっと捻っただけだから。ほら、早く行かなきゃ時間までに戻れないよ！」
そう言って鈴花は一人先に歩き出してしまう。
「……。」
葵と里奈は顔を見合わせてしばらく悩んでいたが、やがて彼女の後を追って歩き出した。

「それで？その結果がこれか？」
「うううう……。」
今鈴花の目の前には、腕組みをして眉間にしわを寄せている龍也がいた。結局鈴花は、何とか完走するにはしたのだが、挫いた足がひどく腫れ上がってしまい、歩けなくなってしまったのだ。保健室で手当てをしてもらっていた彼女を龍也が迎えに来て、事情を説明し

た後の最初の一言が、先程のものだった。
「ほ、ほらでも、完走したんだからちゃんと褒めてよ！」
「いや、そう言う問題じゃねえし……。」
呆れ顔の彼に、思い切り頬を膨らませて見せる。
「ほら、帰るぞ。先生、帰りのホームルームはサボっていいって言ってたから。」
「どうやって帰るのよー？」
眉を困ったように寄せて唸る彼女の目の前で、龍也が背を向けて膝を折る。
「ほら。」
しばらく、どう反応していいのか困る。それからゆっくりと動いて、龍也の背に体を預けた。
「……重い。」
「死んじゃえー！」
「わかったから暴れるな！」
背中でじたばたと暴れる彼女に一言そう言って、彼は歩き出した。
玄関で彼女を下ろして、一度靴を履く。
「靴、履けるか？」
「うん、右は大丈夫。ただ、左は湿布とか包帯とかしてるから、無理みたい……。」
彼女の言葉通り、その左足首には、包帯が幾重にも巻かれていた。
これでは、靴を履けというのも到底無理な話だ。
「靴、自分で持ってろよ。鞄は俺が持つから……。ほら。」
そう言って、また彼女に優しい背中を向ける。今度は迷うことなく体をそれに預けて、彼女はふふ、と嬉しそうに笑みをこぼした。
「何だよ？なんで笑うんだよ？」
そんな彼女の様子を不審に思った龍也が、ストレートに訳を聞いて来る。チラリと自分を横目に見やりながらのその言葉に、鈴花はますます嬉しくなってしまった。
「前にもこうやって龍也におんぶしてもらって帰ったことがあった

な、って思ったら、なんか嬉しくなっちゃったの。」
ふと一瞬いつのことだったか記憶の引き出しを掘り返してから、彼も懐かしそうに笑った。
「あったな。そう言えば、あの時もマラソン大会じゃなかったか？案の定転んで、小学校は家から近いから、俺が背負って帰ったんだよな……。」
「そうそう！」
彼の言葉に、彼女は懐かしさに目を細めて笑う。しばらくの沈黙があってから、今度は彼女がポツリと呟いた。
「……龍也の背中、大きくなったね。」
昔の記憶にある大きさとは全然違う、彼の背中。何だか言い表せない感情を感じて、鈴花は彼の背中をギュッと抱き締めた。
「あのなぁ……いつまでもガキのサイズじゃいられないだろうよ。どこかの誰かがこうやって転んだ時に困るからな。」
皮肉たっぷりの彼の言葉なのに、なぜか今日は笑みがこぼれる。
「あったかい……。」
その呟きの直後、彼女の体がにわかに重みを増した。それで、あることを悟る。
「寝たのかよ、おい……。」
彼のその言葉通り、耳元で、柔らかい寝息が響く。それにそっと溜息をついて、彼は彼女を起こさないように注意しながら、そっとその体を背負い直した。
「……よく走ったよな。疲れただろ。」
眠ってしまった彼女の耳には自分の言葉は届かないだろうと思いながら、そう優しい言葉をかけてやる。それを聞いていたのかやはり聞こえていなかったのかはわからないが、背中の彼女の唇がふと、柔らかく綻んだ。半開きの口が、彼の背中に当てられる……。
後日、鈴花が汚してしまった龍也の制服を、どちらが洗濯するかで喧嘩になったとか……。

マラソン大会（後書き）

こんにちは、霜月璃音です。
こちらのお話は不定期連載になってしまっていますが、読んで下さる方々がいらっしゃるということにとても励まされております。
今後もゆっくりとお話を展開させていただくつもりですので、よろしければお付き合い下さいませ。
ありがとうございました。

クリスマス

「じゃあ鈴花、明日の一時に行くからね！　忘れないでよ！」
「うん、楽しみに待ってるね！」
笑顔で咲子に手を振ると、校門の前で別れる。駅に行く龍也と鈴花は、咲子とは反対方向に帰るのだ。
「じゃあ龍也、ちょっと付き合ってね」
「面倒くせえな……。ケーキなんて買えばいいだろうが」
ぷうっと頬を膨らませて、彼に思い切り反抗する。
「ダメ！　だって、せっかく咲子ちゃんたちが楽しみにしてくれてるんだもん、頑張らなきゃ！」
「へいへい……」
本当は彼女の手作りケーキが楽しみだなんて、死んでも言わない。鈍い彼女は気付かない程薄く頬を染めて、龍也はふいと目を逸らした。
今日は終業式、明日からの冬休みを前にして、休み中の遊びの計画を友達と練っている生徒が大勢見受けられた。そして明日は、鈴花の家でクリスマスパーティーを行うことになっている。そのためにケーキを作ると言うことで、学校帰りに材料の買い出しに行くことになったのだ。
「ねえ龍也、どんなケーキがいい？」
彼女が自分を見上げた拍子に赤いマフラーがぱらりと解けたので、直してやりながら答える。
「そうだな、普通に苺のやつでいいだろ。あんまりおかしなの作ったら、お前のセンスが疑われることになるんだぞ？」
「失礼ねー！　でも、苺のケーキは賛成！　苺にしようね！」
寒さのせいか明日が楽しみだからか、鈴花はほんのりと赤く頬を染めて笑った。

「お邪魔しまーす！」
そして約束の午後一時、いつものメンバーの他に、鈴花が呼びたがったためぐみが、彼女たちの家にやって来た。
「わあ、どうぞ！」
嬉しそうに笑って皆を通してやってから、玄関を閉める。その間に、龍也が彼らを鈴花の部屋に通していた。
「必要なものは大体買って来たぞ。あ、高梨作のケーキは？」
「あ、今持って来るね！」
立ち上がろうとした鈴花を、龍也が止める。
「いや、待て。お前が行ったら最後の最後に大惨事、なんてことになりかねないから、俺が行って来る」
失礼な！　などという鈴花の言葉は華麗に無視して、彼は皆がいる部屋を後にした。ジュース配るぞー！　という小柴の声も背後から追いかけて来たが、静かに廊下を歩く。
「やれやれ、よくこんなもの作るよな……」
彼女が朝早くから起きて作ったクリスマスケーキを眺めて、彼は柔らかく目を細めて、笑った。昨日二人で選んで来たサンタクロースの飾りが付いた、苺のケーキ。甘いものは好きではないが、せっかく彼女が作ったのだから食べようか、などと考えている。一生懸命作ったんだから、龍也も一口位食べてよね！　と言って彼女が見せた、とびきりの笑顔。それが、彼にそう思わせている原因だった。
「ほら、持って来たぞ」
「おおー！　さすが高梨だな！」
高橋の感嘆の声に、一同が頷いて見せる。鈴花は照れたように笑って、龍也に向き直った。
「龍也、真ん中に置いて」
彼女が指示したように、開いたままになっていたテーブルの中央にそのケーキを置いてやる。少々いびつにも見えるが、市販のものと比べてもさして見劣りしない、いい出来のケーキだった。
「じゃあ、切るか……」

小柴のその声で、全員が一斉に龍也を見る。
「……どうして俺なんだよ？」
「いや、鷹取君、器用そうだし……」
「そうね、龍也君に任せるのが良さそうだわ」
めぐみまでもが、他の面々に同意して見せる。どうやら、逃げ道はないらしい。包丁を手に持ってから、はあ、と一度溜息をつく。
「まあ、鷹取が切ってる間に、俺たちはゲームの用意をしておくから」
小柴と高橋はそう言って、彼らが持って来た荷物の中から、ビンゴゲームのセットを取り出した。一人一枚カードを選ぶように指示を出してから、景品も取り出す。
「ねえ、それは何？」
景品は全てお菓子だったのだが、その中に一つ、中が見えない濃い青の袋があったので、鈴花はそれを指差して訊ねた。
「ああ、これは五十嵐たちが用意してくれた、罰ゲーム用アイテムらしい。俺たちも中身は知らねえけど、最下位が罰ゲームだからな！　覚悟しておけよ！」
「わ、わかったよ……」
罰ゲームまで用意されているなんて、驚きだ。そんなことを話している内に、器用な男は器用にケーキを取り分け終わっていたらしい。出来たぞ、ということで、皆が一斉に彼の方を振り向いた。
「あ、ひでえ！　俺のケーキだけ苺が少ない！」
「……小柴、お前は死にたいのか？　ちゃんと数えろ。と言うか、ガキじゃないんだからそんな細かいこと言うなよ」
「ちっ！」
どうやら数を数えたら他のケーキと同じだったらしく、小柴は大人しく引き下がった。元々苺の数が違うなどということは、どうでもいい。ただなんとなく龍也に文句を言って、彼を困らせたかっただけだった。そして龍也もそれがわかっていたから、本当はケーキの切り分けなどしたくはなかったのだ。

「よーし、それじゃ、メリークリスマス！」
パン！　パンパンッ！　高橋の掛け声に合わせて一斉にクラッカーを鳴らしてから、皆思い思いのものに手をつける。
「……龍也、食べれそう？」
隣から心配そうに見上げて来る彼女に、思い切り笑って見せる。
「心配するな、お前のまずい料理にはもう慣れた」
「死ねー！」
どうやら、ケーキが彼の口に合うかが心配だったらしい。一口食べてみてから、驚いた。そんなに、まずいと思わない。甘いというのはわかるが、そこまで嫌だと思わないのは、彼女が作ったと言う事実のせいだろうか。我ながらゲンキンだな、と少々情けなくなってしまう。
「うーん！　市販のケーキにしなくてよかった！」
どうやら皆満足してくれたらしく、鈴花もホウと息をついてから、自分のケーキに手をつけた。半分ほど食べ終えた所で、小柴が声を上げる。
「よーし、じゃあ、ビンゴやろうぜ！　一列じゃ楽しくないから、二列ビンゴにしようぜ！　二列ビンゴするまでは抜けられないからな！　それで、抜けた奴から景品を選んでいくこと！」
「はーい！」
皆で元気に返事をしてから、カードの真ん中に最初の穴を開ける。鈴花はチラリと、景品を目の隅で確認した。先程から気になっていたものが、一つある。新商品のチョコレートだ。いつか買おうと思っていたのだが、なかなか機会がなかった。龍也も、横目でチラリと彼女の様子を確認する。どうやら、そのチョコレートが欲しいらしい……。
「じゃあ、行くぞー！　最初は……」
小柴が中の見えない箱から球を取り出して、ビンゴゲームが始まった。

「……あ、ビンゴ」
ジュースを飲んでいたコップを置いて、龍也が軽く手を上げた。
えっ？　という声が、皆から出る。
「は？　お前、本当に二列ビンゴしたか？」
「したぞ。ほら」
確認のために小柴にカードを見せてやる。上から二段目と、斜めに一列、きちんとビンゴしていた。
「……くっそー！　お前、できないことってないのかよっ？」
龍也にカードを返してから、悔しそうにそう言って見せる。小柴のその言葉に、全員から笑い声が漏れた。
「あるよ。龍也は甘いものが食べられないの。あと、洗濯物が干せないの」
「おい、あれは干せない訳じゃねえだろ。俺が干したものに、お前が文句をつけるんじゃねえか」
ニコニコと笑顔で彼の弱点を暴いた彼女に、龍也が反発する。しかし、彼女も負けてはいない。
「だって龍也、きちんと端と端を揃えて干さないじゃない。あれじゃあダメだよ」
「……うるせえな。これ、お前にやろうと思ってたけど、俺が食うわ」
「ああーっ！」
彼女が目をつけていたチョコレートを、彼はひょい、と取り上げた。
「ひ、ひどい……」
その一部始終を見ていた皆が、苦笑する。咲子がニヤリと笑って、鈴花に言った。
「鈴花、考えてみなよ。甘いものを食べられない龍也君が、チョコレートなんて食べれると思う？」
「ぐっ……！」
今度は龍也が言葉に詰まった。本当は、皆がいなくなってからこ

っそりと彼女に渡すつもりだったのだ。図星を指された龍也は誰が見てもわかるほどに動揺した。
「でもさー、鷹取君、さっき鈴花が作ったケーキはちゃんと食べたよね？」
葵の一言で、龍也はさらに肩をビクリとさせる。最近、彼のこのグループ内でのポジションというものが確定して来てしまっているような……。言うまでもなく、鈴花絡みでのいじられ役。しかも葵や里奈はまだしも、咲子にはなぜか敵わないのだ。
「ほ、ほら小柴、さっさと続きやれよ！」
少々頬を赤くして、龍也は小柴に慌てたような口調でそう言った。へいへい、とからかうように返事をしてから、小柴が続きを始める。
一人、一人と抜けて行くなかで、鈴花はなかなかビンゴにならなかった。そして、ついに。
「やったー！　ようやくビンゴ！」
一緒に最後まで残っていた里奈が、先に二列ビンゴを果たしてしまったのだ。
「よーし、オッケー！」
小柴が確認をしてから、里奈が最後に残っていた外国製のマシュマロの袋を持って自分が座っていた場所に戻る。
「という訳で、罰ゲームは鈴花に決定！　喜べ男子共ー！」
咲子のその言葉になんとなく嫌な予感がする鈴花だが、最後まで残ってしまった自分には、逆らうこともできない。
「……すげーな、惨敗じゃねえか。一列もビンゴしてねえ……」
「龍也、うるさいよ！」
彼女のカードを持ち上げてそう漏らした龍也に、真っ赤な顔でそう怒鳴る。
「はい、鈴花。あっちで着替えて来てね」
ニヤニヤとする咲子、葵、里奈に見送られれて、鈴花は龍也の部屋に入って行った。しばらくしてから、奇声を発する。
「うええっ？　これ、着るの？」

「そうだよ鈴花、頑張れ！」
一番良い人にあたったね、などと言いながら三人でおかしそうに笑う彼女たちを、龍也とめぐみが訝しげな視線で見つめる。
「一体何を買って来たんだよ、お前ら……」
「まあ、見ればわかるよ、見れば」
同じく訝しげな視線を彼女たちに向けていためぐみと軽く目を合わせてから、鈴花を待つ。
「ね、ねえ咲子ちゃん、やっぱりこれ、恥ずかしいよ……」
「大丈夫大丈夫。ちょっと失血死する人たちが出るだけだから。ちゃんと出て来る時に、メリークリスマス、って言うんだよ」
「う、うん……」
そうしおらしく返事をしてから、龍也の部屋の戸が開けられる。真っ赤な衣装に、真っ赤な帽子。なんとあの袋の中に詰まっていたのは、女性用のサンタクロースの衣装だったのだ。襟やスカートの裾、ブーツに見立てた真っ赤なハイソックスにも、白いファーがあしらわれている。……過剰反応をした人間が、約二名。
「メ、メリー……クリスマス……」
「へえー、かわいいよ、鈴花！　やっぱり、こういうのは鈴花みたいな子に着せなきゃね！」
「いいんじゃない？」
「め、めぐみちゃんまでー……」
褒められるのがくすぐったいらしく、鈴花はそそくさと先程まで自分が座っていた場所、過剰反応組の間に戻った。
「おい、ちょっと待てよ……。これ、高梨が負けたからいいようなものの、俺や小柴や鷹取が負けたらどうするつもりだったんだよ……？」
「え、着せるよ？　罰ゲームだもん、当たり前でしょ？」
咲子の黒い笑顔に、高橋は硬直してしまった。まさか、本気でそんなつもりだったのだろうか……？その時を想像して、背筋が寒くなる。本当に、自分たちが負けたのではなくてよかった。一方の鈴

花は居心地が悪いのか、そのまま慣れない正座などして見せる。
「鈴花、足、大丈夫？」
心配してくれる里奈に、鈴花は首を振って見せた。彼女の隣にいる龍也と小柴も、ようやく体勢を立て直す。咲子が言っていた失血死、という言葉の真意は、あまりのかわいらしさに彼らが鼻血を出してしまうのではないか、というものだった。
「だって……スカート、短い……」
「横に崩せば大丈夫だよ」
葵の言葉に頷いて、鈴花は小柴の方に少し、足を崩した。
「っ……！」
その瞬間に、小柴が耳まで真っ赤になる。それを見た龍也が不機嫌そうに眉を顰めて、ひょいと鈴花の体を持ち上げた。
「な？」
そしてそのまま自分の膝の上に下ろして、ぎゅうっと抱き締める。
「にゃああっ？」
誰から見てもわかる程に動揺して、鈴花はサンタクロースの衣装に負けない程真っ赤になった。その後じたばたとして、龍也の腕から逃れようとする。
「りゅ、龍也、下ろしてよ！」
辛うじて出たその一言だったが、龍也にダメ出しをされてしまう。
「小柴がやらしい目で見てるから、ダメだ」
「はあっ？　お前の方がよっぽどやらしいだろうが！」
確かに、傍から見れば龍也の方がどう見ても……。咲子は一人でそんなことを考えていたが、確信があった。他の面々が、自分と同じ生温かい目を三人に向けているということに……。
龍也が鈴花を抱き締めている様子は、ちょうど小さな子供が、お気に入りの人形をギュッと抱きしめているようだった。形だけを形容すればその通りなのだが、鈴花がサンタクロースの格好をしているせいで、それにあれやこれやと余計な想像が加わって……。結局、龍也は怪しい人間にしか見えないのだ。もし、ここまでの成り行き

を一切知らなかったとすれば。
「だ、大体、お前だって一緒になって動揺してただろ！　俺だけ変人扱いするんじゃねえよ！」
「うるせえな！　お前と一緒にするな！」
まだ喧嘩をしている二人に、誰からともなく笑い声が漏れる。
鈴花にとっては、今までの人生で一番、楽しいクリスマスとなった。来年もまた、一番楽しいクリスマスを迎えられますように……。彼女はその夜、そんなことを願いながら眠りについた。そして、その夜。
新製品のチョコレートと一緒に、ふわふわと柔らかい毛並みの良い猫のぬいぐるみが一つ、彼女の枕元に置かれていた。それと一緒に、サンタクロースからの口付が、一つ。
「……何楽しいこと考えてるんだか」
微笑を浮かべる彼女の寝顔を眺めてから、サンタクロースはまだ明かりのついている自室に戻って行った。

クリスマス（後書き）

今からクリスマスネタ……相当早取りになってしまいました……。

プレゼント

「う、わああああ……」
鈴花は目を覚まして早々、枕元に置かれていたぬいぐるみを見てそう歓声を上げた。ふわふわと柔らかい灰色の虎縞の猫に、彼女は一目惚れしてしまったのだ。それを抱いたまま、彼の部屋に飛び込む。
「龍也、これ、くれるのっ？」
「……朝からうるせえ……」
彼女がベッドに飛び乗って来たので、彼は仕方なく起き上がった。まだ眠そうな、不機嫌な顔をしている。それもそのはずだ、彼が眠ったのは日付が変わってから、三時間ほど経った頃だったのだから……。ちなみに現在は、午前七時。もう少しゆっくりと寝ようと思っていたのだが、ぬいぐるみを抱いた鈴花に起こされてしまったのだ。
「ねえ、これ、くれるの？」
「違うならわざわざお前の枕元に置いたりしねえよ……」
「ありがとう！」
ガンッ！　彼女に抱きつかれた勢いで、ベッドの隣にある壁にしたたか頭をぶつけてしまう。チカチカと目の前を飛び交う星をぼうっと眺めてから、彼はようやく現状というものに気が付いた。
「おい、くっつくな！　大体、何て格好してるんだよっ？」
「ほえ？　パジャマだよ？」
それがいけないと言っているのに、彼女はまったく意に介していないようだった。仕方ないかと溜息をつきながら、まだ寝癖も直していない頭を撫でてやる。
「……着替えて来い」
「りょうかーい！」
にこにこと笑って機嫌よさそうに出て行く彼女を見送ってから、

自分も着替えようとスウェットに手を掛ける。顔が熱いのは、自分でも嫌と言う程わかっていた。まさか朝から彼女にあんな風に抱きつかれるとは思ってもいなかったのだから、それも当たり前だと言えるが。
「ねえ、龍也」
「何だよ？」
壁越しに言葉を交わすという日常の朝の風景に戻ったことに安堵しながら、彼は彼女の言葉に答えていた。
「私もね、龍也にプレゼント用意したんだよ！」
「は？」
あまりにも意外な事過ぎて、一瞬彼は固まってしまった。着替え終わってしばらく待っていると、彼女が先程と同じようにニコニコ顔で部屋に入って来る。
「はい、これ」
青い紙袋に詰められたそれは、さらに濃い青のリボンが付けられていた。しかし、どことなくそのリボンの形がいびつなのは、気のせいだろうか……？
「ほら、開けてみてよ！」
「あ、ああ……」
彼女に促されるままに、開け口を探して、セロテープをはがす。
「……」
中から出て来たものに、彼は硬直してしまった。中身は、紺色のマフラー。しかも、一目一目彼女が丁寧に編んだ、手作りのものだ。
「どう？　なかなかいい出来だと思うんだけど？」
「あ、ああ……」
あまりにも予想外であまりにも嬉しくて、彼はそれ以上の言葉を紡ぐことができなくなっていた。深呼吸をして、自分の心を落ちつけようとする。いつものように何か彼女が怒るようなことを言わないと、様子がおかしいのがばれてしまう……。彼は必死で考えを巡らせた後、ようやく口を開いた。

「……下手くそだな」
「放っておいてよ、馬鹿！」
いつも通りの反応を引き出せたことに安心しながら、彼はそのマフラーを大切そうにギュッと握った。
しばらくむくれて見せてから、鈴花が機嫌を直して口を開く。
「ねえ龍也、私、今日は本屋さんに行きたいの」
「はいはい、了解……」
すっかり冷え込んでいることを口実に彼が早速手編みのマフラーを使ったのは、言うまでもない……。

新年

「明けましておめでとうございます。今年もよろしくお願いします」
そう挨拶をして、軽くお互いに頭を下げる。鈴花と龍也はたった今、年越し蕎麦を食べながらカウントダウンを行ったばかりだった。彼女の父は残念ながら仕事の方で問題が発生して会社の方にいるため、彼女たちは結局二人で年越しをすることになってしまったのだ。
カウントダウンが済むのとほぼ同時に、二人の携帯が賑やかになる。いつものメンバーからの新年の挨拶メールが次々に届いているのだ。
「今年はもっと楽しい一年になるといいね！」
彼女には、去年はとても楽しい年だったらしい。満面の笑みを自分に向ける彼女に、彼は黙って笑い返した。
「今年の目標は……」
「その前に、去年の目標は達成できたのか？　ん？　どうだったかな？」
達成できていなかったことを知っているくせに意地悪にそう問いかける彼に、鈴花は思い切り舌を出して見せた。
「今年も同じ目標！　今年こそは絶対に叶えてやるんだから！」
彼女の去年の目標……。それは、かっこいい彼氏を作る、というものだった。そして結果は先程の龍也の言動からもわかるように、惨敗。だからこそ、心機一転今年こそは、と思っているのだ。そっと、彼の様子を盗み見る。
先程から付けたままのテレビを、彼はさして興味もないと言った様子でぼうっと眺めていた。それから、彼女の視線に気付く。
「何だよ？　……俺の顔、蕎麦でもついてるのか？」
彼のその問いかけに、彼女は慌てて首をブンブンと振って見せた。自分が彼を見つめていたことに気付かれたことが、ひどく恥かしかった。

「じゃあ何だよ？」
「ななな、何でもないよ！」
居心地が悪くなってしまった彼女は、そう答えてテレビの画面を見つめた。もし彼に、どうせなら龍也がいい、なんて言ったら、どうなるのだろうか？　そんなことを、しばし考える。
「……きっと、ものすごく馬鹿にされるんだろうな……」
隣の彼女のそんな呟きに、彼は訝しげな視線を向けた。
「おいおい、独り言っていうのは、人に聞こえないように言うもんだぜ」
「にゃあっ？　今の、聞こえてたっ？」
どこから聞かれてしまっていたのだろうか、とひどく動揺する。もしや、最初の部分から……？　もしそうだとしたら、一体彼はどう答えるのだろうか……？　続きがひどく恐ろしくて、彼女はギュッと唇を噛み締めた。
「で？　誰に馬鹿にされる話だ？」
その返答を受けて、ほっとする。どうやら、肝心な部分は口から洩れてはいなかったようだ。それから、どうにか言い訳をしようと思案する。しかし上手い言葉が見当たらないので、彼女は逃走する、という選択肢を選び取った。
「喉渇いたから、ジュース取って来る。龍也もいる？」
「……ああ」
誤魔化されたのは彼もわかっているだろうが、新年早々彼女に意地悪をするつもりもないらしい。どうやらそのまま見逃してくれるようなので、ジュースを取りに行こうと立ち上がった、その時。
「きゃっ？」
ぐらり、と視界が揺れた。どうやら、いつものドジで足を捻ってしまったらしい。バランスを失った彼女の体は、体勢を立て直そうとする意志に反して傾いて行く。
「おいおい……新年早々何やってるんだよ……」
「た、助かったぁ……」

彼女の体が傾くのがわかって、彼はいち早く彼女の体を支えるために腕を伸ばしていた。そして彼女の体は、その腕にしっかりと受け止められていた。そのおかげで、床に体を打ちつけずに済んだのだ。

「ありがとう、龍也」

そう言って身を起こそうとする彼女の体が、自分を抱き止めてくれた腕によって拘束されてしまう。突然の出来事に、鈴花は言葉を紡ぐこともできずに真っ赤になった。しばらくしてから、ようやく脳が再び機能し始める。

「にゃああっ？　な、何っ？　龍也？」

ひどく動揺しながら、辛うじて彼に声をかける。その言葉で、彼の腕が俄かに力を増した。

「いや、何となく……」

本当はさっきからずっとこうしたかった、何て言ったら、それこそ彼女に馬鹿にされてしまうのだろう。そう思って彼が溜息をつきかけた、その時。

「なっ、何だよっ？」

自分の腕に応える感覚が、腕の中から返って来たのだ。それに動揺して、彼の方も真っ赤になってしまう。

「いや、何となく……」

対する彼女からは、自分が先程掛けた言葉とまったく同じ返答が返って来た。そのまま、お互いの視線がかち合う。

「……」

どちらから動くという訳でもなく、ごくごく自然に、二人の唇が重なった。その後お互いに、現状と言うものをやっと認識して、パッと距離を取る。

今年は、この距離を少しでも縮められますように……。二人ともそんな願いを持ちながら、少し居心地の悪くなってしまった部屋で、一緒に元旦を過ごした。

バレンタインデー1

「……どうしようかな……」

鈴花は、そう誰にも聞こえないほど静かに呟いてから、溜息をついて窓の外を見やった。先生の退屈な授業が続いていて、彼女はふと別なことを考えてしまったのだ。

世間がチョコレート商戦で賑わう今日この頃。明後日は、バレンタインデーなのだ。それも、土曜日というおまけつきだ。廊下でカップルたちがどこへ行こうか、なんて話し合いをしているのもちらほらと見受けられた。

（龍也、チョコレートたくさんもらうんだろうな……）

そんなことを一人で考えて多少落ち込みながら、目の前の背中に向かってまた小さく溜息をついた。

そして次の日、彼女の不安は見事に的中して、龍也は両手、両足の指の数でも数が足りない程、二十個以上のチョコレートをもらっていた。しかも、その内三人からは本気の告白をされた……らしい。その話は龍也本人から聞いた訳ではなく、後から小柴と高橋の二人がこっそりと教えてくれたのだ。

「めぐみちゃんは、龍也にチョコあげないの？」

鈴花の問いかけにめぐみは余裕の笑み、いや、大胆不敵な、と言った方がいいだろう。とにかく、そんな笑みを浮かべた。

「甘い物が嫌いな人にチョコをあげるなんて、わざわざ自滅するようなものじゃない。それに……」

そこでめぐみが言葉を切ったので、鈴花は続きを促すように眉を軽く上げて見せた。

「それに、分の悪い勝負はしないことにしてるの」

それだけ言うと、彼女は鈴花の額を軽く弾いて行ってしまった。その後鈴花は、咲子のところに神妙な面持ちで向かう。

「ねえ咲子ちゃん、どうすればいいと思う……？」
「何を？」
どうやら友チョコでもらったらしい、かわいらしいカップチョコレートを頬張りながら、彼女は鈴花を見上げた。
「龍也、あんなにたくさんチョコもらってるし……。いつもはね、あげてなかったの。龍也、甘いの嫌いだから……。でも、今年はちょっと違うから、甘いの嫌いだってわかってても渡した方がいいかな、チョコ……」
そう、今年のバレンタインは特別だ。彼のことが好きだと気付いてから、初めて迎えるバレンタインなのだから……。しばらく考えるような素振りを見せてから、咲子はニッコリと笑った。
「鈴花ー、どうせなら、チョコよりもっといい物あげれば？」
「……例えば？」
バレンタイン＝チョコレートという方程式が勝手に頭の中で出来上がっている彼女には、咲子のその言葉は驚きのものだった。もちろん、自分ではもっといい物など思いつく訳もない……。
「そうねぇ、例えば……」
そこまで言ってから、咲子がいつも人をからかう時に浮かべる意地悪い笑みを見せた。
「私をあげるわ！　とか？」
「……きっと即返品だね……。クーリングオフ、とか、言われるんじゃないかな……？」
きっと自分が言った言葉の真意を彼女は理解していないんだなー、などと考えながら、咲子は彼女をからかい続ける、という選択をした。
「鼻血を出して卒倒する、の方が有力だと思うな。試しに言ってみなよ！」
「どうして鼻血が出るのよー？　……でも、今の言葉で言わない方がいいことだ、って言うのはよくわかったよ……」
それからまた重苦しい溜息をつく彼女に、咲子はついに本物のア

ドバイスをしてやった。
「じゃあ、デートに誘うっていうのは？」
「デデデ、デートっ？」
彼女のその言葉に、鈴花は目を白黒させた。付き合ってもいないのに、デート……？
「そう、デート。いつもみたいに、本屋に行きたい、とか、ケーキが食べたい！　じゃダメだよ。ちゃんと、明日は私とデートして下さい！　って言わなきゃね。オーケー？」
「そ、そんなこと恥ずかしくて言えないよー！」
真っ赤になって頭を抱え込む彼女に、咲子はニコリと笑ってやった。それから。
「鷹取くーん！」
廊下でまたもやチョコを渡されていた龍也を、大声で呼んだのだ。鈴花はそれに過剰反応してビクリと跳ね上がり、龍也が歩いて来るとパッと咲子の後ろに身を隠した。
「鈴花がねー、焼き餅焼いてるよ」
「は……？」
一瞬じとーっと白い目を彼女に向けてから、龍也はひょいと真っ赤な顔の鈴花を覗き込んだ。
「おい、俺ばっかりチョコレートもらっても、仕方ないだろ。女子同士の方が少ないだろうし……。どうせ俺は食えないんだし、帰ったらお前にやるから、焼き餅焼くなよ」
「そういう焼き餅じゃないんだけどなー……」
龍也も実は鈴花のことを言えないほど鈍いのかもしれない、などと考えながら、溜息をついた。それから自分の背中から鈴花を引き剥がして、龍也の前に立たせる。
「ほら、言うことがあるんじゃなかったの？」
「にゃうあ……」
どうしようか、と鈴花はかなり迷っていた。先程の言葉をそのまま言うのも恥ずかしいし、かと言って咲子の前でいつもの本屋、な

どという誘い方をしたら、後から散々いびられるに決まっている。
何も言えずに口をパクパクさせている彼女を、龍也も咲子も半分呆れ顔で見つめていた。
「……あ、で……」
「ああ？」
さすがに今の言葉では龍也にも通じないようだ。咲子が、鈴花のお尻を軽く叩いた。
「ほら、早く予約しておかないと、龍也君、明日誰かと遊びに行っちゃうかもよ！」
「明日……？」
どうやら明日、彼に何か用事を頼みたいらしい。咲子の言葉からそこまでの事実は汲みとった、が……。
「あ、うん……。龍也、明日は空いてる？」
ようやく勇気がわいてきたらしい。ほんのりと上気した頬で彼を見上げながら、鈴花はほんの少し首を傾げてそう訊ねた。
「ああ、一日中寝てる予定だったし……。何だよ？　また本屋か？　それともケーキ屋か？」
「ち、違うの！」
どうやら、彼女が彼を誘う時はいつもそんな用事ばかりらしい……。咲子はあまりにも色気のない誘い方に、半分呆れて、残りの半分はとても鈴花らしいと思っていた。
「あ、えっと、その……暇なら、えっと……デ、デ、デ……」
「ほら、後一息！」
なかなか一番肝心な部分が言えないでいる彼女を、咲子が後押しする。そして。
「……デ、デートに行きたいな！」
勇気を出して言い切ってから、真っ赤になって頭を押さえ、しゃがみ込む。よく言えました、と言ってニヤニヤと笑う咲子の姿が視界に入った。
しばらく、龍也は何の反応も示さなかった。いや、示せなかった

のだ。彼女が言った突拍子もない言葉を整理するのに、かなり時間がかかってしまった……。それから、半分泣きそうになっている彼女の頭にポン、と手を乗せる。

「……了解。寝坊するなよ」

それだけ言って、彼は自分の席に戻ってしまった。そしてその後、机に突っ伏して寝ているように見せかける。それは、真っ赤な頬とうるさい心臓を、元通りにするまで隠しておこうとしたが故の行動だった。

バレンタインデー2

「……おい、俺が寝坊するなって言ったの、忘れた訳じゃないよな……？」

「ほえ……？」

やや険を含んだ声音に鈴花がふと目を開けると、その視線の先には彼女のベットに腰掛けて不機嫌そうに腕組みをし、彼女を見下ろしている彼の姿があった。

「寝坊……？」

「ああ、寝坊だな。休みだからって寝過ぎじゃないか？」

寝返りを打って、仰向けの状態から横向きになって彼の方を向く。しばらくボーっとした頭を働かせようと試みていると、だんだんと状況と言うものが飲み込めてきた。

「……今、何時？」

「……後五分で十時だな」

「……ひえぇーっ！」

そこでようやく本格的に目を覚まして、起き上がる。龍也が呆れたように溜息をついてから、自分の眉間に人差し指を当てた。

「……情けないな……。自分から、デートに行きたいです、なんて言っておいて寝坊するとは……。それで？　どこに行きたいんだよ？」

彼のその言葉にふと考え込んでから、彼女は顔を上げてニコリと笑った。

「決めてない。龍也が決めて！」

「は？　自分から誘っておいてそれかよ？　じゃあ、面倒だからコンビニで終わりだな。よし、デートしにコンビニまで行くか。いいだろ？」

「ダメー！」

朝からの最上級のわがままに、龍也も最上級の嫌味で応じた。そ

れに思い切り逆らって見せながらベッドを出る。
「顔洗って来るから、考えておいてね」
そう言うと彼女は、とびっきりの笑顔だけを残して部屋を出て行ってしまった。一人残された部屋で再び溜息をついてから、立ち上がって自分の部屋に入る。どうせ戻って来てすぐに着替えるつもりなのだろうから、自分が彼女の部屋の中にいてはロスタイムが生じてしまうのだ。
「龍也が決めて、って言われてもな……」
彼女の方から誘ってくれたのだから、何か決めてあるんだろうと思っていた彼だったが、とんだ誤算だったようだ。彼女の性格を考えればわかりきったことだったのだが、デートに行きたい、なんてとんでもない言葉に浮足立ってしまい、ついついそんなことを見落としてしまっていたのだ。
そこで彼がふと思い出したのは、彼女が見たがっていた映画のことだった。確か先月末に封切りになったばかりだが、そんなに人気があると言う話は聞いていない。映画館は混んでいるかもしれないが、席が取れないと言うことはないだろう。
「まあ、いいか」
彼女が戻って来たらそう提案してやろう、と思って、彼は自分のベッドに寝転んだ。

バレンタインデー3

「ふええ……」

結局二人は龍也の提案通りに、高校に入ってすぐに宿泊研修の道具を買いに来たデパートの上にある映画館に来ていた。

そして、映画を観終わった後の鈴花は……とんでもない号泣ぶりを披露していた。数々の苦難を乗り越えて結ばれた二人だったが、最後には、結婚式に向かう途中で男性が交通事故に巻き込まれ、亡くなってしまうと言う悲恋の物語だった。

龍也は正直に言って、この映画を選んだのは失敗だったと思っていた。鈴花が見たがる映画のことだ、とびきり甘いエンディングが待っているだろうと高をくくっていたのに……。せめてあらすじ位確認しておけばよかったかな、と今更後悔してもいる。

「おい、大丈夫か？」

周囲からの視線も痛いし、だんだんと人も減り始めている。次の映画もあるだろうから、あまり長く居続けることはできないだろう。龍也はそう思って、鈴花に問いかけた。

「だ、だいじょーびぃー……」

「……全然ダメだな、その返事じゃ……」

龍也はそう苦笑交じりに言って、鈴花が泣きやむまでその頭を撫でてやった。

「わあーい！　いっただっきまーす！」

僅か二十分。その間に鈴花は完全復活して、今は以前訪れたカフェで苺のミルフィーユを頬張っていた。変わり身の早い奴だな、と思わず龍也も呆れてしまう。

「で、この後は？」

アメリカンホットコーヒー、それもブラックのものを口に軽く含んでから、龍也は目の前で幸せそうに笑う鈴花に次の予定を訊ねた。

どうせまた、龍也が決めて、なんて言われてしまうんだろうな、と思いながら……。
「うーん……あ、そうだ！　また観覧車に乗ろうよ！　ね、いいでしょ？」
「……何とかと煙は高い所に登る。本当にその通りだな……」
嬉しそうに笑う鈴花から軽く目を逸らして、龍也はそう呟いた。目の前の彼女の笑顔が眩し過ぎた、ということは、決して口にはできない……。
龍也のその言葉で彼女は頬を軽く膨らませると、黙ってケーキの続きを食べ始めた。
「……」
龍也は黙って、そんな彼女の様子を見つめていた。二人で向かい合わせに座って、彼女の様子を眺める。そんな他愛もない日常に、龍也は幸福を感じていた。彼女の仕草一つ一つを眺めているだけで、ひどく穏やかな気分になれる……。
「……何？」
鈍い彼女もさすがに龍也の視線に気付いたようだ。軽く不機嫌そうな声音で、その視線に込められた意図を問って来る。
「いや、クリーム……」
「えっ？　嘘っ？　どこどこ？」
彼に言われたように口の端にクリームが付いているのだろうと考えた彼女は真っ赤になって、慌てて口周りをごしごしと擦った。それを見ていると、思わず笑い声が漏れてしまった。
「いや、嘘だし……」
「もーっ！」
怒った彼女は真っ赤な顔で頬を膨らませて見せるが、その様子も何ともかわいらしい。
「騙されるなよ」
そう言って最後に龍也は、普段はあまり見せてくれないとびきりの笑顔を見せてくれたので、もしかしたらデートは成功したのかな、

などと一人で考える鈴花だった……。

ホワイトデー

「で、鈴花？　バレンタインデート作戦は成功だったんでしょ？」
「……よくわからないけど、多分！　ホワイトデーにどこか連れてってくれるって！」
　咲子の問いかけにそう答えて満面の笑みを浮かべる鈴花だったが、この時はまだ予想だにしていなかった。まさか、こんなに楽しみにしていたホワイトデーデートに行けなくなるだなんてこと……。

　鈴花が楽しみにしていたホワイトデー当日の朝……。
「三十八度四分、か……。インフルエンザじゃねえだろうな？」
「……わかんない」
　ふう、と辛そうに一息大きく漏らしてから、寝返りを打って自分のベットに腰をかけている彼の方を向く。
「病院、行くか？」
「注射やだ……」
「お前、いくつだよ……？」
　呆れ顔で溜息をついてから、彼は仕方ないな、と言うように眉根を寄せて笑った。
「ま、今日は大人しく寝てろよ。風邪薬どこかにあったよな？」
　彼はそれだけ言うと立ち上がり、部屋を出て行こうとした。
「りゅ、龍也、大丈夫だよ！　私、平気！　だって、今日……」
　そこまで言うと今度は、少々失望が混じった彼の溜息が聞こえた。それからもう一度大きく溜息をついて、こちらを振り返る。
「あのなぁ……。そんなに熱があったら、体ふわふわしてまともに歩けないだろ？　連れて歩いてもっと具合悪くなる、ってこともあるだろうし……。今日はダメだ。今薬持って来るから、飲めよ」
　最後の方は少々乱暴に言い放つと、龍也は部屋を後にした。一人取り残された部屋で、悔しさばかりが募る……。どうしてこんな肝

心な日に、熱なんか出るのだろうか？　……それに。それに彼は、今日のデートを楽しみにしてくれてはいなかったのだろうか。あんなにあっさりと今日は寝てろ、なんて言われたら、自分ばかりが楽しみにしていたようで、なんだかとても寂しいし、悔しい。

それから少し経って、部屋の戸が開けられる、カチャリという音がした。ノックもしないで開けるのだから、龍也が開けたに決まっている。鈴花はドアに背中を向けるように寝返りを打つと、布団を頭から被った。

「ほら、薬持って来たぞ。寝たふりしてもダメだ。苦くたって、飲まなきゃ治るものも治らねえだろ？」

そう言ってベッドの隣にある机の上に水が入ったコップと薬を置いてから、彼女の布団をはがしにかかる。しかし、彼女はそれに逆らってますます布団にくるまった。

「おいおい、お前、本気でいくつだよ……？」

「いいの。ちゃんと飲むから、あっち行って……」

彼女の声が、僅かに震えている……。

「おい、寒いのか？」

「大丈夫だってば！　早く行って！」

その一言で彼の不信感は確信に変わり、彼は無理矢理彼女の布団を引き剥がした。

「なっ……！」

……やっぱり。彼女の真っ赤な目は潤んで、頬に滴が伝った跡が残っている……。そこで彼は大きく溜息をこぼして、彼女の髪を撫でた。

「おいおい、泣くことねえだろ。……と言うか、なんで泣くんだよ？」

彼女は今度は布団を襟元までしっかりと着込んで、彼の問いに答えた。

「だって……私ばっかり残念に思ってるのかな、って思ったから……。龍也、ちっとも残念そうにしてくれないんだもん……」

彼女のその一言を聞いて、龍也は今度はがっくりと肩を落とし、深く溜息をついた。
「あのなぁ……。残念だと思ってるに決まってるだろ。ただ、俺がそれを言ったら、お前は絶対無駄なことで責任感じるだろ？　風邪ひいたのなんて予想外の事態なんだから仕方ない、って何回言っても」
「……うん、そうかも……」
彼の言葉に、もしそうだったらどうしていただろうか、なんてことを考えてから、絶対に彼が言った通りになる、と思って頷いた。それに、残念だと思ってるに決まってる、という彼の言葉が、不謹慎にもとても嬉しかった。彼も今日の予定を楽しみにしてくれていたんだ、ということが、ひしひしと伝わって来る一言だったから……。
「だろ？　そう考えたら、何でもないふりするしかねえだろ。ほら、薬」
そう言いながら龍也は、鈴花を助け起こしてその手にコップを持たせた。それから、風邪薬も手渡す。
「……まずい」
「当たり前だ。薬がうまかったら、皆風邪ひきたがるだろ」
彼らしい言い草にふっと頬を緩めてから、布団の中に戻る。彼女がまた襟元まで布団をかきあげるのを確認してから、龍也はおもむろに口を開いた。
「で？　来週の日曜は暇か？」
「……ほえ？」
熱で浮かされた彼女の、何とも呆けた返事が返って来る……。それに苦笑して、龍也は続けた。
「今日の埋め合わせ、してもらわなきゃならねえだろ？」
一瞬彼の言葉の意味を理解し損ねて固まってしまったが、彼女はその後、彼の言葉に満面の笑みを返した。
「うん！」

「その返事なら、すぐに元気になりそうだな」
そう笑って頭を撫でてくれたあと、彼が屈みこんで、額と額が軽くぶつかる。
「……まだ熱あるな。ま、そんな簡単には下がらないか」
……そして。
バッ！　その後の彼の行動を予測した鈴花の行動は、普段の彼女からは考えられないほど素早かった。切れ長で涼やかな瞳が、一瞬にして怒気を帯びる。
「……おい」
自分の口をふさいでいる彼女の手をよけて、彼は笑顔でそう言った。……否。正確にはこの表情は笑顔とは呼べないだろう。何しろ、目がまったく笑っていないのだから……。
「だ、だって、風邪うつっちゃうもん！」
「ほぉ？　じゃあ、風邪がうつらなきゃいいんだな？」
「そそそっ、そういう問題じゃっ……！」
結局、油断した彼女の負け。自分の手で咄嗟に築き上げた防護壁の効果も虚しく、唇に、彼の唇が優しく触れるのを感じた。それから、熱と怒りと恥ずかしさで真っ赤になる。
「……もう知らない！」
彼女はそう言うと、くるりと寝返りを打って彼に背を向けた。その髪をもう一度、少々乱暴に撫でてから、彼は薬と空になったコップを持って部屋を出て行った。心臓の鼓動が速いのは、具合が悪いせい？　それとも……。唇にそっと、自分の指をあてる。
「……龍也の、馬鹿っ！」
彼女は最後にそれだけ言うと、頭から布団を被って寝てしまった。その後は、静寂……。
結局次の日曜のデートは、龍也が風邪をひいてしまったために中止になってしまった……。

新年度

「りゅ、龍也、遅刻するよ！　早く！」
「……あ？」
慌てたように自分を揺り起こす彼女にひどく呆けた返事を返してから、時計を見る。彼のデジタル時計は、時刻だけではなく日付も表示してくれる。今日は、四月七日。朝、七時四十分……。
「やべぇ！　おい、お前もさっさと準備しろよ！」
「う、うん！」
始業式早々に遅刻なんて御免だ、などと口の中で呟きながら、鈴花が自分の部屋から出て行くのを確認してすぐにスウェットに手をかける。埃がかからないようにと制服にかけておいたカバーが、今はひどくわずらわしく感じられる……。
制服のネクタイを締めている所に、パタパタとせわしない足音が戻って来た。そして、彼女の部屋のドアがバンッと勢い良く開く。
「もぉー！　龍也が起こしてくれると思ってたのに！」
そんなことを聞こえるように大声で言いながら、彼女は部屋に入って来た勢いを殺さず、そのままクローゼットの扉も開いた。
「おいおい、人をあてにするなよ……。仕方ないから、朝飯は途中で買うか」
「うん！」
ブレザーのジャケットにも手を伸ばしたが、顔を洗った後で着た方がいいだろうと判断して、その手を引っ込めて部屋を出る。ガチャリ、と戸を開けた彼が何となく彼女の方を向くのと、彼の部屋の戸が開く音がしたので彼女が振り返ったのは、同時だった。そしてお互いに固まったまま、数瞬の沈黙……。
「みっ、見るな、変態ー！」
その言葉と、腕がクッションに伸びるという彼女の行動で我に返り、彼は慌てて廊下に飛び出して戸を閉めた。そんな彼を追いかけ

るかのように、ドアに何かが叩きつけられる音がする。こういう時に限ってコントロールがいいのは、なぜだろうか……。
「しかし……朝からとんでもないもの見ちまったな……」
ホウ、と溜息をついて、部屋を出る時に彼女に一言もかけなかったことをひどく反省する。いくら慌てていたとはいえ、顔を洗ってから制服に着替える、という彼女の普段の行動を考えれば、ああいう事態が発生するということも十分予測がついたはずだ。それなのに……。
独りでに赤くなってしまう頬にそっと触れ、前髪を邪魔そうに一度払うと、彼は洗面所に向かって歩き出した。

朝の事件のせいでお互いに何となく気まずい雰囲気のまま、二人は何とか電車に飛び乗り、遅刻は免れた。そして学校が見えて来ると、生徒玄関に人だかりができているのを見て、鈴花が首を傾げた。
「ああ、そういえば、クラス替えの発表があったよな……」
「えええっ？　クラス替え？」
そこではたと目があってから、お互いにまた気まずくなって視線を逸らす。今までは、朝のような事件は一度もなかったのだ。何しろ、龍也が登校日に寝坊することなど、一度もなかったのだから……。
「ねえ龍也、どうして今日は寝坊したの？」
目を合わさずに、少々俯き加減に問いかける。答える彼は、何となく歯切れが悪そうだった。
「いや、まあ……。色々だ。ほら、新学期の準備とか……」
（さすがにちょっと遅くまで頑張りすぎたよな……。次の日学校あること考えて、もう少し早く切り上げるべきだったかもしれねえ……）
彼が昨夜自分の部屋の電気を消したのは、夜中の三時。それまでずっと、新学期テストのために英語の勉強をしていたのだ。途中で何度も睡魔に襲われたが、その度に自分を誤魔化して、やっと目標

を達成したのがその時間だったのだ。
（まあ、関係代名詞も大分わかるようになったし……）
結果的には遅刻をすることもなかったのだからまあいいか、などと彼は一人で考えていた。隣からは、鈴花が相変わらず不審そうな眼を自分に向けている。しかし、目を合わせればまた気まずくなってしまうのだから、彼は敢えて彼女の方を向かなかった。まあ今朝の事件も、多少時間がたてばすぐに元通りの関係に戻れるだろう。そんなことを思って……。
「えっと……A組……じゃない……Bにもない……。あった、C組だ！」
そして。一番気になるのは、自分の一つ前の名前……。一瞬の間に決意をしてから、そこに目を向ける。
「あ、龍也も、C組……」
「みたいだな。あ、高橋とは離れちまった。あいつだけB組だな。まあ、残りはみんなC組だから、いいんじゃないか？」
「高橋君、可哀想だね……」
そういってしゅんと落ち込むような素振りを見せる鈴花の頭に、ポンと手を乗せて軽く撫でてやる。
「大丈夫だ。あいつお調子者だから、すぐに友達作るって。それに、休み時間もこっちに遊びに来れるしな。……というか、絶対来るだろうな」
林原目当てに、という言葉は、鈴花には聞かせなかった。何だか彼女が余計なお節介を焼いてしまいそうで、怖かったので……。
「すーずか！　また同じクラスだね！　よろしく！」
教室に入ると、咲子がいつもと同じ元気な声で話しかけてくれた。その後から、里奈と葵もおはよう、と声をかけてくれる。
「おはよう！　うん、私、すっごく嬉しい！」
「そんなこと言ってー、一番嬉しいのは、鷹取君と同じクラスだっていうことじゃないの？」

咲子のその言葉で鈴花は慌てて首を左右にブンブンと振る。真っ赤な顔をして、目が必死になっている……。
「ほ、本当だよ！　龍也のこともだけど、私、皆と同じで良かった！」
「うーん、それを疑ってる訳じゃないんだけど……」
まあいいか、と咲子は心の中で呟いた。彼女が自分と同じクラスだということを喜んでくれていることに、変わりはないから。龍也のことと自分のこと、どちらの方がより嬉しかったのか、気にならなくもないが……。
「まあ、それを聞くのは野暮、ってもんだもんね！」
咲子はそう言って鈴花の背をトン、と優しく叩くと、担任の教師が入室して来たので席に着いた。

身体測定

「鈴花ー、どうだった？」
「うーん、あんまり変わり映えしないかな……葵ちゃんは？」
「私はがっつり体重が増えちゃったよー！」
新学期に入って最初のイベントは身体測定だった。あちこちで休み中に太ったーとか、背が微妙に伸びた、などという声がしている。しかし鈴華は昨年と比べて特に変わり映えもせず、なんだかさみしい気分だった。まあ、太るよりはいいのだが……。
ふと余所見をして油断していた彼女の手から、健康診断カードが奪い取られる。
「あ、ちょっと、龍也！」
「……去年と比べてちっとも成長してねえな」
怒って真っ赤な顔で彼の手から自分の健康診断カードを奪い返して、彼女は頬を膨らませた。
「別にいいでしょ！　龍也には関係ないもん！　そういう龍也だって、どうせそんなに変わってないんでしょ！」
「そうだ鷹取！　女の子は高校生になったらもうそんなに成長しないもんなんだぞ！　高梨が普通なんだよ！」
彼女に加勢したのは、またしても同じクラスで一年を過ごすことになった小柴だ。その小柴の言葉を受けて、龍也がニコリと笑う。
「だとよ、聞いたか？　お前は一生ぺったんこのままらしいぞ」
「えええ、そんなぁー……」
「あ、ほら、高梨、そんなこと気にする必要ねえよ。な？」
龍也の爆弾発言に落ち込む鈴花を、小柴は慌てて宥めた。それから龍也が、そんな些細なことどうでもいいというようにポツリとつぶやく。
「その方がお前らしくて、いいんじゃないか？　……お、俺はそう思うけどな！」

最後は自分で言っている台詞の恥ずかしさに気付いたのか、少々乱暴に言いながらそっぽ向いてしまった。
「何よそれ！　まるで人がお子様みたいな言い方じゃない！」
しかし、龍也の精一杯の褒め言葉も虚しく、鈍い鈴花にはちっとも褒め言葉だとは思ってもらえなかった……。
「ところで、龍也は結局どうだったの？　背、伸びた？」
「お前、あれだけ一緒にいてわからねえのかよ……」
龍也の呆れ顔に、鈴花はふくれっ面を見せる。しかし何も言葉が出てこないようで、彼女は目線だけでなんともかわいらしい抗議をした。そこに、またしても小柴が助け船を出してやる。
「しかたねえだろ、鷹取。普段から一緒にいたら、目線合わせるのだって徐々に上向くことになるから、普通気付かねえよ」
それだけ一緒にいられるのが羨ましいなと心の底で思いながら、小柴はそう言った。それは仕方のないことだというのはわかっている。二人は同じ家、同じ部屋に住んでいるのだから、どう考えても自分の方が分が悪いのだ……。
「まあ、四センチ程伸びたかな」
「え？　そんなに大きくなったの？　龍也、その内、天井に頭ぶつけるんじゃない？」
「んな訳ないだろ、アホ」
「痛っ！」
コン、と軽く彼がボールペンで彼女の頭をつつくと、彼女はそこを抑えてまたしても抗議の視線を彼に送った。周囲から見れば、二人がお互いをどう想っているのかは、一目瞭然だ。それなのにこの二人が未だ恋人同士でないのは、鈴花の鈍さと龍也の忍耐、あるいは理性というものに似た何かが、歯止めをかけているからだろう。
「っ……」
そんな二人の様子を眺めているのが辛くなって、小柴はそのそばを離れた。自分の方が分が悪いのは、わかっているけれど……。

夢

「るーや、家族いないの？　パパと、ママも？」
回らない口で一生懸命、自分の心配をする彼女……。頷いてやると、彼女はさらに表情を曇らせた。
「寂しくないの？」
寂しくない……なんて言えば嘘になる。ついこの前までは確かに存在していた、温かい場所。彼が、帰るべき家庭（ばしょ）……。たったの一日で失われた、たったの一瞬で失われた、彼の家庭……。
両親は先日、眠っている彼を置いて買い物に出かけた際、飲酒運転の暴走車と衝突し、帰らぬ人となってしまったのだ……。彼は、未だにその事実を信じ切れないでいる。もしかすると、ある日ひょっこりと二人とも元気で現われて、心配かけてごめんね、なんて言いながら、彼の頭を撫でてくれるかもしれない。僅かにだが、まだそんな淡い期待を持っていた。
彼女の問いに答える代わりに、目頭が熱くなる。寂しくない……訳がない。
そんな彼の様子に気付いたのか、彼女は近付いて来て彼の手を握ると、その顔をじっと覗き込んだ。それから、にこりと満面の笑みを浮かべてくれる。
「いっぱい泣いていいよ！　りん、内緒にしてあげる！　しー、だよ！」
人差し指を唇にあてる、お決まりの仕草……。それは、傷ついた彼が一番欲していた言葉だった。今まで溜めこんでいた涙が、どっとあふれ出す。そして。
「じゃあね、りん、大きくなったらるーやのお嫁さんになってあげる！　そしたら、るーやも家族だね！」
最後にそういって笑いかけてくれた彼女の笑顔は、彼にはずっと忘れられないものとなった。

ふと時計を見ると、まだ起床時間には大分早いということがわかった。それでも彼は、ベッドの上に起き上がる。何だかとても良い夢、懐かしい夢を見ていた気がする……。
「あの約束、もうとっくに時効なんだろうな……」
そうでなかったらいいのにな、と思いながらも、彼女の返答はわかりきっているので、問いかけようとは思いもしなかった。少しの間だけ、懐かしい時代に想いを馳せる……。
「龍也の……馬鹿ぁー！」
隣から突如そんな声が聞こえて来たかと思うと、ベッドから飛び降りた音、そして、彼の部屋のドアを力任せに勢い良く開ける音……。そして。
バッチーン！　静かな朝には似合わない音が、彼の部屋に響き渡った。

「な、何それ鈴花、面白すぎっ……！」
昼休み、お弁当を食べながらの彼女の話に、咲子は抱腹絶倒していた。葵と里奈も、咲子程ではないが大爆笑といった状態だった。
「だ、だって、本当にそういう夢を見たんだもん！　で、寝ぼけてて、そのまま龍也に思い切り平手を……」
「普通夢だって気付くでしょ……。相手が中島さんだったならともかく、よりによって私……！　鈴花、それはどう考えてもあり得ないよ！　……ぶふっ」
「咲子、笑い過ぎだよ……」
ようやく落ち着いた里奈が、そう言って咲子の背をさすってやった。それでも彼女は、まだ笑い転げている……。
鈴花が見た夢は、以下のようなものだった。

「龍也ー、委員長会議終わったの？　帰ろうよ！」
彼は役員として委員会に参加しなくてはいけないので、鈴花はそ

の間自分の教室で苦手な数学の参考書と向き合いながら待っていた。
そこに、龍也がやって来たのだった。
「あー、悪い。先に帰ってくれ」
彼は素っ気なくそう言うと、踵を返して教室から出て行こうとする。
「委員会、まだ終わらないの？　それなら待ってるから、気にしないで」
委員会が長引くのは彼のせいではない。それに、彼と別々に登下校だなんて考えられない。今までずっと一緒だったのだし、一人で帰るのは寂しいから……。
「あー、いや、委員会は終わった。けど……」
そこに、咲子がひょっこりと姿を現す。それから、なんと彼女は龍也と腕を組んだのだ！　甘えるように、彼女は彼の腕にしっかりと抱きつく……。
「俺、こいつと帰るんだ。じゃあ」
「え、ちょっと待って龍也、どういう……」
鈴花が呼び止めると、彼らは振り返って、同時ににこりと曇りのない笑顔を見せた。龍也のこんな表情を見れるのは、滅多にない機会だ……。
「ああ、言ってなかったか？　俺たち、付き合うことになったんだ」
「そうだよ、鈴花。よろしくね！」
「えええええーっ？」
頭が真っ白になって、沈んで行く……。彼女は最後にそんな感覚を持っていた。

そこで、鈴花の今朝の夢は終了。龍也とは対照的な、最悪の夢だった……。
「でも、そんな理不尽な理由で思い切り叩かれたのに、怒らない龍也君も龍也君だよね……」
葵がふと苦笑いをしながらそう漏らす。彼女がそう言った通り、

しばらくして完全に目がさめた鈴花が正直に理由を話して謝ったところ、あまり寝ぼけるなよ、とだけ言って、彼はあっさり許してくれたのだ。彼女の頭をポンポンと撫でて、どことなく照れたような、嬉しそうな顔をしながら……。

「だって、それはそうでしょ。鈴花ったら、私は夢の中で焼き餅を焼きました、って龍也君に直接言っちゃったんだから。そんなこと言われたら龍也君はたまらなく嬉しかっただろうねー」

「や、焼き餅って、そんな！　それに、龍也はちっとも嬉しくなかったと思うよ！　だって、朝いきなり平手を受けたんだよ？　それも、力一杯の！」

咲子がそう言ってにまーっと笑って龍也の方を見る。龍也は小柴を始めクラスの男子たち何人かと一緒に、楽しげに昼食を食べていた。こちらに気付く様子はない……。

「まあ、龍也君はちょっと変な趣味があるってことだよ、きっと！」

「いや咲子、そんな訳ないから……」

からからと笑って適当なことを言う咲子には、葵がしっかりとツッコミを入れてくれた。とりあえず龍也は、彼女のそのツッコミのおかげで変態の異名を免れたのだった……。

夢（後書き）

更新が遅れてしまって申し訳ありませんでした。
今回のお話は息抜き的な、彼らの日常風景を書いてみました。
彼らの次の行事は見学旅行（修学旅行）になる予定です。……多分。
よろしければお付き合い下さい。
ここまでお読み下さった皆様、ありがとうございました。

見学旅行1

「修学旅行かぁ……」
「……何回言えばわかる？　見学旅行だって言ってるだろ？」
ほう、と夢見心地な溜息をついて見せる鈴花に、龍也は何度目かわからないツッコミを入れる。
「いいじゃない、ほとんど同じでしょ！」
むうっとむくれる彼女に軽く視線を当てて、龍也はまた部員の名簿と練習メニューに目を戻した。
高体連が終わり、三年生が引退したために、今は二年生である彼らが部活を切り盛りしている。しかも、龍也はキャプテンに選ばれてしまったのだ。面倒事が嫌いな彼としては全力で辞退したかったのだが、鈴花が、すごいね龍也、キャプテンだって！　なんて笑顔で言うものだから、つい引き受けてしまったのだ。そんなこんなで彼は今、家で鈴花と二人、誰をどのポジションに起用するかと、練習メニューの見直しを行っていた。
「まあ大差ないが、今からそんなに浮かれててどうするんだよ？　そんなんじゃ、当日熱が出て行けなくなりました、とかいうのがオチだぞ？」
「……龍也の意地悪」
膨れさせた頬をさらにパンパンにして、鈴花はふいっと顔をそむけてしまった。しばらく静寂が続いてから、龍也が名簿から目も上げずに声をかけて来る。
「……どうせ、いつものメンバーで班になるつもりだろ？　行く場所はお前たち四人が決めちまうだろうし……」
「……まあね」
少し想像してみてから、きっと龍也の言った通りになるだろうと思って鈴花は膨らませた頬を元に戻した。
「でもね、素敵な所がたくさんあるんだよ！　絶対行きたい所がた

くさんあるの！」
「例えば？」
作業をしながら話半分に聞いていると見せかけて、彼は彼女の行きたい場所を密かにチェックしておくつもりだった。
「ほら、皆で行く中では、清水寺とか！　地主神社で縁結びのお守りを買わなきゃ！」
少々心の中で落ち込みながら、龍也は黙って続きを促した。
「それから自由行動の時間で、神戸では観覧車に乗って、神戸港の夜景を見るの！」
「お前、本当に高い所が好きだな……」
龍也の苦笑交じりの言葉に、彼が何を言おうとしたのか察して、鈴花は憤慨した。
「どうせ私はお馬鹿ですよーだ！」
「まだ言ってないだろ？」
真っ赤になって頬をまた膨らませた彼女の頭を、彼は仕方ないな、というように笑って撫でてくれた。

「ね、鈴花！　ここも絶対行こうよ！」
「あ、ここも行きたい！　あと、昼御飯はここね！」
女子四人が、そんなことを言いながらキャッキャしている様子を見て、龍也と小柴は溜息をついた。
「俺たち、選択権がねえな……」
そう机に頬杖をついて溜息をもらした小柴に、龍也は見学旅行のしおりから目を上げて答えた。
「お前、どこか見たい所でもあったのか？　もしあるなら、早めに言っておいた方がいいぞ？　今の内なら、多少は考慮してもらえるかもしれないだろ？」
そして二人でまた彼女たちの様子を見て溜息をつく。
「いや、やっぱり無理だろうな……」
「俺も別に行きたい場所があるって訳じゃないんだ。ただ、当日も

いつもの調子で振り回されるんだろうな、と思って……」
二人でうんうんと頷き合い、また溜息をつく。
「……まあ、あれだ。普段の延長と思って諦めるしかねえだろ。とりあえず、俺はあいつがはぐれて迷子にならねえか心配だ……」
龍也が言うあいつ、とは、もちろん鈴花のこと。自分が目を離さないでいるというのは当然だが、それでも彼女は迷子になってしまいそうで、たまらなく不安だ……。
「俺は高梨が財布とか落としそうで怖えな……」
小柴もそう言って、また溜息をつく。一体、今日一日で何度溜息をつくつもりなのだろうか……。
「ああ、それもあり得そうだな……」
二人は遠い目をして、窓の外を見た。それから、龍也が冗談交じりにポツリと漏らす。
「俺たち、二人で班組てえな……」
その言葉を受けて小柴が苦笑いする。
「そうしたら今度は高梨が心配で心配で、結局はあの班のストーカーすることになるんじゃねえ？」
一瞬の沈黙……。あり得そう、いや、絶対にあり得る。そんなことを考えた二人は、結局彼女たちに振り回される、という道を選ぶ他なかった。
「ストーカーよりは、ついて行く方がまだマシだよな……。……なんか俺たち、あいつの保護者みてえだな……」
「そうだよなあ、陰でこっそりこんなに心配してても、こっちには全然気付きもしないなんて、報われねえよな……」
そう言って男たちは、また二人寂しく溜息をついて、遠い目で窓の外を見るのだった……。

見学旅行2

「うわあー、すごいね！」
舞台の欄干に体を預けて、こちらを眩しい笑顔で振り返る鈴花。それに対して青ざめている人物が、三人……。彼らは今、あの有名な清水寺の舞台の上にいるのだ。欄干から下を覗くなど、恐ろしくて出来そうもない。高所恐怖症の人間ならば、足がすくむ可能性だってある。
「た、高梨、気を付けろよ……」
「……危ないからさっさと離れろ」
小柴と龍也の二人は、そう言って鈴花の体を欄干から舞台の方へと引き寄せた。いつもならそんな彼らの様子を見てからかうはずの咲子だったが、今日に限ってはなぜか大人しい……。
「あー、そっか。咲子、高い所が……フグ、ムゴッ！」
何かを言いかけた葵の口は、咲子の手によってしっかりと塞がれてしまった。しかし、塞ぐ前の部分はしっかり龍也たちに聞かれてしまったようで……。
「おい聞いたか？　小柴」
「おう！　この後の予定は……俺たち、高い所に結構登るよな？高梨の希望で……」
そこで二人が視線を合わせて、ニヤリと笑う。日ごろの恨みを、今回の旅行で晴らそうと言うのだ……。
「……なんか楽しくなってきたな、修学旅行！」
「お前もあいつと一緒かよ……。見学旅行、だろ？」
「いいだろ、どっちでもー！」

その後、清水寺では一時間程の自由行動の時間が設けられて、彼らは鈴花、里奈の希望で地主神社に恋のお守りを買いに来ていた。購入したお守りを見て嬉しそうに笑う鈴花に、咲子が不満気な顔を

する。
「……鈴花はいらないじゃん、お守り……」
そんな彼女を、葵が苦笑しながら宥めた。
「仕方ないじゃん、咲子。鈴花の鈍さは世界一なんだから……。未だに片思いだと思ってるみたいだし……」
そんな発言を聞いて、咲子が決意したというように顔を上げる。
「ようし、こうなったら意地でも実行するわよ、葵！　もちろん両方とも！」
「了解！」
二人で拳を空に高く振り上げ、笑って見せる。そんな彼女たちの様子に、鈴花と里奈はなぜか寒気を感じていた。
「……そう言えば、高橋って、林原に……」
「ああ、どうするんだろうな」
彼が、決めた、俺は修学旅行で告白するぜ！　なんて鼻息も荒く言っていたのを龍也と小柴の二人はふと思い出した。だが、里奈も鈴花と同じように恋のお守りを購入している……。
「高橋、ふられるかもな……」
龍也がポツリと漏らした呟きに、小柴がぷっと吹き出してからツッコミを入れる。
「応援してやらねえのかよ、友達甲斐のない奴だなー……。わからないぞ、何しろ高梨だってお守り買ってるんだぜ？　林原が両想いなのに気付かずお守りを買ったって可能性だって……！」
どんどん小柴の反論の勢いがなくなって行く……。そろそろいいかと思って、龍也は最後の一手を打った。
「お前、自分で言っててあり得ないとか思ってるだろ……」
「……実はそうだ。あれ、もしそうだとしたら林原ってどれだけ趣味悪いんだろう？　とか……」
溜息をついて笑って見せる龍也に、小柴は少々冷たい物言いで尋ねた。
「……そういうお前はどうするんだよ。高梨のこと……」

小柴に言われて、龍也はお守りを咲子と葵にも勧める鈴花の眩しい笑顔を見つめた。見慣れているはずなのに、何度見てもその笑顔に胸が苦しくなる……。

「……どう、しようかな……」

軽く溜息をついて、龍也は彼女たちから視線を反らした。そして、小柴がそんな龍也からも視線を反らした。波乱の見学旅行は、まだ始まったばかり……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0594m/

その手の温もり～今でも、まだ～

2011年11月27日19時56分発行